
Sand Land Story ~砂に埋もれし戦士の記憶~

グーメアー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S a n d L a n d S t o r y ～砂に埋もれし戦士の記憶～

【NZコード】

N 8 6 6 9 X

【作者名】

グーメラー

【あらすじ】

世界を巡る旅を続けていた青年、シロヤと相棒のクロト。一人と一頭が最後に立ち寄った国、バスナダ国。そこでシロヤは、一人の女性を助けた。その女性と出会ったシロヤの運命は、大きく激変することとなるのだった・・・。

入国

「後は・・・バスナダ国だけか。」

森の中の一本道に、青年が馬に乗つて歩いていた。青年の名はシロヤ。どこにでもいる一般的な青年だ。背丈は一般男性と同じくらいで、背中に細身の剣を携えていた。

「バスナダに行つたら名物料理を食べて一泊しようか。スタンプは明日にしよう、クロト。」

クロトと言うのは、彼の相棒とも言える黒い毛の馬の名前だ。決して足の早い名馬という訳でもない、単なる一般的な馬だ。クロトは、シロヤが初めて馬の出産に立ち会つた時に産まれた馬だ。シロヤにとって、クロトは弟のような存在なのだ。

「さあクロト、バスナダの国境が見えてきたぞ。」

「バスナダ国の入国手続きをお願いします。」「おお、久々の入国者か。歓迎するぜ。」

国境にいた中年男性が、書類に色々と書き始めた。

「若いのに世界を巡る旅か・・・流浪の旅かい？」

「いえ、國中のスタンプを集めているんです。」

国にはそれぞれ国を表すスタンプがあり、それを集めて世界を旅する人も少なくはない。シロヤもその一人なのだ。

「んで、今スタンプはどれくらい集まつたんだい？」

そう聞かれたシロヤは、一枚の紙を広げた。

「ひい、ふう、みい・・・ほお！バスナダ以外のスタンプは揃つてゐるのか！？いやあ～この国が最後たあ～嬉しいねえ～！」

中年男性は書き終えた紙をシロヤに渡した。

「まあ砂漠ばつかの国だけじゅっくりしていきな。俺の名前はラン

「ブウだ。なんかあつたらここに来な。」

「ありがとう、ランブウさん。」

シロヤとクロトはゆっくりと進みだした。

砂漠の国だが、国境付近はまだ森地帯だ。森の中の一本道を歩くシロヤとクロト。

「とりあえず宿を見つけよう。確かにこの国の名物は甘砂まんじゅうと・・・」

キヤー――――!

森地帯に響く女性の悲鳴。シロヤは名物料理の思考を止めて、クロトの手綱を引いた。

「いっちの方から聞こえた！行くぞクロト！」

全速力で走るクロト。走りながら、シロヤは背中の剣を抜いた。
「見えた！アレだ！」

シロヤの目線の先に、大きなトカゲが人を襲っている。襲われている女性は、恐怖でさつきのような悲鳴をあげられないみたいだ。大きなトカゲはバシリスク。森地帯に住む低級の魔物だ。

「バシリスク程度ならいいける！行くぞクロト！」

シロヤは剣を低く構え、バシリスクを狙う。狙われたバシリスクは足音でシロヤ達に気付き、すぐさま戦闘モードに入る。牙を剥き出しにし、今にも飛びかからんとしている。

「・・・勝負！」

飛びかかってきたバシリスクを交わし、後ろから剣を背中に突き刺す！

バシリスクは剣を背中に刺されたままの状態で奇声をあげ、そのまま動かなくなつた。

「ふう・・・なんとかいつた・・・。」

剣に刺さつているバシリスクを抜き捨て、襲われていた女性に目を向ける。凛とした目は女性の芯の強さを感じる。

「助けていただきありがとうございます!」

深々と頭を下げ、礼を述べ

「いえ、この辺は危険ですので気を付けてください。しかし何でこんなところに一人で？」

女性は目を瞑じて黙った。言葉を考へてしめた。

「アーティストの心」

女性はシロヤの言葉を聞くと、フジと軽く笑って走り出した。

「結構です！もう安全な場所に来ましたから！」

そう言って女性は走り去っていった。その先には、砂漠と行き交うたくさんの人々の姿があった。

祭典

- ここがバスナタの街か・・・
シロヤは周りを見渡した。

シロヤは周りを見渡した。

もつと建物が点々としている街を想像していたシロヤにとって、行き交うたくさんの人々やたくさんの高い建物、そして目の前に見える大きな城は予想外だった。

「とりあえす・・・宿をとるか・・・。」

「ああ～！やつと休める～！」

宿の一室をとったシロヤは、ベッドに思いつきり倒れこんだ。バスナダ国に来るまで無体だったことに加え、めったにしない魔物退治までやってしまったため、倒れこんだ瞬間に一気に眠気が襲つた。

[Page 10 of 10]

— . . . !

急に目が覚めたシロヤは窓の外を見た。時刻はもう夜で、空の色は真っ黒だ。その下、宿から見れる街は、今が夜であることを忘れるぐらい明るい。窓の外からは小さく陽気な音楽が聞こえ、人々の陽気な声が聞こえてきた。

祭り・祭り！

シロヤは睡氣が残る頭を軽く振って、身支度を軽く済ませて宿を

飛び出した

「ケロト！ 祭りだ祭りだ！ 出店回りするぞ！」
クロトは嬉しそうに足をバタバタさせた。

ケロトは嬉しそうに足をバタバタさせた

よしクロト！ あすは甘碠まんじゃこだ！」
シロヤはクロトにまたがつて走り出そうとした。

その瞬間、

「こらお前！これからパレードカーが来るんだぞ！馬なんかで街中を回るんじゃない！」

近くにいた宿の主人に呼び止められた。

「パレードカー？何ですかそれ？」それを訪ねた瞬間、流れていった音楽がさらに激しくなり、祭りを楽しむ人たちの声が一点に集中した。その先には、夜の街をさらに明るく照らす華やかなパレードカーが走っていた。

「今日は女王様の『帰還記念祭だからな。いつもよりパレードも華やかだ。』

「『帰還記念祭？』

シロヤとクロトは首を傾げた。

「何だお前、よその国から来たのか？今日の昼にシャン女王様が遠征から『帰還したのだ。だから国民は女王様の無事を祝つて』こうしてパレードをしているのだ。」

パレードカーを見上げているシロヤとクロトに向かつて、宿の主人が言葉を続けた。

「パレードカーの上に座つておられるのが、我らがバスナダ国女王、シャン様だ！」

パレードカーの上には、これまた華やかなドレスに身をまとった美しい女性が座っていた。右と左を交互に見て国民に笑顔で手を振つていた。笑顔ながら、凜とした表情が見てとれるのは女王の素質があるからだろう。

そんなことを思いながらパレードカーを眺めていたシロヤ。

「・・・！」

ほんの一瞬、女王様が国民に笑顔で手を振つて居る最中、

シロヤと田があつた。

女王様の動きが止まつた。

「・・・？」

急にどうしたのかと、一部の国民とシロヤが異変に気づいた。パレードカーの上の女王様が、大臣と思われる男に何かを言つている。何か急いでいるような雰囲気を出している女王様に、大臣からマイクを渡された。パレードカーが動きを止めた。

「皆の者！今日は私の帰還を祝したパレードを開いてくれたことに感謝する！しかし、今回私が無事に帰つてこれたのは私一人の力ではない！」

女王様はすっとある方向を指差した。その先には、

「そこにいる黒毛の馬に乗つた旅人の青年は、私が魔の物に襲われていたところを助けてくれた勇敢なお方だ！ぜひとももてなしてあげてほしい！」

女王様の言葉と同時に、その場にいた国民全員がシロヤとクロトに群がつた。

「うわー！ちょっとまつー！うわあああーーー！」

国民に持ち上げられ、ベルトコンベアのように城に向かつて運ばれるシロヤとクロト。そのまま城の前まで運ばれたシロヤとクロトに、たくさんの食べ物を持った人たちが押し寄せてきた。あつとう間にシロヤとクロトの目の前は、たくさんの食べ物で一杯になつた。

まだ状況を確認できずに周りをキヨロキヨロするシロヤと、嬉しそうに食べ物にがつつくクロトに向かつて、パレードカーの上の女王様がさらに言葉を続けた。

「パレードが終わつたら城に来てほしい。改めて礼を言いたい。」

シロヤは遠くからも見えるように大きく頭を縦に降つたのち、ゆっくりと甘砂まんじゅうに手を伸ばした。

「これ・・・食べられるかな・・・。」

招待

豪華すぎるもてなしを受けたシロヤとクロトは、食べ過ぎでふらふらのまま城に入った。

「うわあ～・・・。」

今までの旅の中でも城らしきものに入ったことがなかつたシロヤは、あまりに自分の中の世界とかけ離れた空間に驚きを隠しきれないでいた。

何より一番驚きなのは、王室に続くまでの長い廊下に人の列ができていくところだ。へいしやメイドや学者など、おそらく城に出入りしている人たちだらけ。

「・・・。」

自然と無口になるシロヤ。初めての体験があすきで何も言えなくなっていた。

王室の奥には豪華な椅子。そしてそこに座っている女性は、確かに森地帯で助けた女性だ。しかし、服装がよりも華やかで豪華になつていて、本当に女王であることがつかがえる。

「よく来たな。そなたを心から歓迎しよう。」

重みがある声が部屋に響く。ただの歓迎の言葉だけなのに緊張するシロヤ。額から汗が垂れる。

「ところでそなたは何故このバスナダに来たのだ？」

「えつと・・・実はスタンプを集めてまして・・・。」

声が震えるシロヤとは対称的に、口元を緩ませて話すシャン。

「よしわかつた。今すぐ黄金のスタンプを作らせよ。」

「いやいやいや！押していただけただけで結構ですー。」

慌てるシロヤ。

「そなた、バスナダが旅の最後らしいな。このあとはバスナダに住む気か？」

「いえ、目的も果たしましたし帰郷しようかと。」

元々は農民の父親を置いて出たため、旅が終われば少しは親孝行してやろうかと思っていたのだ。

「帰郷してからは何をするのだ？剣術の指南か？官僚に就くのか？」「いえいえとんでもありません！牛や馬と戯れながら親の仕事の手伝いでもしようかと思つてます。」

シアンは顔を少しだけ歪ませた。

「そなたならば何を立つことが出来るのではないか？」

「いえ、自分は農民生まれの農民育ちですから。」

シロヤは愛想笑いで返すのが精一杯だった。シアンが思つているほど自分は優秀な人間ではない、その事を説明するだけなのに、三頭の牛を引くかのような重労働をしたかのような疲労感が襲う。完全に「女王の威圧感」に萎縮してしまっていた。

「ふむ、ならばどうだ？そなたにぴったりな役職を用意しようつ。「え？」

シアンは椅子から立ち上がり、シロヤに近づいた。

「そなたになら私が自信を持つて任せられる役職だ。」

「あ・・・あの・・・自分は城に仕えるなんて自信が・・・。」
しどろもどろのシロヤの顎に手をかけて顔を近づけるシアン。微笑んだまま、シアンはゆっくりと言葉を続けた。

「どうだ・・・？そなたにしかできぬのだ・・・。」

言葉を失い、口をパクパクさせるシロヤ。

「私の力になつては・・・くれないか・・・？」

心臓が人生最高の高鳴りを繰り返す。出来るならば逃げだしたい。しかし、シロヤは金縛りにあつたかのように動けない。

「・・・女王様。」

急に聞こえた第三者の声。声はシアンの後ろから聞こえた。

見てみると、老人が本を開きながら立っていた。シアンは老人の

顔を見たことがある。シアンと共にパレードカーに乗っていた大臣らしき人物だ。シロヤにとつては救世主だった。

「何だレーグ、今日はパレードで何もないはずだぞ。」

「そのパレードの最後に演説をしていただこうと思いましてね・・・何せ」「帰還祭ですからねえ。」シアンと同じように重みのある声

だが、何かが違う。シアンは、レーグという男に違和感を感じた。

「ならば仕方がない。レーグ！このお方を最上級の客室に『案内して差し上げる。決して失礼の無いようにしろ。』

「御意。」

深々と頭を下げるレーグを背に、シアンは服を直して歩き始めた。すぐさま近くの兵士が回りを固める。

王室を出る間際、シアンはシロヤの方を振り返った。

「今夜じっくり考えてほしい。答えが出るまではこの城に居座るといい。」

優しく微笑んだのか、シアンは王室を出ていった。

「では」「案内しましょう。」

レーグに連れられて、シロヤは奥へと歩いていった。

「ではお連れの馬は私が連れていきましょう。」

振り向くと、銀色の防具をつけた体格のいい兵士がクロトの横にいた。

「では馬はバルーシに任せていきましょう。バルーシよ、くれぐれも失礼の無いようにしろ。」

「御意。」

力強い声と共に、クロトを連れてバルーシは王室を出た。

「では案内しましょう。私についてきてください。」

レーグについていき、シロヤは王室を出た。

「ではこの部屋をお使いください。何かあれば呼び鈴を鳴らしてください。」

「では控えの者があります。」

「わ、わかりました。わざわざありがとうございます。」

深々と礼をして、レーグは部屋を出た。

広すぎる密室には大きなベッド等の様々な物がある。

急に悲しみが沸いてきたシロヤは、すぐさま呼び鈴に手を伸ばした。

「・・・」

チーンチーン！

豪華な空間の中で一人ぼっちになつたシロヤは、寂しさのあまり呼び鈴を鳴らした。

すぐさまドアは開いた。立つてていたのは、身長がシロヤよりも低いが年は同じぐらいのメイドだった。

「お呼びでしょうか、シロヤ様。」

かしこまつた態度にシロヤはまたもや萎縮してしまつた。

「ええっと・・・名前は？」

萎縮したあまり出た言葉は、まるでナンパでもしてゐるかのような質問だつた。メイドは一瞬驚いたような表情を見せるが、すぐさま対応してみせた。

「私はシロヤ様専属のメイドに任命された、クピンという者です。至らぬ点があるかもしだれませんがよろしくお願ひいたします。」

深々と礼をするクピン。シロヤも禮で返す。

「実は砂風呂の準備ができましたので、これからお呼びしようと思つていたのですが、いかがなさいますか？」

砂風呂は、砂漠地帯のバスナダの名物だ。他の砂漠地帯とは違つ、特有の成分が入つた砂風呂は美肌効果が高いと他国でも噂になるほどだ。もちろん、シロヤはバスナダに来てから砂風呂に入ろうと思つていた。

「じゃあお願ひします！」

「ではこちらです、ついてきてください。」

クピンに連れられ、シロヤは城の廊下を歩いた。

その途中、ぶつぶつと咳きながら兵士がシロヤの脇を通つた。誰に聞かせるわけでもない声でぶつぶつと咳く兵士。兵士は、さつきクロトを連れていつた人、名はバルーシだ。シロヤは、レーグにも感じた違和感を再び覚えた。

一度覚えた違和感はどこまでもついた。急に変な緊張を覚えるシロヤ。

緊張を覚えたままのシロヤを、クピンは何も気付かないまま案内する。

「ひづらが砂風呂です。では入る前にお背中をお流します。」

「くつー?」

せつまでの違和感が飛んでいった。

「ふう・・・何か無駄に氣を使った氣がする・・・。」

人から背中を流してもらうなんて初めての経験だったシロヤは、氣を休めるどころの話ではなかった。つるつるになつた肌が、より冷や汗を倍に感じさせた。

「・・・トイレドーだ?」　冷や汗が尿に変わったのか、急にもよおしてきたシロヤ。場所がわからず、成り行きで部屋の外に出てみる。

長い廊下の先、シロヤの部屋から五つほど離れた部屋のドアに、一人の兵士が立っていた。ドアにぴったりと耳をつけている。どうやら盗み聞きをしているらしい。何か殺氣立つてゐる氣がしないでもない。そして周りには誰もない。

「背に腹は変えられないか・・・。」

流石に後ろから話しかけても斬られはしないだろう。勇気を出して兵士に話しかけてみる。

「あの・・・トイレス・・・。」

兵士はひづらを振り返り、手のひらを開いてシロヤに向ける。「待て」のサインだ。

「・・・・・・・よし。」

兵士はしづめじづめじづめしたのち、シロヤの腕を掴んで近くの部屋に入つた。中はどややく会議室らしき場所だった。部屋の中にあつたドアを指差す兵士に会釈をし、シロヤはドアを開けて小部屋に入った。

「・・・・・・・・・ふうー!」

「それではすまなかつた。どうしても聞きたい」とがあつたのでな。

「兵士はシロヤに頭を下げる。

「いや、別にいいですよ。こいつも何かすみません。」

今一人がいる場は、どうやら兵士の休憩室兼作戦会議室らしい。夜も遅いため、一人以外誰もいない。

一人しかいない空間に流れる沈黙。耐えきれなさそりと感じたシロヤは、部屋から出ようとドアに向かって歩きだした。

「ありがとうございました。じゃあおやすみなせ」

「シロヤ様。」

シロヤの言葉を遮るバルーシ。急に顔つきが変わり、口調も重くなる。

「・・・勇敢なシロヤ様になら話せるでしょう。しかし、ここにで聞いたことは他言無用でお願いしたい。」

「・・・・・・はい。」

勇敢な、の部分を訂正する前に肯定してしまったシロヤ。バルーシを取り巻く異様な雰囲気、重々しい空気がシロヤをうなづかせた。バルーシはゆっくりと話を続けた。

「この国には、政治を行つ”バスナダ七人衆”といつ機關があります。最近、その機関が不穏な動きをしているという情報が入つたのです。」

シロヤは瞬時に悟つた。自分は今、とんでもないことに足を突っ込んでいるのではないかと。

「こんなこと、他國の者に頼むのも変かもしだせませんが、ぜひ我々と調査をしていただきたいのです。」

「いやいやー俺は勇敢でも何でもありませんからーただの農民です！」

必死に誤解を解くシロヤに向かつて、何度も頭を下げるバルーシ。

「お願ひします！無理矢理なのは百も承知、しかし、女王様の命も

関わっている可能性がある以上、戦士一人の戦力、学者一人の知恵でも必要なのです。」

必死に頭を下げるバルーシに、シロヤはどうとう折れ始めていた。

「いや・・・でも・・・。」

再びしじどもどろになるシロヤ。

「！――！」

一瞬、バルーシが動いた。背中の剣に手をかけ、闘志を剥き出しここにする。

ビッククリして後ろを振り替えると、ドアの向こうに気配を感じた。「中に誰がいるの〜？」

大人の女性の声だ。それを聞いたバルーシは、戦闘体制を解いてドアを開けた。

疑念

開かれたドアの先にいたのは、ドレスに身を包んだ女性だった。その女性が部屋に入ると、バルーシは胸に拳を当てた。この国の敬礼だ。

「ブルーパ様！夜分遅くに作戦会議室を使つてしまひ申し訳ござりません！」

女性はバルーシに向かつて軽く微笑んだのち、シロヤに近づいた。「あなた、今日シアンに呼ばれてきた旅人の子ね？」

怪しく微笑みながら、女性はさらにシロヤに近づいた。足一つ分くらいの距離まで近づいた女性は、シロヤの顔をジッと見た。

「ふふ、可愛い子ね？私の好みのタイプよ。」

「ここ…ここここ光榮です！」

女性はさらに近づく。シロヤの心臓が再び高鳴る。風呂でクピンに背中を流してもらった時のドキドキとは明らかに違う。女性から感じる香水の香りが、大人の色気を感じさせる。

「ふふふ、うぶな子ね。私があなたを男にしてあげよう、か・し・ら。」

「・・・・・・えええ！？」

一瞬の沈黙のうち、シロヤの頭が真っ白になつた。顔は赤く火照りあがり、頭からは煙が出てるイメージだ。指先と足がカタカタと震える。

女性はシロヤの異変を感じると、笑いながらシロヤの顔に手を当てた。

「うふふ、冗談よ冗談！そんなに堅くならないの！」

笑いながらシロヤの頭を撫でる。撫でながら、女性は後ろのバルーシに目を向けた。

「でも、あなたの嘘は好きじゃないわよ？ね？バルーシ。」

バルーシは口を閉ざした。

「安心しなさい。七人衆の噂は知つてゐるわ。それに、首謀者の田星ももうついてるわ。」

「それは本當ですか！？ プルーパ様！」

バルーシは身を乗り出した。

女性は頭を撫でていた手を降ろし、三歩下がつて静かに答えた。
さつきまでの微笑みは消え、真剣な表情と瞳からは、凜々しさと心の強さが感じとれる。

「私の独自の見解なんだだけね。今回の噂にはレーグ大臣が関わっている可能性が高いわ。」

「レーグ大臣ですか！？」

女性から発せられた言葉には、シアンにも感じた特有の重みがあつた。そして発せられた言葉の内容に、バルーシとシロヤは目を丸くした。シロヤは大臣と話したことは一回しかないが、不審なことをするような人には見えなかつた。

「シロヤ君、人は見た目では判断できないわよ？ 忠誠心が高い人ほど怪しい、つてこともあるのよ？」

さつきからシロヤの心を読んでいるかのように話す女性。そしてバルーシが敬称をつけて話す女性。彼女は何者なのか、と疑問に思うシロヤ。

「あら、そういうえば紹介がまだだつたわね。私はプルーパ。バスナダ国の第二女王、シアンの姉つてところかしらね。」

「シアン様の姉・・・？ 第二女王！？」

その事を聞いた瞬間、シロヤは後ろに飛び退いて気を付けをした。

「も！ 申し訳ありません！ 第二女王様とは知らずに」

「ああ、気にしなくていいわよ。私も改まるるのは苦手だからね。」
シロヤの口に指を当て、言葉を遮るプルーパは、シロヤの頬に手を当てて静かに言った。

「話は聞いたと思つけど、今は私に氣を使うよりもシアンを気にか

けてあげて。この噂、下手すればシアンの命すら危うくなるかもしれないの。だから、あなたがシアンを守つてあげて

「私からもお願ひしたい！」

バルーシが頭を下げる。王族の命がかかつてゐるとなると、断るに断れない。

「わ・・・わかりました。出来る限りのことはやつてみます。」

シロヤはゆづくり頭を縦に振つた。

「ありがとうございます！ シロヤ様！」

「本当にありがとうございます、シロヤ君。シアンのこと、よろしくね。」

バルーシが何度も頭を下げ、ブルーパが再びシロヤの頭を撫でた。

「シロヤ様！ どこにいらしてましたのですか！？」

部屋の前にいたクピンが、シロヤを見つけて駆け寄つた。

「すいません・・・、ちょっと夜風に当たりたくて外に・・・。」

「それならば一言断つてからお願ひします。本当に心配したんですね。」

少し頬を膨らませるクピン。

「そろそろ消灯の時間なので、お部屋に入つていただきます。」

「ああ、もうそんな時間ですか。じゃあ寝させていただきます。」

「そうですか。ではシロヤ様、おやすみなさいませ。」

軽く礼をして、クピンは部屋を出ていった。

再び一人になつたシロヤ。しかし、今は一人で頭の中を整理したかった。シロヤは豪華な布団に潜つて、せつときあつたことを思い返した。

「女王様の命を守る・・・か。」

思えば、長い旅の中でこんなことは一度もなかつた。城に呼ばれたり、豪華なおもてなしを受けたり、女王様の命を守る大役を任せられたり。

「俺に・・・務まるのかな・・・。」

ただの農民一族の自分に務まるのか、悪い方向にしか頭が働かない

いシロヤ。

やがて、旅の疲れ、初めてのおもてなしを受けたことでの疲れ、大役を任せられたことの疲れで、いつの間にか眠りについてしまった。

起床

朝、爽やかな砂漠の朝日が窓から降り注ぐ。窓の位置が、ちょうど朝日を枕元に降り注がせ、爽やかに目覚めることが出来る。と、ここまでがレーグから話された部屋の説明だ。しかし、爽やかな朝日はシロヤに降り注いでなかつた。

「・・・？」

ゆっくりと目を開けると、窓を誰かが遮つているようだ。遮つている人は、シロヤの頭を撫でながら、顔を真上からずっと見つめていた。

「ん？ 起きたか？ おはよっ。」

微笑みを浮かべ、頭を撫でながら、目覚めたシロヤに声をかける。シロヤの頭には、柔らかい枕の感覚があつたが、横を見てみると、昨日使っていた枕が無造作に転がされていた。じゃあ今、自分の頭の下にあるのは何なんだろうか・・・。

まだ状況を理解できないシロヤ。頭の中で出した結論は

「夢・・・か。」

再び目を閉じるが、目覚めてから時間が経つたシロヤは思考が復活していた。

再び目を開けたシロヤは、状況を瞬時に確認した。今、シロヤは頭を撫でながら膝枕をさせていた。そして、膝枕をしている人物はどうした？ そんなに見つめられても照れるではないか。

「・・・シ！ シアン様！」

シアンは、微笑みながらシロヤを見つめていた。対称的に、シロヤの顔はどんどんと焦りの色が強くなつた。

「どうした？ 私の膝枕を気持ちよくないか？」

「いーいや！ そういう訳では！ すいません！」

慌ててベッドから飛び降りようと/orするシロヤを、シアンが体で制止させる。強引に頭を胸に持つてかれるシロヤ。

「そんなんに堅くなるな。今は私が王族とこいつとは忘れるがいい。」「あ・・・は・・・はい。」

しばらぐシャンに甘えさせられるシロヤ。再びまどろみ始めてきたシロヤは、強引に眠気を圧し殺してシャンに話しかけた。
「そりいえばシャン様、俺にぴったりの役職つていいたい・・・。」「おお、話すのを忘れていた。何にせよ、話がわからなければ決断なんて出来ないな。」

シャンは撫でていた手を止め、凜とした瞳でシロヤを見つめながら、ゆづくりと語りだした。

「これは、そなたにしか出来ないことだ。」

「でも・・・俺は頭が良いわけでもないし、剣の腕が良いわけでも・・・。」

「そんなことではない。そなたにしかできぬ、そなたにこそ相応しいことだ。」

シャンは一呼吸置いたのち、目を閉じて再び語りかけた。
「そなたには、私のそばにずっといてほしい・・・。」「・・・え！？」

シロヤは驚きの声を上げた。しかし、シャンはそのまま言葉を続けた。微かに頬が赤くなっている。

「私と共に・・・この国を・・・支えてはくれぬか。だから・・・私と・・・。」

声を次第に籠らせる。言葉を発するのをためらつかのよひに、シャンは何回も体を揺すった。

「・・・シャン様？」

シャンは頬をどんどんと赤くしていった。一瞬見えたシャンの女の姿に、シロヤはドキッとした。

「・・・女王様。」

急に割り込んできた第三者の声。シロヤはこの声に聞き覚えがあった。昨日の夜中、プルーパが話していた最も怪しいといわれる人

物だ。

「レーグ！？何故お前がここにいる！？」の部屋はクピンが担当しているではないか！」

シャンはシロヤを抱いたまま怒鳴った。よほど、一一人きりの空間を邪魔されたことが腹立たしいのだろう。

「そんなに怒らなくても・・・朝食が出来ましたんでお呼びしに来ただけですよ。」

レーグは悪そうにいつたが、顔は全然悪びれている様子はなかつた。むしろ、良いタイミングに来たとでも言わんばかりの表情だ。それが、シャンを怒らせた要因の一つでもあるようだ。

「それならば朝食をここに一人分持つてこい！私はこのお方と二人でいただこう！」

「いやいや、もうローライエ様もブルーパ様もいらしていますので、残りはお一人だけなんですよ。」

女王を怒らせていても関わらず、全く動じていない。シャンは少しムツとした表情のまま考え込んだ。

「む・・・一人が待っているのならしょうがない・・・。続きは朝食後に話そう。」

シャンはシロヤを静かに離し、早歩きで部屋を出た。そしてそのあとをレーグが追う。

「ではシロヤ様、お早めにいらっしゃい。ヒヒヒヒヒ。」

最後の含み笑い、シロヤはレーグに言い様のない寒気と不気味さを感じた。

「・・・」

ここで考えていてもしょうがないと、シロヤは考えるのをやめて部屋を出た。

その瞬間

「キヤツ！」

「うわあ！」

ドアを開けて部屋を出てすぐ、シロヤは誰かとぶつかった。

ぶつかつた少女は黄色く長い後ろ髪を一つにまとめていた。華やかなドレスに身を包んでいて、背丈はシロヤよりも小さい。見た感じ、歳もシロヤより下だらう。

「あれ？ もしかして・・・シロヤ様！？」

少女はシロヤを見るなり、目を輝かせて近づいた。

「え？ そうだけど・・・」

「わあ！ お姉様を助けてくれたんだよね！」

少女はシロヤに抱きついた。その少女の言葉の中に、シロヤははいち早く気づいた。

「お姉様！？」ていうことは君、いやあなたは！？」

「うん！ 私のお姉様は第一女王様と第二女王様なんだよ！ 私も第三女王なの～！」

抱きついたまま少女はシロヤに笑顔で答えた。逆にシロヤはまたもや焦りの顔になる。

「シロヤ様～！ ご飯の時間だから食べにいこ～！」

「う・・・はい。」

シロヤは少女に抱きつかれたまま、朝食の場を目指した。

「そういえば名前言つてなかつたね！ ローイエつていいま～す！」

「ローイエ・・・様？」

「様いらないよ～！」

いつの間にかシロヤの前に来たローイエは、シロヤの胸に顔を埋めた。

ローアイエに抱きつかれたまま、シロヤは朝食の場についた。席にはすでにシアンとブルーパが座っていた。そしてシアンの傍らには、怪しい笑みを浮かべるレー^グがいた。

「あらあら、一人とも仲良しね。」

まるで母親が子をからかうように笑うブルーパ。対称的にシアンは顔を曇らせ、なんとも言えない視線をシロヤにぶつける。シアンの変な視線に、シロヤは変な汗をかき始めた。

「・・・ハハハ。」

「シロヤお兄様～！」

シアンの席の隣で朝食を食べる。今までの旅ではお目にかかるような豪華な朝食。慣れない食事で、シロヤは食があまり進まなかつた。

「む？ 食べないのか？ そなたは食が細い方とは知らなかつたぞ、すまなかつた。」

「いえいえいえ！ 昨日たくさん食べ過ぎたから食べられないんだと思ひます！」

王族に謝られるだけで汗びっしょりになるシロヤ。それを見てクスクスと笑うブルーパとローアイエ。三人姉妹にとつては久しぶりの男性との食事だ。

「・・・女王様。食事中申し訳ございません。以前の会議後にまとめられた予算案です。目を通しておいてください。」

急に入ってきたレー^グに、ブルーパとローアイエは一瞬顔を曇らせた。

「む？ そうか。見せてもらおつ。」

軽く口拭いて、シアンはレー^グから一枚の紙を受けとる。端から端まで紙に目を通したのち、シアンは紙を下ろしてレー^グを見た。

紙に隠れていた顔は、怪訝そうな顔だった。

「レーグよ。」

「はい。」

昨日感じた言葉の重みよりもはるかに重い。怒つてこむよつた声だ。しかし、レーグは動じていない。

「この予算案はバスナダ七人衆全員の意見を取つたのか？」

「いえいえ、七人衆に通す前に女王様に見せてからの方が票は集まりやすいですから。」

「ならば、今すぐにこの予算案を書き直せ。この予算案は却下だ。紙をレーグに叩き返すシアン。」

「何故です？どこにも問題はないはずでは？」

「問題点は一つだ。この国にそれだけの軍事費用はいらない。」

レーグは紙をしまって、シアンに問い合わせる。

「何故です！？他国が攻めこんできた事を考えれば、例年の軍事予算よりも倍以上の予算が必要なのですぞ！」

「世界は今平和だ。他国が侵略田舎でに攻めこむことなどない。武器はあるから使つてしまつのだ。この国を武装国家にしてはならなければ、軍事予算は微々たるものでよいのだ。」

レーグの言い分も分かるが、シアンの意見も全うだ。何より国民はシアンの意見を選ぶだろう。

現にこの国には、他国に敵視されるような要素がないため、いったて平和である。シアンの意見は、平和なこの国、そしてこの国に暮らす人々のための意見なのだろう。

しかし、レーグは食い下がる様子を見せなかつた。

「しかし…これからどのような事件が起こるか分かりません！何にしろ武装しておくに越したことは！」

たかが大臣が、ここまで女王に食いかかつてくるだらうかと、シロヤは疑問に思つた。それを読んだかのように、ブルーパはシロヤに視線を送る。これが、レーグが怪しいと言つた要因、王族しかわからない要因なのだろう。

「とにかくこの予算案は却下だ。朝食後に七人衆を集めて会議を行おう。」

シアンは席を立ち、レーグを連れて部屋を出ようとしました。

「すまない・・・夜にもう一度話そう。」

シロヤに一瞬語りかけ、シアンとレーグは部屋をあとにしました。

「また予算案却下されたね。しかもこの間と同じ理由で。」

「レーグも憲りないわね。シアンが軍事予算拡張に頷くわけないのに。」

ブルーパとローエイエは同時にため息をついた。だんだんシロヤの中で、レーグが怪しい人物になつていった。

重い空気の朝食の場、誰もしゃべらない中、ローエイエが口を開いた。

「シロヤお兄様！今日私と一緒に町を散歩しませんか？案内しますよ～！」

「あら面白そうね。私も一緒に行こうかしら。」

元々今日は町を探索する予定だったシロヤ。

「はい、じゃあ・・・一緒にお願ひします。」

「うわあ～い！三人でお散歩～！」

両手を上げて喜ぶローエイエ、その横ではブルーパが心配そうなシロヤを見つめる。そつとシロヤに近づいて、ブルーパは耳元で小さく話しかけた。

「ね？怪しい理由がわかつたでしょ？」

「だけど・・・。」

「そうね、また断定するには証拠が不十分すぎるわ。会議での調査はバルーシと他の兵士達に任せておきましょ。」

バルーシなら任せられると言つた感じのブルーパ。シロヤは一つの疑問を覚えた。

「あの・・・バルーシさんの役職って・・・？」

「バルーシはこの国の兵士団長なの。」

なるほど、兵士団長なら信頼も厚いと、シロヤは頭の中で完結させた。

「お姉様～、何話してるの～？」

「いえ、ローイエには関係無い大人の話よ。」

「う～！私も大人だも～ん！」

「大人なら好き嫌いしないで何でも食べなさい。」

「ごちそうさまでした～！」

ローイエは席を立つて、小走りで部屋を出た。

朝食後、シロヤは身支度を済ませる。王族と一緒に街散策など考
えてもみなかつたため、楽しみと緊張で変な顔になる。

「落ち着け・・・俺、落ち着け・・・。」

そうだ、別に何かするわけでもないんだ。ただ一緒に散歩するだ
けだ。シロヤは頭の中で必死に自分に言い聞かせる。

「シロヤお兄様～！準備できたよ～！」

ドアを開けて、ローアイエとブルーパが入ってきた。さつきまでの
ドレスから一転、ローアイエは外出用の地味な服に身を包んでいる。
一方ブルーパは、外出用にしては立派なドレス姿だった。

「あの・・・ブルーパ様？ ドレスで外に出られるんですか？」 ブ

ルーパは微笑みながらシロヤの頬に手を添えた。

「女はいつだつておしゃれしたいのよ。特に男性と歩くときなんか
には・・・ね。」

ブルーパは軽くウインクをした。

「じゃあシロヤお兄様！ 行きましょ～！」

「うわあ～ローアイエ様！」

ローアイエはシロヤの腕にがっしりと抱きついた。そんな一人の様
子に微笑みながら先を行くブルーパ。

「もう～～！ 様つけないでよ～～！」

「改めて見ると、大きい城だな～！」

シロヤは後ろにそびえる城を見上げた。昨日、自分はここに泊ま
つていたのが嘘のようだった。

「シロヤ君、君の相棒が待ってるわよ。」

城に見とれているシロヤの後ろには、昨日バルーシが連れていつ
たクロトの姿があった。

「クロト！何だか久しぶりに感じるよ！」

クロトに抱きつくシロヤ。クロトは何事かと首をかしげた。しかしシロヤはお構い無しに抱きついた。

「よしクロト、街散策に行くぞ。」

クロトに乗るシロヤ。

「シロヤお兄様、私もクロト様に乗りた～い！」

キラキラした笑顔で懇願するローエに、クロトは「任せておけ！」と言わんばかりにしゃがみこむ。

ローエがシロヤの後ろに乗ったのを確認したクロトは、再び立ち上がり歩きだした。

「ふふ、ご主人様と同じで可愛い馬ね。」

歩くクロトの隣で、ブルーパが微笑んだ。

「あ！昨日女王様が言つてたシロヤ様じやないか！？」

「その後ろつてローエ様じやない！？」

「ブルーパ様も一緒だ！」

街に入ったとたん、国民が三人を見てざわめいた。当然だ、女王一人と昨日のパレードでの注目になつた人が一緒に歩いているのだ。

「ふふ、シロヤ君もすっかり街の人気者ね。」

ブルーパがシロヤに言った。今までの旅で注目を集めたと言つたら、クロトが露店の売り物を勝手に食べた時くらいだった。今までとは注目のそれが違うため、シロヤはまだ慣れないでいた。

「ああ！あっちから砂胡椒のいい匂いがするよ～！」

ローエが一つの露店を指差した。すると、クロトがその露店へと歩くコースをチエンジした。

「うわあクロト！どこ行くんだよ？」

クロトにどうては周りの扱いとかは関係が無い。ただ求めるのは「美味しいもの」だけだ。

ローエの話を聞いて、「あの露店には美味しいものがある」と

認識して、勝手にルートをチエンジしたのだ。

「まったく・・・しようがないな、クロトは。」

このぐらいなら普段の旅でもよくあることだ。シロヤは諦め、砂胡椒でこんがり焼かれた砂豚のステーキの露店に導かれた。

「おじさん！ 砂豚のステーキください！」

「へ！ へい！ 女王様とシロヤ様のために最上の物をご用意いたします！」

すぐさま露店のおじさんが調理にとりかかる。

テンションが上がっているローラーとクロトの横で、ブルーパは小さくおじさんに呟いた。

「私はいらないわ、これ以上・・・増やしたくないから。」

内容が聞こえたシロヤは、とぼけたように聞いた。

「ブルーパ様、気にしてるんですか？ 体

ガスツ！

「いてえ！」

足を思いつきり殴られるシロヤ。殴ったブルーパの顔は笑顔だったが、変な威圧感があった。

「女性のトップシークレットよ？ シ・ロ・ヤ・く・ん。」

今まで以上の寒気と冷や汗がシロヤを襲った。

「ここが観光名所のバスナダ砂丘ですか・・・。」

街を離れて、シロヤ達は街外れの砂丘までやつて來た。見渡す限りの砂丘。広大な砂漠は、目印が無ければ迷つてしまいそうなくらい広い。それでいて、砂漠は穏やかだった。

「昔はね、この国は争い事が絶えなかつた国だつたのよ。」

ブルーパが静かに語つた。シロヤは、ブルーパから放たれている不思議な感覚に魅了され、話に聞き入る。

「今でこそこんな何もしない穏やかな砂漠だけど、こいつなつたのは何人もの犠牲があつたからなのよ。」

「犠牲？」

「そうよ。今も砂漠にはたくさん的人が眠ってるの。多分、その人たちもこの砂漠の姿がずっと続くことを祈ってるんじゃないかしら。」

シロヤは、朝食の時のシアーンの意見が正義のような気がしてきた。眠っている人たちは、この国が争うことのみを目的に武器を持つことを見んではないだろう。そう思ふと、レーグの意見が何だか腹立たしく思えてきた。

「だから・・・ね。シロヤ君が決断してくれたことで、この国の人があずつと笑顔でいられるかもしれないのよ。」

決断が正しかったのか。ということは夜中に何度も悩んだ。しかし、プルーパの話を聞いて、自分の中で踏ん切りがついてきた。

「ふふ、良い顔してるわよ。シロヤ君。」

微笑みながらプルーパはウインクをした。

「クロト様！ 美味しいね～！」

二人の横では、ローイエとクロトが露店で買った肉を食べてる。難しい話よりも美味しいものの方がいいらしい。

「気楽な子達ね。国が動くかもしぬないって言つのに。」

自然と笑いが込み上げてくる二人。いつの間にか、一人も深く考えるのをやめていた。

シロヤは笑いながら周りを見渡した。

「アハハハハ・・・ハ・・・・」

シロヤは笑いを止めた。見渡す限りの砂漠、点々とある砂丘の目印以外、何もなかつたはずだつた。もちろん、人影なんてものは存在してなかつた。

ふと視界に一瞬見えた人影、それをシロヤは見逃さなかつた。

「あれは・・・まさか！」

シロヤは駆け出した。思考よりも体が先に動いた。シロヤが駆けいった先、大きな砂丘に遮られて見えなかつた先には、砂漠とはかけ離れた森地帯が広がつていた。

そしてその先、森地帯に入ろうとしている人物。森地帯に入るにはあまりにもかけ離れた服装だ。

間違いない。朝、シアンに食つてかかった人物だ。遅れてきたプルーパも人物を確認する。

「あれつて・・・。」

「ええ、間違いないわ！」

二人は森地帯に入ろうとしている男 レーグ大臣の姿を確認した。

森地帯に入つていくレーグを確認したシロヤとブルーパは、目を見合させた。

「明らかにおかしいわ・・・大臣が森地帯に一人で入るなんて。」「それに・・・入る前に周りを確認してました。人目を気にしているんでしょうか？」

レーグは明らかに拳動不審だつた。森地帯に自分が入ることを他人に知られたくないのだろうか。

考えている一人に、後ろから一人を呼ぶ声が聞こえた。

「シロヤ様～！ブルーパ様～！」

声の主が後ろから走つてくる。声の主はバルーシだつた。慌てたような表情で、顔を汗だくにしていた。

「バルーシ！まさかあなた、レーグを追つて？」

「はい！会議が終わると同時に、誰にも言わず護衛も無しに城を出でていきました。」

どうやらレーグは、自分の行動を人に知られないように徹底している。不審な動き、怪しい噂には、レーグが何かしら関わっている可能性が非常に高いと三人は踏んだ。しかし、まだ証拠は不十分だ。

「バルーシさん、俺、レーグを追つてみます。」

口を開いたのはシロヤだつた。バルーシは慌ててシロヤを止める。「無茶だ！この先は未開拓地帯だ！何が出てくるかわからないぞ！」「でも怪しいなら確かめるべきです！どんなに危険でも行つてみましょう！」

バルーシを説得するシロヤ。その瞳には熱意が秘められていた。その熱意が伝わったのか、ブルーパが一步前に出た。

「私もシロヤ君の意見に賛成よ。今動かなければ解決なんて程遠いわ。」

二人の熱意に押され、バルーシは唸りながら頭を縦に振つた。

「ん~？バルーシいつ来たの~？」

バルーシの後ろから、食事を終えたローエとクロトがのんきにやつて來た。

「ローエ、今からシロヤ君と行かなきゃいけない所があるの。」「だからクロト、ローエ様と城に帰つていってくれ。」

ローエは不満そうな顔をし、クロトはシロヤを心配するような瞳で見つめる。おそらく今から危険な所に行くのだろうと、直感で感じ取つたのだろう。

「大丈夫だ！ブルーパ様に何かあつたら俺が守ります！」シロヤは肩の剣に手をかけて強氣で言った。

「・・・シロヤ様がそこまで言つなら大丈夫かな？」

「シロヤ様を信じよう。シロヤ様とブルーパ様なら大丈夫だ。」バルーシはローエを励ますように言葉をかける。

それで安心したのか、ローエは静かに首を縦に振つた。

「ありがとう、ローエ。」

笑顔のローエの頭を撫でるブルーパ。

「ブルーパ様、行きましょう。」

森地帯に入つていくシロヤとブルーパを、ローエとクロトは心配そうに見つめていた。

未開拓地帯は、国境近くの森地帯とは格が違つていた。国境近くの森地帯はまだ整備がされていたが、未開拓地帯はその名の通り何も手がつけられていなかつた。

大きな岩や見たことない植物が入り乱れる道を歩く一人。

「こんな先に・・・何があるんでしようか？」

「レーグのことだからろくなものじゃないわよ。」

緊張するシロヤとは対称的に、まるで慣れたように道を進むブルーパ。どんどんと二人の差は離れていった。負けじと気合いで追いかけるシロヤ。

ふと、ブルーパが歩くのを止めた。何事かとシロヤは近づいてプ

ルーパに訪ねる。

「ブルーパ様？何かあつたんですか？」

「……………来る！」

ブルーパが今まで見たことないようなオーラを放った瞬間、木々が意思を持ったように動き出した。木の枝が伸び、今にも一人を貫かんばかりの勢いで動き回る！

「う！うわあ！」

シロヤは尻餅をついた。今までの旅で見たことない相手だ。肩から剣を抜くが、剣を持つ手はカタカタと震え上がる。

一本の枝がシロヤめがけて伸びる！

「うわあああ！」

シロヤはかろうじて受けたものの、今まで感じたことのない力に、全身が震え上がるほど恐怖が襲いかかる。

それを狙うかのように、シロヤを狙つて再び枝が伸びる。シロヤは思わず目を閉じた。

「……………？」

訪れない痛み。シロヤは目を開けて目の前を確認する。

枝は自分の目の前で止まっていた。そして枝には、三本の短剣が刺さっていた。

「シロヤ君！大丈夫？」

シロヤの横にいたブルーパは、切っ先が眩しいくらいに光輝く短剣を両手に持っていた。持っている短剣と枝に刺さっている短剣が同じなのを見ると、どうやらシロヤを助けたのはブルーパのようだ。

「シロヤ君、今すぐ下がって。」

凛とした声に押され、シロヤは後ろに下がった。

プルーパはシロヤの位置を確認すると、シロヤに向かってウインクをした。シロヤには今のウインクが、「安心してね」と言つているように見えた。

動き回る枝と向かい合つプルーパ。しばらく向かい合つたのち、プルーパが先に動いた。

「・・・？」

プルーパの動きは、戦士のような動きではなかつた。言つなれば、踊り子の踊りだ。まるで舞踊のように華麗に舞うプルーパ。舞いながら、向かつてくる枝を華麗に避けている。

そして一瞬見えた隙、ほんの一瞬の内に、プルーパは動き回る枝の奥、木々の本体を狙つた。

プルーパが放った短剣は、枝の本体に直撃した。

その瞬間、枝が苦しむように暴れまわった。周りの木々をなぎ倒すかのように、枝は木の幹にぶつかっては落ちていった。

プルーパとシロヤは、枝を何とか避けながら先に進もうと走る。

「・・・！」

先に走るプルーパを追うシロヤ。暴れまわる枝の本体の横を走り抜けようとした瞬間、シロヤは森の先に人の姿を見た。

奇妙な人だ。羽衣のように透き通ったドレスに身を包んだ少女。最大の特徴は、頭の上には綺麗で大きな花があり、少女の肌が森のように綺麗な緑色だということだ。

少女は走り抜けるシロヤを見つめていた。そして少女の姿を確認したシロヤ。二人の目が合った瞬間、少女に向かつて暴れまわる枝が襲いかかった！

「あ！危ない！」

シロヤは叫ぶと同時に逆走した。自分の命が危ないとと思ったのは、少女に向かつて走り出してからだった。

「シロヤ君！？」

異変に気づいたプルーパが後ろを確認して叫んだ。

枝は高速で少女に向かつて伸びる。シロヤも全力だが、枝の方が速かった。間に合わないと悟ったシロヤは、我が身を弾丸にするようく頭から飛び込む。全力で地面を蹴つて少女に手を差し伸べる。瞬間、枝は少女がいた先の木を幹を貫いた！

「シロヤ・・・君？」

プルーパは走つて確認に向かつた。

「いて・・・。」

シロヤは枝を交わして、少女を胸に抱いたまま倒れていた。

ほつと胸を撫で下ろすプルーパだったが、直後、さらに枝がシロヤと少女に向かつて伸びた。

「シロヤ君！ 危ない！」

倒れまま動かないシロヤに伸びる枝。プルーパが短剣を構えた直後、枝はその動きを止めた。

見ると、少女が枝に手を伸ばしていた。まるで少女の言つことを聞いているかのように、枝は少女の前で止まっていた。

「あなた少し・・・おいたが過ぎたわよ？」

少女の手の先が淡く光つたと同時に、枝、そして枝の本体の木が瞬時に枯れ、腐り落ちていった。

「いてて・・・何があつたんだ？」

起き上がったシロヤは、腐り落ちた枝を見て呟いた。腕を押さえているシロヤに、少女はやさしく声をかけた。

「私を守ってくれてありがとうね。おかげで助かったわ。」

少女はシロヤの腕を軽く触る。走つてシロヤの元にやって来たプルーパが、少女に声をかけた。

「あなたもしかして・・・精霊？」

「ええ、そうよ。私を助けてくれるなんて物好きな人ね。」

少女は軽く笑つてシロヤを見つめた。

「精霊？ 普段は姿を隠していて人間には見えないって聞いていたけど・・・？」

「この辺は人の通りが少ないし、姿隠すのって結構疲れるよね。」

少女はクスッと笑つたのち、思い出したように呟いた。

「でも最近、変な男がよくここを通るのよね。なんか呟きながら奥の方に進んでいつてるわよ。」

「怪しい男！？ その男、どこに向かつてるかわかる？」

プルーパは食いかかるように少女に迫つた。おそらく、怪しい男

というのはレーグのことだろう。

「わかるわよ？ 行きたいんだつたら案内するわよ？」

「本当に！？じゃあお願ひします！」

シロヤは少女に頭を下げた。その瞬間、腕に激痛が走った。さつき少女を助けたとき、腕から着地してしまったため小枝が刺さってしまったのだろう。

「あなた・・・怪我してるわよ？まずはその怪我を治してあげるわ。」

そう言つと、少女の目線の先、森の奥から透き通るドレスに身を包んだ少女がやってきた。前髪で目が隠れていて、助けた少女よりも肌の色が薄い。森のよつな深い色ではなく、草木のように淡い緑色だった。

「ああキリミド、ちよづよかつたわ。この人の腕を治してあげて。」

そう言つと、少女はシロヤの腕に手をかざした。少女の手の先が淡く光ると、シロヤの腕から痛みが無くなつていつた。光が完全に消えると同時に、シロヤの腕は正常に動くよつになつた。

「治りましたがあんまり無理はしないでくださいね。」

少女はシロヤの腕を撫でた。

「わかつた、ありがと。」

「じゃあ行くわよ。キリミド、あんたも来なさい。」

少女一人を前にして、シロヤとブルーパは森の奥を目指した。

「ああ、紹介がまだだつたわね。私はフカミ、よろしくね。」

「えつと・・・私はキリミドつていいます。姉を助けていただきありがとうございました。」

「ええ！一人つて姉妹なの？」

「別に珍しくないわよ。精霊にだつて兄弟姉妹はいるものよ。」

驚くシロヤに、フカミとキリミドはクスクスと笑つた。

「見えたわよ。あれが怪しい男が毎回来ている場所よ。」

森の奥深く、太陽の光が届かない暗い森の中に、大きな教会が建つていた。

教会

森にたたずむ教会は、長い間使われていなか、朽ち果ててしまっていた。あちこちの壁や窓は砕けていて、さらに壁には薦が大量に付着していた。

「こんなところにレーグ大臣が……？」

シロヤは教会を再び見た。対してブルーパは、教会の壁を触りながら呟いた。

「ここ、バスナダ国が昔、軍事国家として発展していた時の名残のようね。森地帯の植物を兵器に変える儀式をしに来ていたと言っていた場所よ。噂には聞いていたけど、本當にあるなんてね……。」

「昔って言つたら……汚染植物を人工的に生産していた時代ね？あの時にこの森を使われたから、さつきみたいな子が出来たのね。」

ブルーパに続いて、フカミが呟いた。

さつきみたいな子と言つのは、シロヤたちを襲つたあの木の事だらう。

「バスナダ国が軍事国家……？ 汚染植物……？」

「信じられないと思うけどね。先代のバスナダ国王は就任と同時にこの国の軍事予算を10倍にしたのよ。」

「10倍！？」

シロヤは目を丸くした。今この平和なバスナダ国を見ていると、とても軍事国家として成り立つていたとは思えなかつた。

「それで、バスナダ国特有の植物を兵器に変える計画を実行しようとしたの。この教会はその計画の名残ね。昔はここで植物兵器を作つていたのよ。」

「！！！何か来る、隠れて。」

キリミドがブルーパとシロヤを引っ張る。四人は、近くの茂みに身を隠した。

しばらくしたのち、教会から男が一人出てきた。

「あれは・・・。」

「間違いないわ、レーグね。」

レーグは教会を見上げて、何かを咳き始めた。シロヤは聞き取ろうとしたが、距離が遠く、草木のざわめきがレーグの声をかき消して、こっちまで届かない。

しばらく咳いたのち、レーグは来た道を戻つていった。

「よし、入るなら今よ。行きましょう。」

先陣を切つてプルーパが教会に入り込む。遅れてシロヤ、フカミ、キリミドが入つていった。

中は外よりも朽ち果てていた。椅子はボロボロ、わずかな光すら届かない真っ暗な空間。奥に見える微かな光は、どうやら蠟燭の火のようだつた。

「レーグがここに来た目的は何なんだろう・・・。」

「さあね。古臭い奴だと思ってたけど、まさか先人たちの知恵でも借りに来ているのかしら。」

かつてここでは、軍事的植物兵器を作つていたという。しかし、表面上はただの教会なため、蠟燭の火以外には何もない。

ふとシロヤは、足下の何かに目をやつた。

「・・・これって、蔓?」

「それが汚染植物の一部よ。」

汚染植物、さつきもフカミが言つていたが、シロヤには理解できなかつた。

プルーパは、シロヤの理解できない思考を読み取つて言葉を続けた。

「ああ説明してなかつたわね。植物兵器は完成しなかつたんだけどね、その代わりに無差別に人を襲う植物が生まれたのよ。それをこの国では”汚染植物”って読んでいるのよ。」

さつき一人を襲つた木。フカミはあれが汚染植物だと言つていた。

つまりあれが、軍事国家だつたときの名残なのだろう。

「やつぱりレーグの目的は・・・汚染植物なんでしょうか？」

「わからないわ・・・ただ、旧バスナダ国家の”何か”が目的のは確かね。」

ブルーパは首をかしげた。それと同時に、朝の予算での会話が脳裏をよぎった。

「軍事予算の拡張・・・まさか旧バスナダ国家の・・・？」

「有り得るわね・・・それなら朝の予算の話と合点がいくわ。」

「ヒヒヒヒヒー！」

「！――！」

シロヤ達は一斉に後ろを振り向いた！入り口には、含み笑いをしながら四人を見つめるレーグがいた。

「尾行調査なんて古いことがお好きなのですね、ヒヒヒヒヒ。」

人を小馬鹿にするように含み笑いをするレーグ。

「それはお互い様じゃない？過去の国の汚点を復活させようなんて、大魔王にでもなつたつもりかしら？」

「ヒヒヒヒヒ、私なりの野望のためなんですよ。まあ、あなた達には関係ないんですがね。ヒヒヒヒヒ。」

含み笑いを何度も続けるレーグ。

「野望つて・・・？」

「よそ者の旅人風情には関係ありませんよ。まあ敢えて言つなら・・・権力を絶対的なものにしたい、ですかね。」

それを聞いた瞬間、ブルーパは叫んだ。

「あなたまさか・・・”星”が目的！？」

しかしレーグは不動。しばらくしたのち、レーグの姿はなかつた。

「やられたわ！今のはホログラムよ！今すぐ城に戻るわよ！」

ブルーパが血相を変えて走り出した！シロヤは訳もわからずブルーパに着いていく。

突然、後からついてきたフカミとキリミドが、走るのを止めた。

「お急ぎみたいね。キリミド！森の入り口まで送つてあげるわよ。」

「はい！」フカミとキリミドが手をかざすと、周りの木の枝がシロヤとフルーパを持ち上げた。そのまま高速で枝が入り口の方まで移動した。

「二人ともありがとうねー今度甘砂まんじゅうでも持つてくれるわー！」

「じゃあ俺は砂豚でも持つてくるよー！」

去り行く二人を見ながら、フカミは呟いた。

「遠慮するわ、私ベジタリアンだから。」

フカミとキリミドの力で森地帯を抜けた二人は、すぐさま城に向かつて走った。

「まずいわ・・・”星”が狙われるなんて・・・。」

ブルーパが呟いた。しかし、シロヤには”星”が何なのかわからなかつた。

「ブルーパ様！”星”つていつたい！？」

「シロヤ君！今は走ることだけに集中しなさい！」

シロヤを一喝する。その顔には焦りが現れていた。

目的地に向かつて城内を走る一人。途中、使用人や学者がブルーパの顔を見て驚いていた。おそらく、ブルーパがここまで焦つた表情をしたのは初めてなのだろう。

そして、ブルーパとシロヤが着いたのは、地下への階段を下つていつた先にあつた門だった。

「シロヤ君・・・ここにレーグの目的があるのよ。この国では”星”つて呼んでる物よ。」

門がゆっくりと開かれた。様々な財宝が箱に入れられて管理されている宝物庫。その先にあつたのが、ブルーパが言う”星”だ。

「これが”星”・・・綺麗・・・。」

キラキラとまるで宝石のように輝くそれは、それ自体が光を放つていて、薄暗い宝物庫を照らしていた。

「百年に一度、星の形の砂金がバスナダに現れるの。私達はその現象を”流星”と呼んでいるわ。そしてその流星によつて生まれる砂、それが”星”よ。国王のみが所有できる国の宝、つまり今の所有者はシャンツてこと。」

厳重に管理されている星は、見ているだけで不思議な力が沸いてきた。まるで、星 자체が不思議な力を秘めているようだ。

「気づいた？星に秘められた力に。」

シロヤの心を読んだブルーパは、再び説明を始めた。

「この星がこうやって厳重に管理されているのかわかる？」

「え・・・？」

「この星はね・・・危険なのよ。」

「危険・・・？」

シロヤは首をかしげた。これだけ光輝く星が危険な理由が思い浮かばなかつた。

「この星には魔力を増幅させる力が込められてるの。簡単に言えば、持つているだけでその人の強さを増幅させるのよ。賢者が持てば国一つを自由に作り替えることが出来るくらいに強力なの。」

星に秘められた力、シロヤはそれを知つたと同時に、光輝く星が恐ろしく見えた。

「レーグはこれを使つて絶対的権力を手にしようとしているのね。レーグの魔力なら国を作り替えはできないけど、頂点に立つことぐらいなら出来るはずよ。」

「でもこの所有者はシアン様じや・・・。」

「そのために”あの人”を送つたのよ。」

「あの人・・・？」

シロヤが再び疑問に思つた瞬間、宝物庫の扉が開いた！

「ブルーパお姉様！リーグン様が来ました！是非ご挨拶をしたいつて。」

「あら、ずいぶん突然ね。ちょうどいいわ、シロヤ君にも紹介しなくちゃ。」

宝物庫を出て、客室に向かう一人。

「あの・・・リーグン様つて？」

「レーグの息子よ。」

それを聞いた瞬間、シロヤは顔をしかめた。あんな親を持つた子供はろくなものではないような気がしたからである。きっと、金に

物を言わせて市民達を弄んでふんぞり返つてゐるボンボン息子なんだ
うつな、とシロヤは瞬時に悟つた。

そんなシロヤを見て、クスクスと笑いながらブルーパは客室の扉を開けた。

「ブルーパ様！お久しぶりです！」

客室の中にいた青年が深々とブルーパに礼をする。そして、シロヤに向けて再び深々と礼をする。

「お話はうかがつております。シアン様の命を助けた勇敢な方だと聞きました。是非、旅の話なども聞かせていただきたい。」「え・・・はあ・・・。」

シロヤは目を丸くした。これがレーグの息子なのか、まるで正反対、端正な顔立ちでいて端正な服に身を包んだ青年。レーグのようにはかを企むような口調とはかけ離れていて、淀みのないまっすぐな瞳は、意思の強さを感じ取れた。

「よく来たな、リーグン。」

遅れてシアンが客間にやつて来る。それを見るなりリーグンは再び礼をした。

「お久しぶりです、シアン様。長らく顔を見せずに申し訳ありません。文を書こうにも時間がとれずに・・・。」

「萎縮するな、そなたはいずれこの国を支えるのだからな。」

シアンはリーグンを微笑みながら見つめた。

「・・・女王様。」

急に後ろから聞こえた声、客間の入り口には、さつきまで追つていた男、レーグが立っていた。

「レーグよ、先程はどこにいたのだ？会議が終わると同時に城を出たようだが。」

「いえいえ、他国からの使者と話をつけてただけですよ。ヒヒヒ

レーグは平氣で嘘をついた。

「ヒヒ。」

「それでリーグンよ、なぜ急に来たのだ？」

「ヒヒヒヒヒ、女王様。そろそろお決めになられてはいかがですか？」

レーグが再び含み笑いをしながら言った。対してシャーンは笑わずにレーグをまっすぐ見据えて口を開こうとした。

「父上、今日はその話をするためにここに來たのでしょうか…ならば僕の意思はこれから決まっています！」

リーグンは、口調を強くしてレーグに言い放った。

「シャーン様との結婚は正式にお断りさせていただきます！」

計画

「どうこうことだリーグン！？」

「言葉通りの意味です。シアン様と結婚はできません。」

その場にいる全員が目を丸くした。

「元々は父上が勝手に決めた政略結婚、シアン様にも相手を選ぶ権利があるでしょう。」

「ならぬ！リーグンよ、今の発言を取り消すのだ！」

「父上・・・何故そこまでシアン様との結婚を強要するのですか？」
レーグは口を開ざした。一瞬ボロを出しかけたが、そのまた一瞬で思い止まつたのだ。

「まあリーグンよ、先のことなど気にするな。そなたもゆっくり考えるがよい。今夜は城に泊まるがよい。」

シアンはクピングを呼び出し、リーグンを密室から違う部屋に向かわせた。それに合わせて、その場にいた全員が部屋を出た。

「あれが・・・本当にリーグの息子なんですか？」

「ふふ、びっくりした？」

イメージとはかけ離れた青年、そしてシアンのことを考えての結婚拒否。できた人だな、とシロヤは思った。

「リーグの狙いは我が息子を王族にして星を手に入れることよ。」

「なるほど・・・それでリーグは結婚を強要したんですね。」

しかしリーグンはそれを拒否した。これはリーグにとって計算外なのだろう。

「でも・・・この計算外が変な方向に行かなきやいいけど・・・。」
ブルーパはそっと呟いた。

「シロヤ様、リーグン様がお呼びです。」

突然、クピングが部屋に入ってきた。

「え？ リーグン様が？」 シロヤがドアの方を振り向いた。そこには

いたのはクピン、そして

「いえ、お話があるのはこちらです。私が出向くのが礼儀です。」

クピンの横からリーグンが現れた。シロヤとプルーパの真向かいにある椅子に座るリーグン。座り方も非常に綺麗だ。

「リーグン様、それでお話つて言うのは・・・。」

「あなた達もご存知でしようが、父上のことです。」

さっきまで見せていた顔から一転、表情が引き締まる。それに合わせて、シロヤとプルーパも表情が引き締まった。

「父上の目的は星を使ってのこの国の支配です。そして、旧バスナダ国王が作り上げた汚点、最強の軍事国家の形成です。」

「それに関わっているのが、バスナダ七人衆・・・？」

「はい、彼らの間では旧バスナダ国の世界的通称を取つて付けた名、”砂の竜王計画”と呼ばれています。」

砂の竜王、シロヤはこの名前を聞いたことがあった。前に旅した国で聞いた噂、バスナダに眠るとされている砂に住む巨大な竜王。一度逆鱗に触れれば、国全てが紅く地に染まるとされている。

「砂の竜王つて・・・旧バスナダ国家の事だったんだ。」

「国民が思い出したくない、過去に実際にあった最大の汚点です。シロヤは背中に冷たいものを感じた。

「私の父上はその時代にバスナダ七人衆として政治に携わっていました。そして、旧バスナダ国王が暗殺された事件から大臣になつたのです。」

「レーグは懐かしき時代を取り戻そうとしてるのね。迷惑な話だわ。」

「プルーパは首を振った。

「シロヤ様！ プルーパ様！」

慌ただしく入ってきたのはバルーシだつた。顔を汗で濡らして、肩で激しく息をしていた。

「レーグとバスナダ七人衆が会合を始めました！場所は作戦会議室、今、レーグ側の兵士が前を警備していて情報がとれない状態です！」

シロヤ、ブルーパ、リーグンが一斉に席を立つた。

「会合……？いつたい何の会合を？」

「おそらく、リーグン様が結婚を断つたから何かまた作戦を考えているのでしょうかね。懲りない奴等ね。」

「しかし……、父上は予備策は常に持つておいているはずです！」「どうにかして少しでも情報が取れればいいのだが……。」

四人は黙りこんだ。確かに情報は欲しいところだが、得る術が見当たらない。せめて警備がいなければ、先に作戦会議室に入つていれば……、せめてという言葉がシロヤの頭の中を埋めた。

「せめて……少しでも近づけられれば……。」

シロヤがそう呟いた瞬間、バルーシとブルーパが手を叩いた。

「あるわ……、レーグ達に気づかれないで会合を盗み聞きできる方法。」

「しかしそれには……”あの方”的力が必要ですね。」

「そうね……まあ私が説得してみるわ。」

二人はとある人物を思い浮かべて、深くため息をついた。

「あの……”あの方”というのは……。」

「ん？めんどくさい男よ。これから何かとお世話になるだろうから、シロヤ君にも紹介しどうかしら。」

ブルーパはシロヤの顔を見て、にっこり笑った。

「シロヤ君、何か言われても軽く受け流すのよ。一回付き合つと非常に……めんどくさいから。」

まるで何かを言おうとしているかのような笑顔に、シロヤは変な違和感を感じた。

「じゃあブルーパ様、倉からあれを出しておきましょうか？」

「ええ、お願ひするわ。少しでも勝率を上げておかないとね。」

しばらくしてバルーシが持ってきたのは、シロヤにとっては異臭

と感じる刺激臭を放つ物体だった。

大地

シロヤ達がやつて來たのは、城の奥の兵士の詰め所だつた。

「では・・・開けますよ。」

一拍置いたのち、バルーシはドアを開けた。途端に流れてくる異臭。

「うう！」

思わず鼻をつまむシロヤ。詰め所の中は異臭しかしなかつた。そんながらんどうな詰め所の奥に、シロヤは動く影が見えた。

「ウック！なんだなんだ〜！揃いも揃つて〜ウック。」

樽にもたれ掛かっている男がいた。ゆっくりと立ち上がり近づいてくるが、その足はおぼつかない。ふらふらと近づいてドア付近に再びもたれ掛かる。

「ん〜？なんだお前〜！？」

男はシロヤの顔をのぞきこんだ。全身から異臭を放ち、口からはさらに強い臭いを放つ。

これは・・・酒だ。

バルーシは、持っていた物を男に渡すと、男は物を口に当ててひっくり返した。そこからまた臭う異臭。おそらくバルーシが持っていたのは酒だろう。

しばらくして、バルーシは男に言った。

「その方はシアン様が招待した客人、シロヤ様です。」

「ああん？客人！？ただの農民にしか見えんが！？」

事実なだけに否定できないシロヤ。苦笑いしながら、ブルーパは本題を持ち上げた。

「それで本題なんだけど、ちょっと協力してほしいことが」

「断る！」

ブルーパの言葉を途中で遮った。

「待つてくださいレジオンさん！今回の件はレジオンさんの力が！」

「知らねえよそんなもん！大体俺は引退した身だ！そんなやつの力なんか借りりずにてめえで何とかしやがれ！」

シツシツシツとバルーシ達を追い返し、再び詰め所の中に入る。

「まあ・・・予想通りでしたね。」

バルーシが苦笑いした。

「にしても・・・レジオンがいなきや話にならないわ。別の説得方法を考えましょう。」

ブルーパも同じく苦笑いしたのち、四人は詰め所を離れた。

「しかし・・・これじゃ手がありませんよ。」

バルーシは頭を抱えた。それを見ながら、ブルーパとリーグンが同じように考え込んだ。

「私・・・もう一回レジオンのところに行つてくるわ。バルーシ、あなたも行くわよ。」

「はい！」

再びバルーシとブルーパが部屋を出でいった。

「あの・・・レジオンさんつていつたい・・・？」

シロヤはリーグンに尋ねた。

「レジオンさんは、砂の竜王時代に兵団長に配属になつた方です。今は体のことを考えて兵団長を引退、現在は兵士達の剣術指南等を主とした活動をしています。」

それを聞いた直後、部屋の扉が開いた。バルーシとブルーパが戻ってきたのかと思って振り向くと、そこにいたのは違う人だった。

「シロヤ君・・・だつたかな？」

立っていたのは、さつきまで泥酔していた男、レジオンだつた。しかし、今部屋に入ってきたレジオンに酒気はない。シラフのレジオンだ。

「そう・・・ですけど。」

思わず声に緊張の色が混じる。シラフのレジオンからは強い威圧感が発せられていて、歴戦を乗り越えてきた事がわかる。

「さつきはすまなかつたな。それで改めて、君と話がしたい。一緒に来てくれないか？」

「は・・・はあ・・・。」

シロヤはレジオンのあとについていった。しばらく歩いてたどり着いた場所は、城の見回り台だった。

「国つてなあ・・・難しいと思わねえか？」

見回り台の上で砂の国の大地を見ていたレジオンは、突然シロヤに話しかけた。

「この国の砂漠には、たくさんの人達の命が眠っているんだ。もちろんそれは、砂の竜王時代に散つていった人達だけじゃねえ。国をよくしようとした尽力した歴代国王、そしてそれを支えた国民達皆の命も含めてだ。」

レジオンは遠くを見ながら、再び語りだした。

「俺はこつして・・・砂漠の風を感じながら砂漠を眺めるのが好きなんだ。」

砂漠の風がフワツとシロヤの髪を撫でた。

「今お前達が相手にしてる奴つてのは・・・そんな大地を、国を壊そうとしている奴だ。」

シロヤは砂漠を見た。たくさんの命が眠る大地。それを再び戦いの大地に変えようとしているのがレーグ。改めてシロヤは、戦つている相手が強大だということを再認識した。

「そんな奴ら相手と・・・お前は戦うことができるか？」

レジオンはシロヤを見た。再度吹く砂漠の風。しかし、同じ風とは思えないほど、今吹いている風は重かつた。

「誰も言わないから言うが、バルーシもブルーパもお前を過大評価しそうだ。お前は戦士のように強いわけでもない。学者みたいに頭がいいわけではない。そしてお前はこの國の人間じゃないよそ者だ。」

「

はっきりと言つレジオン。しかし、シロヤはそれに聞き入つてい

た。

「こんなよそ者なんかを巻き込むなんて酷な話だぜ。それでもお前は、国を支配しようとしている脅威に立ち向かうことができるか?」

優しく吹く風がじんじんと強くなる。

「後戻りするなら今のつがいだ。降りたきや降りる。これは俺達バスナダ国 の問題だ。」

レジオンは見回り台を降りようとした。しかし、シロヤはレジオ

ンの腕を握り、静かに呟いた。

決意

「俺・・・戦います！」

シロヤは凛とした声でレジオンに言った。対してレジオンは口を少し緩めた。

「関係ない話に首突っ込むのか？命を懸けてまで。」

シロヤは顔を引き締め、再びレジオンを見た。

「でも・・・目の前で人の命が危険にさらされているのを見過すこととはできません！」

「それが例え・・・見知らぬ他人でもか？」

「他人とかそんなの・・・関係ありません！」

シロヤは目線を緩めずにまっすぐとレジオンを見つめる。

「俺だつて不思議ですよ・・・立ち寄った国でいきなりもてなされたり、かと思えば女王様の命を守れと言われたり・・・」

「怖くないのか？」

「怖いです！下手すれば俺だつて危ないのに・・・今からでも逃げ出したい気分です・・・。」

レジオンはシロヤを見た。うつむきながら話すシロヤの姿は、何故だか震えてるようになえた。

「でも・・・何だかこの国の人間とふれあつたりしてこるつち・・・・何だか守りたいと思つてしまふんです。」

顔を上げたシロヤは、微笑みを浮かべていた。

「だから俺はできる限りのことをします。弱い俺は弱いなりに戦います。」

「ハツハツハー！よく言つたぜ兄ちゃん！」

さつきまでの雰囲気から一転、まるで酔っぱらつたかのよつてシロヤの背中を叩く。

「どうやら俺は兄ちゃんを過小評価してたみたいだなーあいつらの

田に間違いはなかつたみたいだ！」

見回り台を降りて、シロヤを連れて歩くレジオン。

「お前になら・・・任せられるな。ついてこい！」

そう言つてレジオンはさらに奥へ歩いていった。

歩いた先にあつた場所は、暗くジメジメした狭い場所だった。

「あの・・・こには？」

「城の各部屋の屋根裏に続いている隠し通路だ。作戦会議室だらうが屋根裏から覗けるぜ？」

レジオンとシロヤは、ほふく前進しながら奥へ奥へ進んでいった。「城に長くいるからな、このくらいの知識はあつて当然だ。」

「でも・・・すごい狭いですよ・・・。」

「贅沢言つな。さあ、着いたぞ。」

レジオンが立ち止まつた場所は、通路の途中にある小さな小部屋だつた。真ん中から光が漏れていのを見ると、おそらく小部屋の真ん中から作戦会議室を覗くことが出来るのだろう。

「声・・・聞こえますか？」

「静かにしてりや聞こえるぞ。黙つて聞くぞ、バレたらアウトだ。」

「では今回の会議での結果を最後確認します。」

わざかに聞こえる声、会議はどうやら終盤、ギリギリセーフだつたようだ。そしてその会議を取り仕切る男の声、シロヤはよく知つていた。

「レーグ・・・。」

「あいつが計画に一枚噛んでいたとはな・・・。」

レジオンが呟いた。レジオンとレーグは、砂の竜王時代から人上に立つていた、スピード出世した同期の一人だつた。

会議はどうやら、議題とその話し合いの結果を最後に報告する段階だつたようだ。

「では、星の入手方法を変更。リーグンを王族にすることで星を合

理的に入手する方法を断念、新たな計画として……。」

「シアン現女王の暗殺を実行しようと思っています。」

「なー何だつムグッ！」

「馬鹿……！でかい声を出すな……！」

慌ててレジオンがシロヤの口を塞ぐ。

しかし、レジオンも驚きの顔を浮かべていた。当然だ、今聞こえたレーヴ達の計画は、"シアン女王の暗殺"なのだから。

「レジオンさん、どうにか止めないと……！」

「落ち着け兄ちゃん、暗殺つたってこれからやるわけじゃねえ。レ

ークもそこまで馬鹿じやねえさ。」

レジオンはシロヤの横を通りて、隠し通路を出ようとした。慌ててシロヤもついていく。

「暗殺するにも最適な場があるつてものだ。おそらく時期はこれから……。」

「時期……近々何かが？」

「ああ、おそらくそれは……バスナダ国最大の祭り……。」

「最大の……祭り……？」

「ああ、全国民が一日中じつた返し、その中を女王様がパレードカーで通るんだ。おそらくそこを狙うだろ。その方がばれにくいやらな。」

一人は隠し通路を抜け、立ち上がって埃を払った。

「なあ兄ちゃん、暗殺の件はバルーシ達には言わないでくれ。事を大きくされると動きづらいからな。」

レジオンはシロヤにお願いした。

「え？でもそしたら俺……一人になっちゃうんじゃ？」

「心配するな！なんかあつたら俺のところに来な。」

その言葉を聞いたシロヤは、安心したのか快く頭を縦に振った。

「すまねえな。俺も何があつたら話すぜ。じゃあ頼んだぜ。」

レジオンはドアを開けたとひりで立ち止った。

「兄ちやん！」

「はーはー！」

「あんたのここと…・氣に入つたぜー。いつか剣術でも教えてやるよ。

」

やう言つてレジオンは走り去つていつた。その背中には、元兵士
団長の力強さを放つていた。

不安

「シロヤ様、おかえりなさいませ。」

部屋に戻ると、いたのはリーグンだけだった。

「あれ？バルーシ様とブルーパ様は・・・。」

「まだ帰つてきていませんよ。そういうシロヤ様はどうぢらに？」

そうリーグンが聞いた瞬間、シロヤの後ろから二つの足音が聞こえた。

「相変わらずの石頭ね、レジオンを味方につけるのは難しいかもね。

「はい・・・しかし、レジオンさんの力は強力です。レーグを相手取るためにもやはり・・・。」

頭を抱えながら話す一人が部屋に戻ってきた。

部屋に戻った四人は、再び話し合いを始めた。議題は、”レーグはいつ何かしらの行動を起こすのか”だ。

シロヤを除く三人は、レーグの目的を知らない。しかし、何かしらの行動を起こすことは目に見えている。ならば、その行動をいつ、どのタイミングで起こすのかが鍵となるのだ。

「レーグは”星夜祭”を狙つて行動をするんじやないかしら？」

「”星夜祭”・・・なるほど、それならば騒ぎに乗じて行動しますい。」

「”星夜祭”・・・？」

シロヤは首をかしげた。

「星夜祭とは、この国最大の祭りです。星を祭りの中央に飾つて恩恵を授かるという伝統的な祭りなんですよ。」

リーグンが補足してくれた。同時に、シロヤはレジオンの言葉を思い出した。もしレーグがシアンの暗殺を実行するならば、国最大の祭り、星夜祭が怪しいと・・・。

「ならこっちも早く行動に移さないとね。星夜祭は三日後だから。」「三日後！？」

シロヤは間の抜けた声を出した。暗殺決行の日時があまりにも早いと思い、シロヤは思わず声をあげてしまった。

「しかし・・・明日から兵团は祭りの準備をしなければ。」

「なら私とシロヤ君でなんとかやってみるわ。」

ブルーパはシロヤを見てウインクした。シロヤも頭を縦に振った。

「僕もお手伝いできることがあったら言つてください。」

同じくリーグンもバルーシに向かって頭を縦に振った。

「すいません、私もできる限り探つてみます。」

四人はそれぞれ意思を確認して、部屋を出でいった。

「・・・」

時刻は夜。夕食を終えたシロヤは部屋で考えていた。

「シアン様の暗殺なんて・・・レーグは何が目的なんだ？」

元々は星が狙いなはずなのに、レーグは星を諦め、シアン暗殺の実行を決めた。つまり、元々の狙いは星じゃないかも知れない。

「レーグって・・・強いのかな・・・。」

レーグの用心深い性格上、間違つても暗殺者を依頼するとは思えない。ならばレーグが直接手を下すか、七人衆の誰かが手を下すかどちらかだ。

「・・・」

果たして勝てるのか。シロヤの頭にそんな事がよぎった。

ベッドから飛び降りたシロヤは、置いておいた愛用の剣を抜いた。鍛冶職人になつた友人が旅立つ前にくれた剣だ。それを持って、軽く剣を振つてみた。

ぎこちないな・・・。ヒシロヤは思わず心のなかで呟いた。それも当然だ、シロヤの剣に型なんてない。

今までの旅でも、バシリスクやゴブリン、小さめの鳥獣程度しか

相手にしたことがなかつた。その程度なら、剣術を習つていれば誰でも倒せる相手故に、シロヤは力の弱さを痛感する。

実際、今日相手取つた汚染植物には歯が立たなかつた。ブルーパギになれば、確実に自分は切りきざまれていたいだろ？。「・・・外に出るか。」

急に外の風を感じたくなつたシロヤは、そのまま部屋を出でいつた。寝る前に戻つてくればクピンに心配をかけることもないだろ？。シロヤは部屋を出た。

「あ！シロヤお兄様！」

部屋を出た廊下の先に、ローエイエが立つていて、シロヤを見た同

時に、ローエイエはシロヤに向かつてかけてかけていた。

「お兄様、どうしたの？」

「ちょっと・・・夜風に当たりたくて・・・。」

「私、いいところ知つてるよ！今から行こう！」

ローエイエはシロヤを引っ張つて、城門とは逆方向に向かつて歩き出した。

「この上へ！見晴らしいいんだよ～！」

やつて来たのは、昼にレジオンと来た見回り台だった。

「あ～！誰かいるよ～？」

台に上がると、どうやら先客がいたようだ。

「クピンさん？」

「え？あ～！シロヤ様に・・・ローエイエ様！」

見回り台にいたのはクピンだつた。メイド服のまま、風を感じながら景色を見ていた。一人を見るなり、急に萎縮し始めるクピン。おそらく、王族であるローエイエが目の前にいるというのが、萎縮してしまつ一番の原因だろう。

「クピンちゃんも一緒～！」

「わ～私なんかがローエイエ様のお隣だなんて！」

「もう～！クピンちゃん緊張しそぎだよ～！」

ほっぺたをふにふにするローアイエ。背丈などを見る限り、二人は同じ年齢なのだろう。

緊張を落ち着けようと、ローアイエはクピンの隣で景色を見始めた。それに合わせて、シロヤとクピンも景色を見た。夜の砂漠は神秘的で、それでいて優しかった。

「お兄様、この景色・・・好き？」

何故だが、今のローアイエの声が幻想的に聞こえた。

「私は」の景色大好き。でもね、最近砂漠が変わった気がするの。「砂漠が……変わった？」

目の前に広がる夜の砂漠は、確かに昼とは違った神秘的な印象があつた。しかし、そんなことではないだろう。ローエイエが見ているのは表面上だけではない、さらに奥深い何か……。

「何かが起こる……砂漠が壊れるような何かが起こる。」

ローエイエの弦はとてもなく重く、それでいて暗い。

「…………。」

ふとシロヤは一人を見た。シロヤの目に映ったのは、体を震わせる少女の姿だった。しかしそれは寒さではない。これから起こるであろう未来を予知しているような震え、恐怖だ。

「ク！クピンさん！？」

「どうしたのクピンちゃん！？」

震えていたのはクピンだつた。その震えは自分で止めようにも止められないようで、震えはさらに強くなりクピンの顔を青くする。

「いや……いやあ……いやあああ！」

クピンは頭を抱えながら悲鳴をあげたのか、そのまま前に倒れこんだ。

「クピンさん！クピンさん！」

「お兄様！ブルーパお姉様のところに運びましょー。」

「氣絶してるわ……。」

ブルーパがクピンの顔を覗きこんで言った。

「でも……どうして氣絶なんか……。」

「……話しておいた方がいいかしらね。」

ブルーパはしばらく考えたのち、ゆっくりと語り出した。

「クピンをメイドとして雇つたのは、シャンジやなくて私なのよ。」

クピンの顔を軽く撫でて、再び続けた。

「クピンには強い靈力があるのよ。それを自分で制御できないから、たまにこうやって暴走を起こすのよ。多分、今回のは暴走が起こうしたことで未来が見えたんじゃないかしら。」

強い靈力を持つ者は、制御が難しく暴走を起こす。それは「ぐ当たり前の話だ。

しかし、未来を見ることができるなんて話は稀である。よっぽど強い靈力がないと、未来を見るなんてことはない。

「まあ一日経てば田覚めるから心配しないで、さあローラー、もう寝るわよ。」

ブルーパはローラーを部屋から出すと同時に、シロヤを見た。

「シロヤ君、ちょっとといいかしら。」

ブルーパは重く言つた。瞳が深く、それは見ているだけで吸い込まれそうだ。

「クピンは未来を見て氣絶した。その意味がわかるかしら？」

シロヤは考えた。

「えっと・・・靈力が強すぎて負担になつたからですか？」

「いいえ、原因は”見えた未来”よ。」

ブルーパは顔を伏せた。おそらく、ブルーパも信じたくないのだろう。

「クピンが見た未来は・・・おそらく星がレーグに奪われた未来よ。」

「ええ！じゃあ未来はもう決まって！？」

「いいえ、あくまでもその可能性が一番高いつて話よ。クピンには耐えられない未来の映像だつたみたいね・・・」心配そうにクピンを見る一人。青かつた顔は少しづつ戻つてゐるようだ。

「クピンは私が看病するわ。シロヤ君、今日はもう休みなさい。」「は・・・はい。」

ブルーパに促され、シロヤは部屋を出た。

シロヤは少し考え込んだ。

「未来……」

クピングが見た未来、恐怖に飲まれ氣絶する程の未来。いつたいどんな未来なのか。

「……。」

星が奪われ、シアンは暗殺され、バスナダがレーグの手に落ちたとしよう。そしたら他の人たちはどうなるだろうか。

おそらく、レーグの計画を知っている、そして知ろうとしている人は処刑されるだろう。ということは、ローラーも、ブルーパも、バルーシも、レジオンも、そしてシロヤも……。

「……いやいや駄目だ！」

頭を軽く振つて考えていたことを消す。マイナス方向に考えていてはキリがない。そう思つて布団に入る。

「……。」

一度出たマイナス思考は消えない。布団に入つて忘れようとすればするほど、どんどんと深く思考が頭をめぐる。

次第にシロヤは恐怖を覚えた。広い部屋に一人でいるところになるとが、さらに恐怖心を強くする。

いつしかシロヤは、体をブルブルと震わせていた。

ガチャ……。

「……！」

急に開いた扉、シロヤは反射的に剣を握つた。

「ど…どうしたのだ！？ 何かあつたのか？」

シロヤは手を下ろした。

「シアン様……！」

部屋に入ってきたシアンだった。シアンはシロヤのベッドに上がり、シロヤに寄り添つた。

「どうしたのだ？ 汗だくではないか。」

いつの間にか、シロヤは汗だくなっていた。

「私が・・・拭こうか？」

頬を少し赤くして、シャンは呟いた。

「いや！あ・・・遠慮します・・・。」

激しく拒否すると失礼だと思ったシロヤは、最後に小さく拒否の言葉を呟いた。

「ふむ・・・嫌ならしいだろう。」

シャンは寄り添いながら呟いた。

「そういえば、そなたにしかできぬことの話だが。」 シアンは、

シロヤを見つめながら呟いた。

「私と共に・・・この国を支える王になつてほしい・・・私

と・・・結婚して・・・ほしい・・・。」

告白

「…………ええええええ！」

シアンがシロヤに用意した席、それは国を統べる者の席、王の席だった。

「お！ おお！ 僕が……おうに！？ ジョ！ 「冗談ですね！？」

「冗談ではない……私と……結婚して……王になつて……ほしい……」

シアンの顔がトマトのように赤く染まる。今、シアンが放った言葉は、間違いない”告白”だ。

女王の告白を受け戸惑うシロヤは、口をパクパクさせて首を忙しく動かすことしかできなかつた。

「……どうだ？ それとも私は……魅力的ではないか？」

潤んだ瞳で上目使いをするシアン。

もちろんシロヤから見て、シアンが魅力的に映らないわけがない。ロングの髪の毛に華やかなドレス、綺麗な顔立ちにスタイルは誰もが魅了される。見た目だけではなく、性格や気配りも一級品。シアンは一国を統べる姫なのだから、そんなことは当然と言えるが、それはあくまでもシロヤからかけ離れた世界、王族や貴族などでの話だ。

単なる農民が姫と結婚、しかも恋愛結婚など、世界をひっくり返しても事例は出てこない。

「どうした……？ 私は早く……そなたの返事が聞きたい……。

シアンの瞳がどんどんと潤んでいく。じつとシロヤを見つめるが、

当の本人はまだまだ正気を保つていられない状態だった。それに気づいたシアンは、シロヤの頬に手を当てた。

「むう……やはり急に王になると言われても……答えるのは難

しいか。」

シアンは優しく微笑んだ。

「ならば・・・そなたにこの国をもつと好きになつてもらいたい。」

シアンはベッドから降りて、カーテンを開けて窓を見た。砂漠の夜の空は遮るものなく、美しい星が国の空を彩つている。

「三日後、この国をあげて行われる最大級の祭り、”星夜祭”に、そなたを国賓として招待しよう。そこで、この国をもつと好きになつてもらいたい。」

星空の光が部屋に差し込み、シアンの体を照らす。シロヤは何故か、星の光を浴びるシアンが神秘的に見えた。

「私たちバスナダ国一同、最大限のおもてなしをしよう。そして、星夜祭の終わりに、そなたの答えを聞きたい。」

三日、それはシロヤが答えを出すために考える時間。そして、答えを出すためにレーグの野望を止めなくてはいけない制限時間。シロヤにとつて残された猶予だ。

「わかりました・・・三日・・・考えてみます。」

シロヤは小さくうなずいた。それを見たシアンの顔は、優しさを含んだ微笑みを浮かべていた。

「うむ、良い答えを期待しておるが。」

そう言つてシアンは、再びベッドに入り、シロヤに寄り添つた。「では今日はここで寝させてもらひうが。」

シロヤの横にシアンも横になり、添い寝の形をとつた。

あれから時間は経っていない。しかし、シロヤには何時間もの長い時間に感じた。シアンはずつとシロヤに寄り添つている。

ふと、シロヤはシアンに尋ねた。

「シアン様、この国の人たちは好きですか？」

「もちろんだ、民は皆、家族であると私は思つてゐる。」

女王らしい答えだが、シロヤにとつては違和感しか生まれない答えだつた。シロヤは続けた。

「もちろん・・・家臣も皆ですよね？」

「無論、家臣も皆バスナダの民だ。誰一人とて例外はない。」

シロヤの顔が曇った。聞いてはいけない質問をしたのではないか、とこう考へが頭をよぎる。そして、次にシロヤが口にした言葉も、また聞いてはいけない質問だった。

「もし・・・家族の誰かが・・・シアン様を暗殺しようとしても・・・ですか？」

即座にシロヤは後悔した。こんな質問はするべきではない。それがわかつても、確認だけはしておきたかった。

曇った表情のシロヤとは対称的に、シアンの顔は微笑みを浮かべていた。

「もし私が狙われているのならば、喜んで受けよう。私は逃げも隠れもない。命が欲しいのならば、くれてやる覚悟だ。」

覚悟、シアンの言葉に嘘偽りはない。清々しいくらいにまっすぐな答え。しかし、シロヤは清々しさを感じる余裕なんてなかつた。

シアンは、今自分が狙われていることを知らない。当然の話なのだが、シロヤにはきつい現実だ。

「シアン様は・・・強いお方なのです。」

「そなたも強いではないか。見ず知らずの私を魔の物から守ってくれたのだ。」

シアンはシロヤに向かつて微笑んだ。しかし、シロヤは再び顔を曇らせた。

俺は強くなんかない・・・助けたのは单なる良心、もし襲つていたのがバシリスクでなければ、シロヤは逃げていたかもしれない。シロヤは何も喋ることが出来なくなつた。

そのまま、無音の空間が一人を包み込む。シロヤは、色々とあります今日の出来事を思い出す前に、深い眠りについてしまつた。その頬を撫でながら、シアンも深い眠りについた。

爽やかな砂漠の朝日が窓から降り注ぎ、シロヤは朝日を感じながら、ゆっくりと目を開けた。

隣にいたシアンは、シロヤよりも早く起きて朝の会議に向かつたようだ。

とりあえず起きようと、シロヤはベッドから飛び降りて、軽い運動を始めた。

「・・・シロヤ様。」

「・・・うわあ！」

突然聞こえた声、ドアのところにいたのは、意外な人物だった。

「レーグ・・・様。」

やつて来たのはレーグだつた。相変わらず人を小バカにしたように嘲笑いながら、シロヤの部屋を見ている。

「・・・何ですか？」

「ヒヒヒヒヒ、女王様の命によりシロヤ様のお目付け役を頼まれましてね。ヒヒヒヒ。」

相変わらずムカつく笑い声だ。

「お目付け役・・・？具体的に何を・・・？」

「城の中の案内をするように頼まれましたので、今日は城の案内をさせてもらいます。ヒヒヒヒ。」

シロヤは不服そうに頷いた。よつてレーグに案内されるとは・・・。

「なにかご不満ですかな？ヒヒヒヒヒ。」

「いえ・・・何も・・・。」

「あら？レーグと・・・シロヤ君？」

部屋を出すぐの廊下にいたのは、寝起きのブルーパだった。ボサボサの髪の毛のまま、レーグについていくシロヤを見ている。

「ヒヒヒヒヒ、プルーパ様。今日は私がお目付け役を任せましたからお気になさらず。ヒヒヒヒヒ。」

その言葉に、プルーパは顔をしかめた。シロヤと同じく不服そうに見つめている。

「まあ・・・いいわ。それよりも、いくら大臣でも宝物庫は入らないう�にね。」

「おやおや? よそ者が入っているのに大臣はダメなのですか? ヒヒヒヒヒ。」

よそ者、それはおそらくシロヤのことだろう。昨日、プルーパに連れていかれて入った宝物庫、星が安置されている場所だ。

「あら? 何のことかしら? あそこには王族しか入っていないはずよ?」

そう言ってプルーパは、小さくシロヤにウインクをした。これはおそらく、シャンと結婚して王族になれってことだろう。

「ヒヒヒヒヒ、まあいいでしょ。では案内を続けましょ。」

そう言って、レーグは廊下を歩いていった。その後ろ姿を、プルーパは見えなくなるまで見つめていた。

城の中は思いの外広く、全階層を案内されるだけで朝の大半の時間を使ってしまった。

そしてたどり着いたのは、砂漠が見渡せる見回り台だつた。

「ここはいいところですよ。砂漠の風を感じながら砂漠を見ることができるのですから。」

レーグは景色を見ながら呟いた。しかし、レジオンのように景色を、風を体一杯に感じながら言つた言葉とは正反対、うわべだけの感動だ。

シロヤは少し苦笑しながら景色を見た。街では、人がせわしく動き回っている。

「あれは三日後に行われる星夜祭の準備ですね。」 見ると、バルーシも物資の運搬をしている。

「星夜祭は、我がバスナダ国の大宝である星を崇める由緒正しい祭りなんですよ。星夜祭はバスナダ国民のみが参加できる祭りだと言わっていましてね。何せ・・・大事な星を崇める祭りですからね。盗まれたりしたら一大事ですからね。」

「これはおそらく、遠回しにシロヤに”早く消えろ”と言いたいのだろう。もちろんバスナダ国民のみが参加できるなんてのは嘘である。

見え透いた嘘をつくな、とシロヤは苦笑する。

「昨日、シアン様から正式に星夜祭に招待されました。」

含み笑いをしながら、シロヤはレーグに向った。それを聞いたレーグは、少し表情を曇らせた。

「そんな話は聞いてないんですがね・・・まあいいでしょ。」「してやつたり、とシロヤは内心喜んだ。

「」の先が王室です。」

最後に来たのは、豪華な造りの扉の前、シアンがいる王室の前だった。

「では私はこの辺で。お帰りの順路はもうわかりますよね?」ヒヒヒ

そう言って、レーグはシロヤを置いて小走りで去つていった。

「え? ちょっとレーグさん!」

まるでさつきの仕返しかと言わんばかりだった。シロヤは豪華な部屋の前でボーッとするしかできなかつた。

ようやく部屋についたシロヤは、ベッドに転がり込んだ。

そのまま寝てしまおうと思つた瞬間、ドアがノックされた。

「シロヤお兄様〜！」

「シロヤ君〜！」

ドアの向いからシロヤを呼ぶ声、声から察するにローハンとフルーパだ。

「はーはあい！」

慌ててシロヤはドアを開けた。ドアの向こうにいたのは、ローリエとブルーパ、そして、

「昨夜は・・・よく眠れたか？」

「シ！ シアン様！？」

三人の服装は地味なものだった。まるで街娘みたいな格好で、ローリエは結んでいた髪を解いていた。

「これから三人で行くところがあるの。シロヤ君も来てくれないかしら。」

「行くところ・・・ですか？」

「そうだよー！ お兄様も王様になるんだつたら必ず行かないといけないんだよー！」

「い、こらローリエ！ ・・・すまぬな、一緒に来てはくれないか？」

急な話ではあったが、シロヤは快く了承した。

地味な格好の三人とシロヤは、王室の奥へと歩いていった。

「あの・・・何をするんですか？」

そう聞いたシロヤがたどり着いたのは、王室の奥の通路のさらに奥だった。

「さあ、この奥だ。」

シアンが扉を開けると、正午の光が降り注いだ。どうやら屋外に繋がっているようだ。そしてその先にあったのは、たくさんのお墓だった。

「（）は・・・先代国王達が眠っている場所よ。私達王族は月に一回、先代達のお墓参りに行かないといけないの。」

シアンは王室から持ってきた花を出し、一番奥のお墓に花を手向けてた。

「お父様・・・もうすぐ星夜祭が始まります・・・。必ずや星夜祭を成功させます。どうか安らかにお眠りください。」

軽く手を合わせて黙祷するシアン。それに続いて、後ろの三人も黙祷する。

「・・・先代国王は、バスナダ国を軍事国家にした国王なの。そして・・・私達を育ってくれたお父様なの。」

シロヤは声を出さずに驚いた。

「お兄様、シアンお姉様はね、ずっと一人で頑張ってきたんだよ。お父様の残した傷痕と戦いながらね・・・。」

「こら！ローエー！」

ブルーパがローエーに怒鳴った。ローエーも幼いながら、言つてはいけないことを言つたと直感で理解した。

「いや・・・いいのだ。確かにお父様は傷痕と呼ぶに等しいものを残していくた。だからこそ私達が、私達で変えていかねばならぬのだ。」

シアンの目はまっすぐで、それでいて凜々しかつた。

「今年の星夜祭はその第一歩だ。だから、ブルーパお姉様にも、ロイエにも協力してほしい。」

「何を今さら言つてるのよ、そんなの当たり前じゃない。」

「もちろんだよお姉様！私も頑張るよーもちろんお兄様もー！」

「う・・・うん。」

三人は互いにうなずきあつた。そこには、国を変えようという強い意志があつた。

「ではそろそろ行こうか。」

シアンは立ち上がり、王室に向かつて歩き出した。その後ろについていくロイエとブルーパ。

「・・・・・・シロヤ君？」

ブルーパが後ろを振り向くと、シロヤが墓前に立つていた。後ろ姿は何故か、誰にも打ち砕かれないような強いを感じる。あれは・・・決意だ。

「ブルーパ様・・・シアン様が望んでいるのはこの国の平和な未来なんですよね・・・。」

「・・・そうね。」

そう聞いたシロヤは、墓前に座り込んで手を合わせた。

「先代国王様・・・私は旅の者、シロヤといふ者です。」

淡々と語り出したシロヤ。

「今・・・シアン様が望む平和な未来を・・・脅かす者が現れます。ですがご安心ください。シアン様の体を任せられた以上、どんな脅威にも、俺は立ち向かいます。例え、この身が朽ちよつとも・・・。」深々と頭を下げるシロヤ。その頭を、ブルーパは軽く撫でた。

「ブルーパ・・・様？」

「シロヤ君だけじゃないですよ、お父様。私達は皆、シロヤ君の味方です。そして・・・シアンの味方です。」

一人は再び黙祷した。

黙祷を終えた二人は、静かに立ち上がり歩き出した。

お墓参りを終えたシロヤは、王室の来賓用椅子に座っていた。用事があるとプルーパが残させたのだ。

しばらく待つていると、プルーパは奥から走って戻ってきた。

「お待たせ、これが星夜祭の動きよ。」

渡された紙の裏には、”超重要”と書かれていた。

表に書かれていたのは、どうやら星夜祭の全体の動きのようだ。

出店の概要から、パレードカーの動きまで事細かに書いてあった。

「これがあれば、レーグの動きも予測しやすいでしょうね？」

「でも・・・これって機密事項じゃ・・・。」

プルーパは、そう言つたシロヤの脣にさっと指を当てた。

「ひ・み・つ・よ? シロヤ君。」

最後に軽くウインクをして、再び紙に目を戻した。

「さ、バルーシもいないしわざと済ませちゃいましょう。まずは・
・・。」

部屋に戻ったシロヤは、プルーパからもらつた紙に目を戻した。紙には、予測した時間やそれに合わせての動きがメモしてあつた。

「・・・」

しばらく見たのち、シロヤは手を背けた。

あと一日後、レーグと対決をする。その事実が、シロヤを震えさせた。

考えてみれば、長い旅の中で対人戦を経験したことがない。そして、未知数であるレーグの力。

「・・・」

思つてはいけないと思つても、自然と頭に浮かぶ最悪のシナリオ。だんだんとシロヤは、自分の頭の中に怒りを覚え始めた。

「・・・アー！」

怒りを言葉に変えたのち、力任せにドアを開けた。ドアの先にいたのは、勢いよく開いたドアにビックリして座り込んでいる少女だった。

「…………クピンさん？」

「シ！シロヤ様！」

すぐさま立ち上がり、服の埃を軽く払つて、シロヤの方を向いた。
「さー、昨晩はシロヤ様やローライエ様のお手を煩わせてしまつて！本当に申し訳ありませんでした！」

震えながら頭を下げるクピン。その頭を上げさせたシロヤの顔は、安堵に包まれていた。

「クピングさん！よかつたー！目が覚めたんだ！」

シロヤはぴょんぴょんと跳ねて喜んだ。

「本当に申し訳ありませんでした！シロヤ様のお手を煩わせて・・・」

「そんなんでもない！俺はクピングさんが無事で本当によかつたですよ！」

クピングの手を握つて一緒に跳ねる。シロヤと跳ねるクピングの顔は、キヨトンとしていた。

「あの・・・。」

「あ・・・『めんなさい』・・・。」

我にかえつたシロヤは、クピングの手を離して頭を下げた。

「ど、とにかく、クピングさんが無事で本当によかつた。とりあえず中で話しましょう。」

「それなら私も一緒でいいかしら？」

突然聞こえた声、声の主はブルーパだつた。

「『めんなさいね、シロヤ君。私まで加わっちゃって。』

今シロヤの部屋にいるのは、シロヤとクピングとブルーパだ。三人は円を描くように座つている。

「あの・・・ブルーパ様！看病していただきーありがとうございます！」

王族の隣にいるという緊張感でガチガチのまま、ぎこちなくクピングはブルーパに頭を下げる。

「固くなりすぎよ、クピング。リラックスリラックス。」

クピングの頭を撫でるブルーパ。しかし、クピングの緊張は解れている感じはない。

「それよりクピング、あなたにちょっと聞きたいことがあるんだけど・

・・いいかしら?」

ブルーパの顔が引き締まる。

「クピン、あなた・・・未来を見たのかしら?」

シロヤは目を丸くした。まさかブルーパからそれを引き出すとは思わなかつた。

クピンの表情が曇る。何となく、ためらつてゐるような表情だ。

「いえ・・・見ていません・・・。」

うつむきながらクピンは答えた。少し声が震えていたようだ。それを見たブルーパは、少しだけ微笑んだ。

「そう・・・わかつたわ。ごめんなさいね。」

少し間を空けたのち、ブルーパはそのまま部屋を出ていった。

「あの・・・シロヤ様。」

静寂を破つたのはクピンだつた。

「さつきの話なんですが・・・シロヤ様になら言える気がします・・・。」

今まで見たことない、クピンの強い表情。今まで見せていたおろおろとした表情とは全く違う表情だ。

「ク・・・クピンさん・・・?」

「お話しします。私があの時見た夢を・・・。」

クピンはゆづくりと語り出した。

暗くなつた空には、砂漠を照らす星も月も輝いていない。

「ヒヒヒヒヒー・ヒヒヒヒヒー・ヒヒヒヒヒヒヒー・」

暗い砂漠に響く含み笑い。そびえ立つ砂丘には、シロヤが今まで感じていた優しさは、欠片すらなかつた。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒー・ヒヒヒヒヒヒヒヒー・」

さらに響く含み笑い。その先にそびえる巨大な城には、絶望を宿した屍しかなかつた。

その屍は多種多様だ。黒毛の馬、黄色い髪の少女、ドレスに身を

包んだ女性、メイド服を着た少女、銀の鎧に身を包んだ兵士、歴戦を乗り越えた老兵。

そしてその中央にそびえ立つのは、きらびやかだ
んだ女王と、白髪の旅人が寄り添つて倒れていた。
「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

不気味に響く含み笑い。

街は、輝きを失った空よりも暗く、行き交う人々は誰一人としていない。

卷之三

誰にも止められなかつた含み笑い。

その手に見えるのは、砂漠からは見えない星と月の輝きを集めた
ような輝き。

۱۰۷

暗黒に包まれたバスナダ。屍へと姿を変えた王族と反乱者。生氣と笑顔を無くした國民。

富國の國の富。

星は落ちたのだつた。独裁者、レーグの手によつて・・・。

卷之三

「なんですか」と、彼は尋ねた。

シロヤは絶句した。クピンから聞かれた話は、シロヤにとって
は最悪のシナリオであった。

無言のまま、クピンはまっくつと顔を下げた。

「私にもわかりません・・・あの時・・・急に目の前が真っ暗になつて・・・今の映像が頭に流れてきました。私にもわかりません・・・これがブルーパ様が言つていた未来なのかどうかは・・・。」

クピンはさりげなく、自分に強い靈力があることを知らないようだ。
シロヤはゆっくりと頷いて、言葉を探した。

「そうですか・・・ありがとうございます。」

そのまま会話を終えようとしたシロヤ。しかし、クピンがもう一言葉を続けた。

「シロヤ様・・・。」

クピンの声は震えていた。自分が見た夢が怖いのだろうか。
「シロヤ様・・・もう、頼めるのはシロヤ様しかいないと思つんですけど。」

「え? だって他にもバルーシさんとかブルーパ様だって」

「何でかわからないんですが・・・シロヤ様なら・・・私達バスナダ国を守ってくれると思うんです。」

クピンしか感じない、第六感に似た何か。強い靈力があるクピンだからこそその直感だった。

その直感を信じたクピンが、顔を引き締め、ゆっくりと顔を上げた。

「お願いですシロヤ様! どうかバスナダをお救いください! 」

頭を下げるクピングを見たシロヤは、ゆっくりとクピングの頭を上げさせた。

「わかつてしますよ。どこまでやれるかは分かりませんが・・・出来る限り戦つてみます。」

その言葉を聞いて、クピングは笑顔のまま目に涙を浮かべた。

「あ・・・ありがとうございます！」

シロヤは、近くにあったミニタオルでクピングの涙をぬぐった。

次の日、シロヤは部屋にいた。

「・・・」

いよいよ明日は星夜祭、決戦の日だ。

バルーシ、ブルーパ、レジオン、リーグンの協力があるとはいえ、自分の無力な力でどこまで戦えるのかがわからない。外を見てみると、街は明日の星夜祭を待ちきれないのだろうが、人々が忙しく街を走り回っている。

「・・・」

何だか外に出てみたくなったシロヤは、ドアノブに手をかけた。

「・・・ですよ、ヒヒヒヒヒ・・・。」

「！――！」

瞬時に手をドアノブから離す。

ドアの向こうから聞こえてきたのは、レーグの含み笑いだった。何かを話しているのだろうが、気になつたシロヤはドアに耳をつけた。

「では明日の・・・時、パレードの時間・・・暗殺を・・・します・

・・ヒヒヒヒヒ。」

誰かと話しているようだ。話している相手はわからないが、話している内容はわかる。どうやら、シアンの暗殺について話しているようだ。そしてその内容には、暗殺時間とその決行場所が話されていた。

「では手筈通りに・・・ヒヒヒヒヒ。」

含み笑いが近づいてきた。少しずつ近づいてきて、聞こえてきたのはドアを挟んで数センチの所。

「・・・ヤバイ！」

すぐさまドアから離れる。そしてその数秒後、ドアが開かれた。「ヒヒヒヒヒ、シロヤ様、朝食の時間になりました。」

ムカつく含み笑いが部屋に響くが、シロヤの耳には入らなかつた。それよりも気になつたのは、レーグのさつきの会話だった。

「シロヤ君、気分はどう?」

「シロヤお兄様～！明日一緒にお祭り回り～！」

席に座ると、すぐさまシロヤに近寄るブルーパとローラー、その横で微笑んでいる（ように見える）シアンがいた。

「明日・・・そなたを田一杯おもてなししよう。それでこの国をもつと・・・好きになつてもらいたい・・・。そして・・・答えを聞かせてほしい。」

モジモジするシアンを見たブルーパが、ニヤリと笑つた。

「あ～あ～私も側室に入ってくれないかしら？シ・ロ・ヤ・く・ん

？」

「ぶふつ！」

飲んでいた牛乳を吹きこぼすシロヤ。

「な！何言うんですかブルーパ様！」

「クスクス、本当に可愛いわね。」

ブルーパは笑いながら、近くの牛乳に手を伸ばした。

シアンは顔を真っ赤にして俯いている。どうやら告白したのをブルーパに見透かされたことが恥ずかしかつたのだろう。

「側室に入れるんだつたら、私以外にもローエンとかクピンとかも。」

「…。」

「バルーシとかレジオンも〜？」

「ぶふつ！」

ローエンの発言にシロヤ、そして今度はブルーパも吹きこぼした。

「ローエン…あなた少し黙ってなさい…。」

ブルーパは半笑いしながらローエンに言った。

朝食を食べ終えたシロヤは、すぐさま身支度を済ませて城を出た。途中、ローエンがついていきたいと駄々をこねたが、ブルーパによって阻止された。おそらくブルーパは、シロヤが行こうとしている場所がわかつているのだろう。

シロヤが来たのは、もちろんブルーパが予測した場所だ。賑やかな街を通り、準備に奔走していたバルーシに挨拶をしたのち、シロヤがついたのは砂丘だった。

「…。」

砂漠の優しい風を受け、シロヤは砂丘の向こうを眺めていた。景色を見ているうちに、シロヤは心配していたことを忘れていた。

・・・シロヤは、後ろに人の気配を感じた。

「よお、確か…シロヤつていったかな？」

立っていたのは、シロヤがバスナダに来て一番最初に見た人だった。

「あ！ 確か…ランブウさん？」

シロヤは思い出したように手を叩いた。それを見たランブウは、軽く笑いながらシロヤに語りかける。

「明日から星夜祭か…、わくわくするな。」

子供のように楽しみにしているランブウ。

「安心しな。明日の星夜祭は危険なんか無いぜ？ 安全に祭りを楽しんでもらうぜ？」

ランブウはシロヤの背中をバンバンと叩いて高笑いした。

「危険……ですか……。」

シロヤは少し黙つた。

そうだ、危険なんてないようにならないといけないんだ。シアンの命も、国の皆も守らなければならぬんだ。

・・・ん？

「あのー? ランブウさんの役職って」

シロヤが後ろを振り向いた時、ランブウの姿はもうなかつた。

「・・・?」

首をかしげるシロヤ。そんなシロヤを、砂漠の風は優しく包んだ。まるで、明日に向かう人達を、そしてシロヤを応援するかのよう

に・・・。

そして、星夜祭本番の口がやつて來た。

街にはたくさんの人達が笑顔で歩いている。中には他国から来た人もいる。

街中を走り回る子供達や、恋人と肩を並べて歩く者など、本当に多種多様だ。

その中に、黒い馬に乗つて街を回つてゐる青年と、それについていく少女と女性がいた。

「シロヤお兄様～！あそこ行こ～！」

「こらローラー！あまりはしゃぎやあわるんじゃないわよ！」

ブルーパの言葉を聞き流して、ローラーは一つの屋台に向かって走り出した。

「まだ約束の時間じゃないですか。祭りを楽しみましょう、ブルーパ様。」

シロヤがブルーパに微笑んだ。

「約束の時間・・・ですか？」朝、シロヤはシアンから時間と場所を言い渡された。

「うむ、そなたの案内は私がさせてもらつことになつた。だから・・・待ち合わせ場所を決めておこうと思ったのだ。」

”待ち合わせ”という言葉を言つたのち、シアンは頬を赤く染めた。

「それまでは・・・そなたの思つがままに祭りを楽しんでもらいたい。」

恥ずかしさを隠すよひにシアンはつづきながら言つた。

「でも本当によかつたの？約束の時間までローラーと一緒に回るなんて。」

「ええ、一人よりも皆で回つた方が楽しいですから。」

ブルーパの問いに、シロヤは笑つて答えた。

「お兄様～！お姉様～！」しつこつち～！」笑顔でローエイエが手を振つている。その方向に向かつて、クロトはゆっくりと歩きだした。

「ちょ～！クロト！話してゐる最中なのに！」

「あらあら、クロト君も樂しみたいみたいね。」

クスクスと笑いながら、ブルーパはクロトの後ろを歩いていった。ローエイエの所に着くと、シロヤはたくさんの人達が集まつて、ところに田をやつた。

「あれは・・・食堂みたいなものか？」

歩きながら食べることができない物はあそいで食べるよつだ。

ふとシロヤは、その奥がざわついているのに気がついた。どうやら、誰かに注目が集まつてゐるよつだ。シロヤはよく田を凝り見て、人混みの奥を見た。

「何だ～！めえ～！もう飲めないなんて抜かす氣かあ～こりあ～！」

「う～～！ちょっと飲みすぎですよ～！もうそのくらいに～！」

どうやら、酔つぱらいを誰かが制してゐるよつだ。しかし、シロヤは酔つぱらい、そして酔つぱらいを制してゐる人の声に聞き覚えがあつた。

「てめえバルーシーもう一本持つてこい！俺とお前～！どっちが飲めるか競争だ！」

「レジオンさん～！ちょっと落ち着いてくださいば～！周りの方にも迷惑が」

「んだこらあ～！俺が迷惑だつてんのか～！」

そう言つて、レジオンは持つていた酒の瓶を振り回した。レジオンの瓶をばきは凄まじく、元兵団長の名は伊達ではないことがわかる。それに対してバルーシーも、レジオンの瓶の軌道を読んで、交わしながらも反撃をうかがつてゐる。

街中で始まつた、元兵団長対現兵団長の対決に、シロヤは思わず興奮してしまつた。

「はあ・・・しじうがないわね・・・。」

横のプルーパがため息を一つついた。それに気づいたシロヤは、

プルーパに視線を戻す。

プルーパは、綺麗に一回転した。それと同時に、プルーパから何かが放たれた！

放たれた物は人混みを高速で抜けていき、そのまま食堂の奥へと向かっていった。そして・・・。

「ぐわあ！」

「ぐつ！」

二つの悲鳴が聞こえたのち、食堂が一瞬静かになった。しかし、しばらくすると、人々は再び賑わいを取り戻した。

「ふう・・・。」

横のプルーパが軽く伸びをした。

「あの・・・プルーパ様？」

今の出来事を見ていたシロヤは、恐る恐る聞いてみた。

「・・・何をしたんですか？」

プルーパは微笑みながらシロヤを見た。何故だか、その微笑みに怖いものを感じたシロヤ。

「ただ単に酔っぱらいを黙らせただけよ？ 何も不思議なことはないわよ？」

シロヤはそれよりも、黙らせた方法が気になつた。

プルーパの戦闘能力は、この間の汚染植物との戦いで思い知つてゐた。まるで舞いのような動きから放たれた短剣は、汚染植物の急所を一撃で貫いた。短剣を急所に、しかも一撃で当てるほどの腕前だ。そんな腕前をもろに食らつた一人を遠目で見て、シロヤは少しだけ顔をひきつらせた。

「安心して、投げたのは竹串よ。しかも尖つてない方ね。少しだけ眠つてれば自然と回復するはずよ。」

シロヤの心配を、プルーパは優しく解決した。

「お兄様、どうしたの？」

じゅやひローラーは、屋台でレジオン達に気がつかなかったみたい。

「いえ・・・何でもないです・・・。」

クロトもローラーも、屋台で買った食べ物に夢中だった。シロヤも受け取って食べ始める。

ブルーパも受け取つて食べ始めた。持つていの竹串が凶器に見えたシロヤ。自然と背中に冷たいものを感じた。

でー!?

ん? ん? .. . 嘩嘩西成敗「でせー?」

笑しながら「ハーハは言つた。シロヤは、ゆくじとハーリーに手を合わせた。

気絶者一人が運ばれていくのを横目に、三人は街中を進んでいった。

「約束の時間まではまだあるみたいね・・・シロヤ君、これからどこに行くのかしら?」「

「お腹いっぱい!」

お腹がふくれた様子のローエヒトクロト。

とりあえず辺りを見回してみると、シロヤの町に一つの屋台が飛び込んだ。

「野菜の・・・叩き売り?」

とれたての野菜を売っている屋台だ。

バスナダの砂は特殊な成分が入っているらしく、野菜を植えれば極上の野菜に、家畜に食べさせれば極上の肉になると言われている。バスナダが”隠れた美食大国”と呼ばれている理由がこれだ。

野菜の屋台をしばらく見ていると、シロヤの頭にふと二人の人物がよぎった。

「あ! そういえばお土産!」

よぎつた人物、未開拓地帯でシロヤが助けた、そして助けられた二人の人物。

「ああそうね。私も忘れてたわ。」

そう言ってブルーパは、野菜の屋台に向かつて歩きだした。

「ローエヒ様、少しだけ付き合ってください。」

「ん~・・・わかった!」

シロヤとローエヒは、屋台へと走つていった。

買った野菜を持って、シロヤ達が未開拓地帯に向かつた。

「ここ入ったことない!怖い!」

ローエヒの体が震えている。心なしか、クロトも震えているよう

な感じがした。

「改めて見ると確かに不気味ね・・・。」

改めて未開拓地帯を眺めて、プルー・パは森に入つていった。

「あ！ プルー・パ様！」

「お姉様早い～！」

遅れて、二人も入つていった。

「あら？ また来たの？」

森に入つてしばらく歩くと、会おうとしていた人物にすぐに会えた。

「ここの間のお礼に来たわよ。はい、バスナダ自慢の野菜。」

「わあ～！ ありがとうございます！」

「本当に届けに来るなんて思わなかつたわ。まあ、ありがたくもらいうわ。」

田をキラキラされて野菜を受けとる妹、キリミドと、軽く頭を下げる姉、フカミ。この森に住んでいる精霊の姉妹だ。

「どう・・・かな？ 喜んでもらえてるかな？」

「まあ・・・まあまあって所かしらね。」

顔を背けて言ったフカミに、キリミドがクスクスと笑いながら呟いた。

「もう、お姉ちゃんつたら・・・素直じゃないんだから。」

「キ！ キリミド！ 何言つてるのよあなた！」

「私知～らな～い！」

笑いながら野菜を持って逃げるキリミド。その後を、顔を真っ赤にしたフカミが追いかけていった。

「こりあ～！ 待ちなさ～い！」

森を走り回つている精霊の姉妹。何だか微笑ましい光景だ。三人は、そんな姉妹をしばらく眺めていた。

未開拓地帯から出て街に戻ると、約束の時間が近くまで迫つてい

た。

急いで集合場所に向かうシロヤ達。クロトに三人を乗せて、砂漠を一気に走り抜ける。

結果、約束の時間ギリギリに集合場所に着いたシロヤ達。すでにシアンは集合場所に来ていた。

「むう・・・どうやら急がしてしまったようだな・・・すまない。」

「いえいえ！俺が時間にルーズ気味なだけですよー。シアン様が謝ることありませんよ！」

必死に頭を上げさせようとシロヤに、クスクスと笑うブルーパとローイエ。

「まあ・・・そなたが無事でよかつた。さあ、案内させてもらおう。」

シアンはシロヤの手を握った。どきどきしながら、シロヤはゆっくりとシアンをクロトに乗せる。そしてシアンは、ゆっくりとシロヤに身を預けた。

「そなたの背中・・・大きいのだな。」

「ええ！？あ！あの！どちらに行けば・・・？」

それを聞いてシアンは、ゆっくりと体を直し、クロトに語りかけた。

「クロト殿、すまぬが城の逆側に向かつて歩いてほしい。・・・すまぬな、一人も乗つては重いであろう。」

クロトはその場で足踏みをした。まるで「気にしないで」と言つてゐるかのようだ。

「じゃあシロヤ君。きつちりエスコートしなさいよ？」

「お兄様もお姉様もいつてらっしゃーい！」

手を振つて二人を見送るブルーパとローイエ。そんな二人を背に、シロヤとシアンは城の逆側の方角へと進んでいった。

城の逆側、方角で言うと北には、海が広がっていた。

「ここは・・・これから始まる祭りのイベントの穴場スポットだ。」

シロヤ達が来たのは、海にそびえる灯台だった。灯台の中に入り、長い階段を上がっていくと、城の向こうの街の明るさまで見渡せてしまつほどどの高さになった。

街の向こうを眺めるシロヤ。そんなシロヤに、シアンはゆっくりと寄り添つた。

「・・・！」

そのまま、シロヤの肩に頭を乗せる。まるで恋人同士のようであり、シアンにはそれが心地よかつた。

「あの・・・シアン・・・様？」

「今、そなたと一人つきりなのだな。」

わずかに震える声。

「静かだな・・・まるで世界がそなたと私だけになつたみたいだな・・・」

体も小さく震えている。シロヤは、シアンの手を握つた。

「ふふ・・・そなたの手・・・暖かいぞ・・・。」

突然、寄り添う一人が見上げる空に、光の華が咲いた。

「うわあ・・・。綺麗・・・。」

シロヤとシアンが見ている空に咲く、光輝く大輪の華。街の向こうから上がっているのだが、その光は灯台まで届いている程に光輝いている。

「どうだ？我が国が誇る花火職人達の”砂火薬花火”だ。」

砂のようにサラサラとしたバスナダ特有の火薬は、他の火薬に比べて扱いやすい。それゆえに、昔からバスナダでは花火作りが盛んに行われていた。

他国の人々が、バスナダの花火はどこよりも美しいと言われている理由だ。

「バスナダってすごいですね。食べ物も美味しいし、花火も綺麗だし。」

「ふふ、気に入つてもらえたかな？」

シアンは、シロヤの腰に手を回して引き寄せる。自然と二人は密着しあつていた。

「名物は花火だけではないぞ？砂の酒なんかもこの国の自慢だ。」

バスナダに来てから、シロヤは様々な名物に触ってきた。そのどちらもが素晴らしい、シロヤは全てに満足していた。

そして、このバスナダに住む人達は優しい人達ばかりだ。見ず知らずの旅人にここまでよくしてもらえるなんて、長旅の中で事例は一個もない。

だからこそシロヤは、このバスナダ国に特別な思いを抱き始めていた。

「私は毎年、こうして花火を見るのが好きなんだ。」

シアンは空を見上げながら呟いた。一瞬見た横顔、花火に照られたシアンの横顔には、形容しがたい美しさが秘められていた。

「どうだ？バスナダを好きになつて・・・くれたか？」

シロヤの方を向くシアン。目を合わせてくると、自然とドキドキしてしまつ。

「はい・・・好きに・・・なりました。」

それを聞くと、シアンは「コチ！」と満面の笑みをシロヤに向けた。「うむ、我が国を好きになつてくれて嬉しく思つぜ。バスナダはそなたを心から歓迎しよ。」

そしてシアンは、そのままシロヤの顔の方を向きながら、ゆっくりと目を閉じた。

「・・・！」

シアンは、シロヤの返事を待つていた。目を閉じてはいるが、唇は少し震えている。

「あ・・・あの・・・シアン様・・・？」

自然とシロヤの体も震える。シロヤは、体を震わせながら、ゆっくつとシアンに近づいていった。

「・・・女王様。」

「！！！」

突如後ろから聞こえた第三者の声。シロヤとシアンは同時に振り向いた！

「レーグ！！！」

「ヒヒヒヒヒ！探しましたよ女王様！」

いつからいたのかわからないのだが、確かに後ろに立っていたのはレーグだつた。階段を上つてくる音も聞こえなかつた。

「ヒヒヒヒヒ！女王様、もうそろそろパレードの時間です。今すぐ城に戻つていただけますでしょうか？」

「もうそんな時間が、ならば・・・私はこのお方と戻るつ。」

シアンはシロヤの腕に抱きついた。それを見たレーグは、一瞬だけ顔を歪ませた。

「それには及びません。ヒヒヒヒヒ！」

含み笑いをしたのち、持っていた杖を構えて何かを呴き始めた。

「待てレーグ！転移魔法を使わずとも間に合つであろう！」

「時間が惜しいんですよ。できるだけ早く準備を済ませてください。

」
そう言つた瞬間、強い光がシアンを包み込んだ。強い光に目をくらましたシロヤ。向き直つたときには、そこにシアンの姿はなかった。

「ヒーヒヒヒー！」

レーグは高笑いをしたのち、そのまま杖を構えて再び詠唱する。レーグの体が淡く光ると、そのまま光の尾を残して灯台の窓から飛び出していった。

「しまつた！やられた！」

シアンを転移魔法で城に送り、自分は飛行魔法で城に向かつて行つてしまつた。

すぐさまシロヤは灯台を降りて、クロトに跨がつた。

「クロト！今すぐ城に向かうぞ！」

そのまま走りうとした瞬間、シロヤの頭上が光つた。

流れ星かと思ったが、明らかにおかしい。軌道が地上に向かつているような気がしたからだ。

シロヤの目は間違いではなかつた。流れ星に似た何かは、高速で地上に向かつて降つてくる！

「うわあ！クロト！しゃがめ！」

流れ星に似た何かは、そのままシロヤ達の目の前に落ちていつた。軽い砂ぼこりが舞う中を、シロヤとクロトは確認した。へこんだ砂の中にいたのは、杖を持つた人だつた。

「ごほおー。ごほおー。ぐううー。ほおー！」

人は軽く砂を払い、見に来たシロヤに声をかけた。

「シロヤ様！」

「あなたは・・・リーグン様！」

砂に埋まっていた流れ星に似た何かは、杖を持つたリーグンだった。

リーグンはすぐさま表情を引き締め、シロヤに言った。

「パレードが始まろうとしています！父上率いるバスナダ七人衆も控えています！」

シロヤは聞かされたと同時に走った。その後ろをついてくるリーグン。

「シロヤ様！転移魔法なら私も使えます！今すぐシロヤ様をブルーパ様達の元へ！」

リーグンは杖を構えて、詠唱を始めた。

「・・・シロヤ様、女王様の命をお願いします！」

リーグンの言葉が聞こえた瞬間、シロヤの体が光に包まれた。そして光が消えた頃には、シロヤの姿はなかつた。

包んでいた光がゆっくりと消えて、視界が徐々に回復してきた。手足の感覚も徐々に回復してきた。シロヤはゆっくりと指を動かした。手を上げて見てみると、指の表面に砂が付着していた。シロヤはようやく、自分が倒れていることに気づいた。

「シロヤ君！」

突如気づいた声、頭を上げて周りを確認すると、ブルーパビバルシがシロヤに駆け寄ってきた。

「ずいぶんと遅かったわね。」

「すいません・・・レーグがシャン様を転移魔法で・・・」

「なるほど、シロヤ様を灯台に置き去りにしたわけですか。」

「リーグに話をつけといで良かつたわね。」

ゆっくりと立ち上がり、シロヤは服についていた砂をはたき落とした。

「じゃあ急ぎましょー！パレードが始まっちゃうわ。」

三人は、星が飾られている広場にたどり着いた。パレードを見るために、街の人達は皆城の前に集まってしまったためだろうか、人の気配はない。

「レーグの目的が何にしろ、星の近くに来る可能性は非常に高いわね。」

「ならばここで奇襲をかけるのが得策でしょうね。」

ブルーパビバルーシはが、星を見ながら作戦会議を始めた。

「・・・。」

一人の作戦会議を聞いていたシロヤは、苦い顔をして黙りこんだ。

二人は、レーグの目的が暗殺だということを知らない。だから、今こうやっていることがレーグの目的に対して有効だとは言えない。しかし、暗殺の話をしてはいけないとレジオンに言われている。

「うう・・・・・」

言わなければ駄目な氣もする。しかし言つてはいけない。そんな

板挟みをくらつて困惑するシロヤ。

「シロヤ君？どうしたの？」

「え？ああいや！何でもないです・・・・・」

どうやら葛藤が表に出てしまつていたようだ。シロヤは慌てて笑顔で答えた。

・・・やはり言つた方がいいのかもしれない。シロヤは激しい葛藤の末、重い口を開こうとした。

「あ・・・あのー！」

ヒュン！

「！――伏せて！」

ブルーパが叫ぶと同時に、シロヤとバルーシが伏せる。一人の直線上から、銀色の何かが飛んできた。

「く！誰だ！」

すぐさま体制を立て直したバルーシが、飛んできた方向に向かって叫んだ。

「交わされましたな。」

「あはは！本当だー！」

「あんな的を相手に外すとは・・・・・」

「だからこいつに任せるのはやめようと言つたのに・・・・・」

「まあいいんじゃない？どっちにしろ運命は変わらないんだしさ。」

「しかし奴らは苦しみながら死ぬ方を選んだようだな。」

「・・・・・」

そこに立っていたのは、七人の老若男女だった。

「貴方達は・・・バスナダ七人衆！」

「ええ！あれがバスナダ七人衆？」

高齢の政治家ばかりだと思っていたが、立っている人達は若い人

もいるし女性もいる。そして、七人全員が武器を持っていた。

「レーグ様の命令で三人を殺すように言われました。」

「私達が最優先すべき相手がここにいて好都合だわ。」

そう言うと、一人がボウガンをシロヤに向けた。

「貴方達まさか・・・シロヤ君が目的なの？」

「そうだよ！今度は外さないからね！」

ボウガンの引き金が引かれ、矢がシロヤに向かつて高速で放たれた！

「うわあああ！」

シロヤは思わず目を閉じた。

・・・・・・・・・

暫しの静寂、一番に声を出したのは、ボウガンを放つた人だった。

「うつそー！」

シロヤは目を開けて、前を確認した。

矢は自分には届かずに、第三者によって受け止められていた。

「ぐう・・・・。」

矢を止めたのはバルーシだつた。バルーシは放たれた矢をキャッチしていたが、高速の矢を受けてしまったことで、手からはかなりの出血をしていた。

「バルーシさん！」

「くつ・・・・目的は星じゃないのか・・・。」

「その通りだ！」

またもや聞こえた第三者の声。それは、七人衆がいる側とは反対側の所からだつた。

「ブルーパ！バルーシ！レーグの本来の目的は星じゃない！・シアン

女王の暗殺だ！」

「なんですか！」

「それは本当ですか！レジオンさん！」

声の主はレジオンだった。そして、レーグの本来の目的を聞かされた二人が目を丸くした。

「狙いはパレードの最中だ！今すぐレーグの場所に行かなきゃ手遅れになるぞ！」

それを聞いた瞬間、レジオンが走り出した。それについていくプローパ。しかしシロヤは、走るのをためらつた。

「バルーシさん！」

「シロヤ様！ここは私が！」

いくら兵团長と言えど、七人同時に相手取るのは無理がある。

「シロヤ様、ご心配なさらずに。すぐに後を追います。」

後ろを見て、軽くうなづくバルーシ。それを見たシロヤは、決心して走り出した。

「あはは、本当に大丈夫だと思ってるの？」

バルーシは軽く顔をしかめた。

バスナダ七人衆を同時に相手取るのは容易ではないのは、バルーシが一番よくわかつていた。

「わかつてますよ・・・そのくらい！」

バルーシは、七人に向かつて突撃した。

「レジオンさん！暗殺の件はブルーパ様達には言わないって！」
レジオンの後ろを走つて追うシロヤ。

「七人衆があ前を狙つてたんだ！一人にしておくとあ前もシャン女王と同じように暗殺されてたところだつたんだ！」

走りながらレジオンが叫んだ。

「シロヤ君の暗殺？レーグは何がしたいのかしら？」
同じく走りながら、ブルーパが首をかしげた。

「きやははは！死んじゃえー！」

「ぐつ！」

放つたボウガンがバルーシの頬をかすつた。かすつた部分から、ゆっくりと少量の血が流れる。

しかし、バルーシは怯むことなく突っ込んだ。

「・・・！」

「うわわわ！」

剣を持っていた二人に飛びかかる。一人は同時に飛び退いた。バルーシの拳が空を切るが、そのまま勢いを殺さずに一人に向かって突っ込む。

「うぐつ！」

一人の腹にバルーシの拳が炸裂した！腹を押さえ込んで倒れる一人の剣を、バルーシは空中でキャッチした。そのまま空中で一回転して、地面に着地したと同時に振り向いて剣を構えた。

「これで・・・互角だ。」

剣を構えたと同時に、六人は体を震わせた。剣を持つただけで、バルーシの威圧感が変わったからだ。

「急に変わったわね・・・。」

「なるほど、水を得た魚というわけですか。」

威圧感に圧倒される相手。しかし、その中の一人が突然叫んだ。

「こんなの・・・ハツタリだ！」

激昂して銃を構える。しかし、銃口を向けられてもバルーシは一切動かない。

そんなバルーシを見て、相手はこめかみをピクリと動かした。

「調子に・・・乗るな！」

激しい銃声が三回鳴り響く。銃口から出る煙が、発砲したことを見ていた。

しかし・・・。

「・・・なつ！」

その場にいた全員が唖然としていた。確かに弾は放たれた。しかし、バルーシは全くの無傷だった。

弾を放った相手は驚いたような顔をしたが、すぐさま表情を爆発させた。

「ふざけるなあ！」

またもや激昂。そして銃声。

キインキインキイイイン！

鳴り響く銃声と金属音。そして、立っているのは無傷のバルーシ。

「まさか・・・剣で銃を・・・」

バルーシの足元には、六発の弾丸が転がっていた。そして、バルーシの剣からは煙が上がっていた。

「うそー！」

「さすがは兵团長・・・」

「・・・」

「悔れませんな・・・」

思わず全員がバルーシに向かつて、感心したような声を上げた。

「関係ない！俺が仕留める！」

うずくまつっていた一人が立ち上がり、バルーシに向かつて飛び

かかった。

「無茶ですよ！」

後ろにいたもう一人も、バルーシに向かっていく。

「軌道が・・・まるわかりだ。」

飛びかかった一人の拳の軌道を読んで、ギリギリで交わして蹴りを入れる。

「ぐふ・・・」

気絶したのを確認したのち、足でぶつ飛ばす。そして、向かってくるもう一人に目を向けた。

「一直線に突撃か・・・」

倒れた一人の後ろから飛び込んできたもう一人を、バク転で交わす。飛び込んできた勢いでよろけているのを狙って、前転をして頭にかかと落としを叩き込む。

「ぐつ！」

バルーシは前転の勢いを殺さずに跳躍して、ボウガンを持つている一人を狙った。

「うわあ！」

虚を突かれて動けなくなつた相手に、剣を降り下ろした。

キイン！

「しまつた！」

突如横から鳴り響く銃声。地面に落ちる剣。弾は、バルーシの持つていた剣を弾き飛ばした。

「よそ見しそぎだ！」

「くつ！」

急いで剣を拾おうと体制を立て直すが、その一瞬の隙を狙つて、ボウガンが構えられた。

「チャーンス！」

ボウガンがバルーシに向かつて、空を切つて進つた。

「ぐああああ！……」

「あれー？」

心臓を狙つて放つたボウガンは、バルーシの脇腹を貫いた。空中で急いで体制を変えて、直撃を避けたのだ。

しかし、ボウガンをまともに食らつたことに変わりはない。バルーシの脇腹が瞬時に赤くに染まる。

「くつ・・・・！」

苦痛の表情を浮かべながら、バルーシは剣を拾つて構えた。

「・・・・・」

剣を持つた一人が、バルーシに向かつて切りかかる。バルーシも負けじと剣で応戦する。しかし、ダメージを負つている分、バルーシの動きは鈍くなつていた。

「くつ！」

「・・・・・」

徐々にダメージを負つていくバルーシ。どんどんと体が斬られていき、身体中から血を流していく。

剣だけではなく、横から来るボウガンや銃も、バルーシに更なる傷を負わせている。

徐々に追い詰められていくバルーシ。

「くそ・・・このままでは・・・長くは持たない・・・。」

諦めが頭をよぎる。即座にバルーシは頭を振つて考えをやめた。そうだ！もし今、戦つているのがシロヤ様なら、諦めたりはしない！ならば自分が諦めてはいけないんだ！

「長く持たないなら・・・刺し違えてでも倒す！」

バルーシは、頭を狙つて降り下ろされた剣に向かつていった。

「うおおおおおおーー！」

「・・・！」

剣を持った相手は固まつた。それどころか、他の四人も同じく固まつていた。

バルーシの頭を狙つて降り下ろされた剣は、確かにバルーシにヒットした。

「くう・・・ううう！」

ヒットしているが、バルーシは倒れない。バルーシは、向かってくる剣を頭で受け止めたのだ。

そしてそのまま、頭に剣の刃が食い込んでいる状態から、バルーシは反撃した。

「・・・ぐつ！」

今まで声を出していくなかつた相手が、初めて苦しみの声を上げた。鳩尾に打撃を食らつた相手は、そのまま膝をついて倒れた。

「あ・・・あり得ない・・・。」

「すごい出血量・・・。」

「ハア・・・ハア・・・・ハア・・・・。」

肩で息をするバルーシ。

「でも、そろそろヤバイんじゃないかしら？」

「そうですね。それだけダメージがあれば・・・。」

今、バルーシは立つている。しかし、今立つてることが奇跡だということは、バルーシが一番よくわかつていた。

全身に刻まれた剣、銃、ボウガンの傷。ボウガンが貫通したことで真っ赤に染まる脇腹。そして、頭には剣を真っ向から受け止めたためにできた深い傷。

流れ出る血は、バルーシの体、頭を真っ赤に染めあげている。

そして、バルーシは目がほぼ見えていない。失明ではないが、視界はぼやけていて周りを認識していない。

しかし、バルーシは立つてゐる。そして、残つた七人衆の内の四人に向かつていつた。

「な！まだ動けるの！？」

「こいつ・・・不死身か？」

ボウガンと銃をそれぞれ構える。

今のバルーシに、戦術をその場で考えるような力は残つてない。バルーシを動かしているのは、シアンやシロヤ等、この国に住む人々、守らなければならぬ人々への忠誠心。

そして、生まれながら人が持つてゐる力。バルーシ特有とも言える、バルーシの心の力。

”根性”

「うきや！」

「うぐあ！」

バルーシに恐怖した二人は、一瞬の隙を作つてしまつてゐた。バルーシはそれを見逃さなかつた。すかさず繰り出された打撃は、二人を地に伏せさせた。

向き直つて、残りの二人に向かつて突撃するバルーシ。

「どこまで恐ろしいの・・・？この男は。」

「油断なりません・・・。」

二人は武器を素早く取り出し、素早く構えた。

一人は槍、もう一人は片手斧、どちらも近距離戦用の武器だ。すぐさま、バルーシは剣を取り出して槍と片手斧を防いだ。そして始まる一対一の競り合い。バルーシが不利なのは言つまでもないが、バルーシはただひたすらに競り合いを続けた。

「くつ！」

「・・・！」

二人は、いつの間にかバルーシに圧倒されていた。次第に後ろへと後ずさつしていく二人。

そして・・・。

ガキイイイン！

「うつ！」

「ぐわあ！」

二人の武器を弾き飛ばしたバルーシは、そのままの勢いで蹴りを放つた。

綺麗な弧を描いて、二人は飛んでいった。

「ハア・・・・ハア・・・・ハア・・・・ハア・・・・ハア・・・・」

激しく息をしながら、バルーシは周りを見回した。

バルーシには見えていないが、七人衆は全員倒れていた。

「後を・・・追わなければ・・・」

ふらふらのまま、バルーシは三人が向かっていった方角へと歩きだした。

ヒュン！

「えつ・・・・？」

突如後ろから聞こえた、空氣を切り裂く音。音の正体は・・・。

「ボウ・・・・ガン・・・・？」

そしてそのボウガンは、ふらふらのバルーシの足を貫いた。

「キヤハハハ！油断しすぎだよ～！」

「まさかここまで油断しているとは・・・。」

「まさか私達が立ち上がるなんて思いもよらなかつたでしょうね。
詰めが甘いとはこのことでしょうか。」

「・・・・。」

立ち上がったのは五人だつた。

「立ち上がったのは我々だけですか？」

「最初の一人はダメージを受ける前に気絶させられたからでしょうね。」

「キヤハハハ！ダツサ～イ！」

全員、武器を構え直す。

そしてバルーシは、新たに『えられたダメージによつて完全に意識を手放そうとしていた。

「キヤハハハ！早く死んじやえ！」

さらにバルーシを追い詰めようと、ボウガンをさらに構える。もはや真っ直ぐ歩けないバルーシは、それに抗うことができない。

「キヤハハハ！」

笑いながら、ボウガンの引き金を引いた。

キイン！

「え！？」

確かにバルーシの背中を狙つて放つたボウガンは、空中で方向転換したかと思えば、そのまま勢いをなくして砂の上に落ちた。

そして、落ちたボウガンの傍らには、同じく勢いをなくして落ちた物体が落ちていた。

「これって・・・銃弾？」

そんな事が起きたことを知らないバルーシは、そのまま勢いをなくして倒れこんだ。

「よくやつたな、バルーシ。」

倒れこむバルーシを受け止める一人の男。もちろん、バルーシはその男を知っていた。

「バルーシに変わつて、今度は俺がお相手しよう。」

そして男 ランブウは銃を取り出して構えた。

銃士

「お前は確か……ランブウ！」

「ご名答。」

返事と同時に、ランブウは持っていた銃を発砲した。

キーン！

「ひ！」

相手が持っていたボウガンを弾き飛ばす。それを見た他の四人が、ほぼ同時に武器を構え直す。

「・・・遅い。」

相手が構え直すと同時に、ランブウは懐に手を入れながら引き金を引いた。

「ぐ！」

「・・・！」

素早く放たれた一発の銃弾が、一人の武器を弾き飛ばした。

それと同時に、懐から勢いよく手が引き抜かれた。引き抜かれた手には、銃が一丁握られていた。ランブウは華麗なガン спинを決めながら、もう一丁の銃を素早く放った。

「わ！」

「う！」

引き抜かれた方の銃で、残り一人の武器を弾き飛ばす。

「流石ね・・・。」

素早く武器を取ろうとした五人。しかし、五人の手が武器に触れるることはなかった。

「ぐう！」

「きやあ！」

「うう！」

「ぐわっ！」

「・・・！」

ほぼ同時に五人がうずくまる。五人の手が、みるみるうちに真っ赤に染まる。ランブウは、五人の手に狙いを定めて、ほぼ同時とも言える速度で銃を五発放つたのだ。

ランブウは、静かに銃をしまった。

「ま！待て！」

一人が立ち上がり、震える手で武器を持つて叫んだ。

「まだだ！まだ利き腕をやられただけだ！」

「そ！そうだ！俺はまだやれる！」

一人がそう言つと、銃口をランブウに向かた。しかし、ランブウは動かない。

「やめとけ。怪我じゃすまなくなるぞ。」

「黙れ・・・！」

放たれる銃弾。それと同時に、ランブウも銃弾を放つ。

キィイイン！

一際甲高い音が響く。放たれた敵の銃弾は、ランブウが放つた銃弾によつて勢いをなくして、ふわりと宙を舞つた。

「まさか・・・放たれた銃弾を・・・。」

ランブウは、相手が放つた銃弾を銃弾で弾いたのだ。

それだけでは終わらないと、ランブウはさらに発砲する。

ランブウが放つた一発の銃弾は、またさらに空中で甲高い音を放つた。

ヒュン！

「うわあああ！」

「きやあああ！」

ランブウが放った銃弾は一発だが、二人を掠めたのはそれぞれ二発の銃弾だった。

訳がわからない二人は、そのまま体が膠着してしまった。

「ランブウ・・・舞つていた銃弾に銃弾を当てたのね。」

「よくわかつたな。」

涼しい顔をしているが、ランブウが行つたのは高等技術と言つてもまだ足りないぐらいの技だ。

単に弾が当たつただけでは、勢いをなくした弾の勢いを戻すことはできない。当てる角度や当てる場所等も計算しなければできない芸当である。さらにランブウは、勢いをなくした弾と新たに放った弾の軌道を、四つの銃弾をぶつけることで操作したのだ。

これだけの計算を一瞬で行えるのは、銃士としての才能。そしてランブウが持つている特有の力。

”集中力”

「くそ！お前らなんなんだよ！」

そう言つと、五人が武器を構え直した。

「まだやるのかい・・・しょうがないなあ・・・。」

ランブウは足を軽く振りかぶつて、地面を蹴りあげた。

「うわあ！」

上がる砂埃は、どんどんと強くなつていった。

五人は、完全に砂で封じられた空間に分断されてしまった。

「くそ！どこだ！どこにいる！」

一人が激昂しながら周りを見渡す。しかし、どんどんと悪くなつてく視界は、砂以外を捉えていない。

「なめやがつて・・・うあらあああ！」 銃を乱射する。その音を

聞いたもう一人が、慌てた様子で叫んだ。

「ダメ！こんな砂埃が舞つてる中で銃を撃つては！」

「うるせえええ！」

銃口から放たれる銃弾は、空しく空を切つて落ちていく。そして、銃弾が放たれたと同時に出てくる、小さな火花。

当人がそれを危険なことだとわかつたのは、五人が突然の大爆発に巻き込まれた後だつた。

「やれやれ・・・。」

砂埃が、ランブウの後ろで突然爆発した。その爆発は、外から見たら小規模に見えるが、砂埃の中の者にとつては大爆発と感じるだろう。

「銃士なら・・・戦う環境を考えて銃を扱わなければな。ましてや・・・バスナダの銃士にでもなつたらな。」

砂埃が舞う中で銃を放つことは、バスナダの銃士にとつては危険行為だとされている。それも当然、そんな状況下で銃を撃つとどうなるのかといいうのは、何回も教えられていることなのだ。

バスナダという環境であるからこそその銃士の弱点。

「撃つた時に出る小さな火花は、舞う砂の一粒に引火したと同時に連鎖反応を起こし、爆発する。」

俗に言つ”粉塵爆破”と呼ばれている現象だ。

「冷静さを欠いたからこつなるんだぜ。覚えておきな、バスナダ七人衆。」

爆発した所を見ると、まだ煙が上がつていて確認できない。

「まあ・・・死んではいないだろうな。あいつらも・・・こいつも。」

ランブウは、足元で倒れているバルーシに目をやつた。

「ほら起きろ！後を追うんだろ？」

倒れていたバルーシは、いつの間にか小さな寝息をたてていた。

分断

レジオンは、城に向けて走っていた。それを追うプルーパとシロヤ。

しばらくしてたどり着いたのは、城から少し離れた砂丘だった。
砂丘を登りきった瞬間、レジオンは背中の大剣の柄に手をかけた。
「さて・・・そろそろ出てきてもらおうか？ レーグ。」

「えつ？」

レジオンが呟くと、突然砂丘の一部が大きく盛り上がった。

「うわあ！」

急に盛り上がったことによって、足元の砂が暴れまわる。耐えき
れずに、シロヤはバランスを崩した。

盛り上がった砂が徐々に落ちていき、その中が明らかになつてい
く。その中にいたのは、自分の身長よりも長い杖を持つている小柄
な老人だった。

「ヒヒヒヒヒ！ よくわかりましたね！」

「当然だ。お前とは城に入つてからの同期生だからな。」

対峙する一人。レジオンは今にも大剣を抜こうとしている。レー
グも同じように構えたが、一瞬で構えを解き、含み笑いを始めた。
「ヒヒヒヒヒ！ あなたと戦うのは次の機会にさせてもらいましょう。」

「そう言つと、レーグはレジオンの方に向かつて、杖を軽く振つた。

「ガガガガガー

「何だ！？」

そう言つた瞬間、レジオンの周りの砂が動き始めた。レジオンを
包み込むように盛り上がる砂。その場から離れようと地面を蹴つた。
「無駄ですよ！ ヒヒヒヒヒ！」

さらに砂が盛り上がり、一つの大きな柱となつてレジオンに向かってきた。

「ちつ！」

間一髪で向かつてきた柱を避けるが、その瞬間に、レジオンの体は砂の檻の中に封じられた。

「くそ！叩き斬つてやる！」

レジオンは、背中の大剣で何度も砂の格子を斬りつけるが、叩き斬るどころかひびすらはいらぬ。

それを見たレーグは、再び含み笑いをしながら向き直つた。

「ヒヒヒヒヒ！あともう一人！」

レーグは再び杖を振つた。その瞬間、プルーパの周りがレジオンと同じように盛り上がつた。

「プルーパ様！」

みるみるうちに形成されていく砂の檻。

「くつ！」

砂の格子を蹴りつけるプルーパ。しかし、大剣で斬りつけても効果がないほどの強度を持つため、蹴り程度ではダメージは無いに等しかつた。

「なら・・・これはどうー?」

プルーパは、ドレスの足元から短剣を取り出した。手一杯に短剣を持ちながら、プルーパは激しい舞を踊つた。

だんだんと激しくなる舞、そして勢いが最高潮になつたとき、プルーパは持つていた短剣を全て放つた。しかし・・・。

「ヒヒヒヒヒ！無駄無駄！」

短剣はレーグには届かず、レーグの前に現れた砂の柱が、飛んできた短剣を砂の中に封じ込めた。気づけばプルーパは、完全に砂の檻に捕らえられていた。

「ヒヒヒヒヒ！」

しばらく続く含み笑い。

『氣づけば、そこにはシロヤだけが残っていた。

「ヒヒヒヒヒ！何故自分が取り残されたのかわからない、といった表情ですね。』

レーグは含み笑いを続けながら、タバコを吸い始めた。

「俺は・・・閉じ込めないのか？」

そう聞いた瞬間、レーグは今までにないくらいに高笑いを始めた。「ヒーヒッヒッヒッヒ！何を言っているのですか！私の今の狙いはあなたなのですよ？」

「今の狙いだと・・・俺が目的ってどういうことだー？」

レーグは再び高笑いしながら話を続けた。

「私達が望むのは、シアン現女王の失脚、そして死。

「それと俺がどう関係しているんだ？」

レーグはさらに高笑いをした。

「ヒーヒッヒッヒッヒ！まだわからないのですか！？」

高笑いをしながら、レーグはタバコの前で指を鳴らした。その瞬間、タバコの火が一瞬にして消え去った。

加えていたタバコを投げ捨て、レーグはさらに続けた。

「まだわからないんですか？あなたが死ねば、シアン女王がどうなるのかというのを！」

シロヤは固まつた。

「わからないようですね。まあ、わからないなら好都合です。このまま死んでください！」

レーグが軽く杖を振ると、砂の槍が現れてシロヤに向かつて放たれた。

棒立ちのシロヤに向かつて高速で飛んでいく砂の槍。

「シロヤ！」

檻の中の一人が叫ぶ。

間に合わないと思った直後、シロヤと槍の間に突然、黒く大きな影が割り込んだ。

ヒュン！

槍が突き刺さる。しかしそれはシロヤにではなく、間に割り込んだ黒い影にだつた。

「お前・・・」

割り込んだのはクロトだつた。砂の槍をまともに食らつたクロトの体が、少しずつ血の色を含んでいく。

「クロト！しつかりしろクロト！」

倒れるクロトに駆け寄る。しかし、近づいた瞬間にクロトは大きく叫んだ。

まるで、クロトが「僕の事は気にしないで！」と言つていよいよだつた。そしてシロヤには、今のクロトの叫び声がそう聞こえた。

ゆつくつと立ち上がり、背中の剣を抜いて構える。

「まだ・・・俺はシアン様に”答え”を出してない。答えを出すつて・・・シアン様に言つたんだ！」

決意を固め、シロヤはレーグに向かつて飛び出した。

突撃していくシロヤを見て、レーグが軽く含み笑いをした。

「ヒヒヒヒ！攻めが単調すぎですよ！」

レーグが杖を振るうと、突然砂が盛り上がり塔となり、シロヤとレーグの間に立ちふさがった。急な障害が出現して、シロヤは立ち止まつた。

「ヒヒヒヒ…」

砂の塔の向こうから含み笑いが聞こえた。その瞬間、砂の塔が盛り上がり、そこから砂の針が放たれた。

「うわあ…」

飛んでくる砂の針を避けようと、シロヤは横に跳んだ。

避けきれなかつた分の針がシロヤの体を掠めて、軽い傷がいくつも刻まれた。

「なるほど、反射神経は中々のものですね。」

砂の塔の奥からさらに聞こえるレーグの声。

その声が聞こえると同時に、シロヤに向かつてさらに針が放たれた。

すぐさま体制を立て直して、横に跳ぼうと足に力を込めたした瞬間、シロヤの足元の砂が盛り上がつた。

「…」

盛り上がつた砂がシロヤの脇腹に向かつて伸びていつた。

「うつ！」

足元からの急な攻撃に対応できず、直撃を食らつたシロヤ。よろけるシロヤに向かつて、放たれた針が襲いかかつた。

「くつ！」

真正面から飛んでくる針。構えた剣で体を守るが、腕や足に針が刺さり、シロヤの服を赤く染めていく。

「ヒヒヒヒ！隨分と粘りますね。」

「ぐつ・・・このままじゃ・・・。」

これ以上は持たないと思つたシロヤは、何かを決心するかのよう
に目を閉じた。

カツ！と目を見開き、シロヤは自分の体を守つていた剣を下ろし
た。

「シロヤ君ー？」

「くう！」

思わずブルーパが叫んだ。

剣で守つていた体に針が刺さり、シロヤの顔が苦痛に歪んでいく。
「ヒヒヒヒヒ！諦めて死ぬ気になりましたか？」

さらりと笑うレーグ。そんなレーグを見たシロヤの顔が、一瞬笑み
に変わった。

「誰が・・・そんな」と言つた！

叫ぶと同時に、シロヤは足を前に出した。

「シロヤーまさかお前・・・進む氣か！？」

思わずレジオンが叫んだ。

シロヤは、針が飛んでくる方に向かつて歩き始めた。勢いを増していく針を身体中に受けながら、シロヤは一步一歩踏み出していった。

「むう！針は効果なしですか。」

途端に針が止み、さらに大きく砂の塔が盛り上がった。

「ヒヒヒヒヒ！これはどうですか！？」

盛り上がった砂から、巨大な砂の剣が現れ、シロヤに向かつて伸び始めた。巨大な砂の剣を前にして、シロヤは下ろしていた剣を再び構えた。

「ヒヒヒヒヒー止める気ですか？無駄ですよ無駄！ヒーヒヒヒヒー！」
高笑いをするレーグ。

しかし、シロヤの表情は決意に満ちていた。

「止める・・・止めてみせる！」

砂の剣が勢いを増し、シロヤに襲いかかる。それに向かつて、シ

ロヤは剣を振るつた。

「シロヤ！」

レジオンが叫んだと同時に、砂の剣はシロヤに到達した。

「ぐううう……」

シロヤの剣と砂の剣がぶつかり合つ。砂の剣の勢いを真っ向に受け止めるシロヤの体は、どんどん後ろに押されていく。剣を持つ手が力たかたと揺れ、次第に力が入らなくなる。

「そろそろ限界のようですね。ではトドメといきましょうか！」砂の剣がさらに大きくなり、勢いも増していった。

「くう……」

「ヒヒヒヒヒ！」

シロヤの体がブレ始める。勢いを増した砂の剣を真正面から受け止めているシロヤの体は、予想以上にスタミナを消耗していた。

しかし、シロヤは手の力を弛めなかつた。

一方、砂の剣を維持し続けているレーグは、どんどんと表情を歪ませていた。

「くう・・・なぜここまで持ちこたえるとは・・・。」

対象物（ここでいう砂）を形にして維持するのは、術者に対して予想以上の負担をかける。それは、”賢者”であるレーグも例外ではない。

「仕方ありません・・・。」

小さく呟くと、レーグは砂の剣の勢いを止め、間に立ちふさがっていた砂の塔を崩した。

それと共に、砂の剣が形をなくして落ちていつた。

「ハア・・・ハア・・・・ハア・・・・。」

肩で息をするシロヤ。

「砂の剣を受け止めるとは・・・よほどの名刀でなければ不可能なはずですが・・・。」

もちろん、シロヤの剣が名刀ではないのは、シロヤが一番よく知つていた。

「何で・・・？」

剣を見つめるシロヤ。すると、剣が急に言葉を走った。

「口・さ・シロ・ま・シロヤさま・シロヤ様！」

か細い声がシロヤの耳に響く。その声を、シロヤは聞いたことがあつた。

「この声は・・・クピンさん？」

声の主がクピンであることがわかつた瞬間、頭に映像が流れこんだ。

「クピンー！これを握つて！」

「これって・・・シロヤ様の剣？」

「ほら、早く！」

ブルーパに促され、クピンは剣を持って目を閉じた。その瞬間、剣にクピンの靈力が流れこんだ。

「クピンさん・・・」

映像が止み、シロヤは再び剣を見つめた。

「・・・ありがとう。」

剣を見つめたまま、シロヤはクピンへのお礼の言葉を呟いた。

クピングが靈力を注ぎ込んだ結果、シロヤの剣は名刀と言えるレベルにまで上がっていた。

「ヒヒヒヒヒー！無名の名刀が相手ですか。これはお厳しい・・・ヒヒヒヒヒー！」

口では厳しいと言つているが、その表情には余裕があった。

「それならば手加減はいらないでしょ。ヒヒヒヒヒー！」

軽い含み笑いをしながら、レーグは再び杖を振るつた。

身構えるシロヤの前に現れたのは、四体の砂の人形だった。

「さあ、サンドードル達よ。お相手して差し上げなさい。」

そう言つた瞬間、四体の砂人形が同時にシロヤに飛びかかった。砂人形の動きは早く、さらに四体同時に相手しているシロヤは、明らかに不利だった。

剣がレベルアップしたとはいゝ、シロヤ自身の力が上がったわけではない。四体の砂人形を同時に相手取り、シロヤは苦戦を強いられて苦い顔をする。

「ぐつ・・・。」

「ヒヒヒヒヒー！」

四体の砂人形に翻弄されるシロヤ。それを見ながら、レーグはさらに含み笑いを続けた。

次第にシロヤの体に傷が増えていく。

「くそつー！」

決死の覚悟で剣を振るつ。剣が砂を捉え、一体の砂人形がその姿を崩した。

「えつ？」

確かに剣は砂人形を捉えたが、切つても手応えを感じずに崩れてしまつた。

明らかに脆い。さつきの砂の剣に比べると、その差は歴然だ。

「まさか・・・魔力を節約してゐるのか？」

「瞬の閃きがシロヤによぎる。

レーグは、先程の砂の塔と砂の針と砂の剣で、魔力をかなり使っていた。さらに、レジオンとブルーパを封じてゐる砂の檻の維持コストを加えると、レーグの魔力は半分以上は減つていた。

しかし、賢者は自然と魔力が回復する。そして、今使つてゐる砂人形の維持コストは非常に低い。つまり、レーグは今、魔力を回復する時間稼ぎを砂人形に任せているのだ。

砂人形が脆いのは、砂人形の耐久力はレーグが消費する維持コストと比例するためである。現在レーグが消費してゐる維持コストは、砂人形の形を保たせて戦わせる程度しか消費していない。

シロヤはそれに気づき、すぐさま攻撃の体制に入る。

一体を失つたことによつて、砂人形のコンビネーションに隙間ができ始めていた。タイミングを見計らい、シロヤは隙間を狙つて剣を振るう。

砂人形一体が形を崩す。

「ヒヒヒヒヒ！」

「！」

含み笑いが聞こえた。見てみると、レーグの目の前に何かが現れた。現れたものは、高速回転しながらシロヤに向かつてくる円盤状の砂だつた。

「砂の・・・ノコギリ！」

すぐさま体制を変えて飛び出すシロヤ。続けて二体の砂人形もシロヤを追う。

「ヒヒヒヒヒ！逃げても無駄ですよ！」

ノコギリがもう一つ増えた。日本の砂のノコギリもシロヤのあとを追う。

「ちつ！」

逃げ回るシロヤ。それを追う砂人形と砂のノコギリ。時には砂人形を誘導するかのように、時には砂のノコギリを撒くかのように動

き回る。

しかし、どれだけの動きをしても、砂人形も砂のノコギリも諦めてはくれない。

「……うわあ！」

急に転んだシロヤ。その前には、二体の砂人形が待ち構えていた。「ヒヒヒヒヒ！もう終わりですよ！やつてしまいなさい！」

砂人形の手が伸びていき、先が針のように尖った。それを見たシロヤは、後ろに手をつきながら笑い出した。

「ヒヒヒヒヒ、死の直前が怖くて壊れてしましましたかな？」

「フフフフフ・・・・」

笑みを止めないシロヤ。

そして、二体の砂人形がシロヤに向かって、尖った手を突き出した。

「！…！やめろ！」

急な叫び。その叫び主は、シロヤに・・・ではなく、シロヤの前の砂人形のさらに後ろに叫んだ。

「お前達！避ける！避けるんだ！」

叫び主は、今度は砂人形に向かつて叫んだ。

叫び主はレーグだつた。レーグが叫んだのは、一回目は砂人形だが、一回目は砂のノコギリに向かつてだつた。

砂のノコギリは、シロヤに向かつてどこまでも着いてくる。そして、今のノコギリの位置とシロヤの間には、砂の人形がいた。どんどんと近づいていく一枚のノコギリ。後ろにノコギリが迫っていることを知らない砂人形。

そして・・・。

ザシュー！…！

シロヤの前で、二体の砂人形が切れるような音と共に形を崩した。砂人形にぶつかつていった一枚の砂のノコギリも、同じく形を崩した。

「よし！何とかなった！」

体制を立て直したシロヤは、小さくガツツポーズをした。

「むう・・・まさか・・・人形とノコギリの位置を誘導していましだね？」

ノコギリが出現してからのシロヤの動きは、人形とノコギリをぶつけるために誘導するためのものだつたのだ。

再び剣を構えるシロヤ。それに対して、レーグは始めて表情を歪ませた。

「少々油断しましたね・・・では、そろそろ本氣でいきましょうか！ヒヒヒヒヒ！」

レーグは杖を振るつた。その瞬間、レーグの足元の砂が盛り上がり、レーグの腕を包み込んだ。

腕を包む砂が、次第に形となつてくる。レーグの腕に現れたのは、またもや巨大な砂の剣だった。

「また剣かよ・・・。」

「ヒヒヒヒヒ！ただの剣ではないですよ！』

そう言つと、レーグは剣を振り上げて地面を切つた。

「――――――」

激しい音が鳴り響き、思わずシロヤは目を閉じた。

「ヒヒヒヒヒ！現実を確認しなさい！」

ゆつくつとシロヤは目を開け、レーグが切つた地面を確認した。

「つ――――」

思わず後ろに下がる。

シロヤが見たのは、レーグが砂の剣で切つた地面だった。砂の地面は激しく切り裂かれ、まるで地割れのようになつていた。

「ヒヒヒヒヒ！では・・・行きますよ！」

間髪入れずには飛び出してくるレーグ。右肩を狙つて繰り出された剣を、シロヤは咄嗟に剣で受け止めた。

「ぐう――」

「ヒヒヒヒヒ！』

不気味に含み笑いを続けるレーグと拮抗するシロヤ。

砂の大剣を受け止めた時とは比べ物にならないくらいに重い一撃。

剣を持っている手に強い衝撃が走る。

「ちつ――」

「隙有り――」

強い衝撃を受けたシロヤの手が、一瞬弛んだ。その一瞬の隙を狙つて、レーグは体制を変えた。空中で重心を軸にして体を横回転さ

せ、シロヤが構えていた逆側に剣を持つていった。

ヒュン！

「なつ！」

受けが間に合わないと思つたシロヤは、身を屈めてしゃがみこんだ。レーグの剣が豪快に空を切る。

すかさずレーグに一撃を与えようと、思いっきり地面を蹴るシロヤ。勢いをつけて、シロヤは剣を振つた。

ザシュー！

「！？」

手応えがなかつた。空中で剣を振り切つてゐるため、レーグは隙だらけなはずだ。しかし、シロヤの剣が捉えたのは砂の塊だった。砂の塊は、真つ二つに割れて地面に落ちていつた。

「ダミー・・・？」

「ヒヒヒヒヒ！」

同じく剣を振り切つて、隙だらけになつたシロヤの後ろに現れたのは、同じく砂の塊だった。砂の塊はシロヤに向かつて飛び込んでいき、射程距離内に入つた時には、砂が無くなりレーグの姿が現れた。

「後ろとつたりーヒヒヒヒヒー。」

シロヤを後ろから切りつけようと、レーグは剣を振り上げた。その瞬間、シロヤが動いた。

「つー」

一瞬ためらつたレーグ。しかし、シロヤは田立つた動きをしなかつた。

気にせずレーグは、シロヤの背中めがけて剣を降り下ろした。

キイイイン！

「つー？」

振り下ろした剣はシロヤには届かず、力によつて軌道を変えられてしまつた。空中でよろめきながら見てみると、シロヤは剣を左手に持ち替えていた。

「ぐう！なぜ左手に・・・。」

レーグは空中で体制を整えようとするが、その一瞬の隙に、シロヤは地を蹴つていた。

「しまつた！狙いはそれか！」

「当たり！」

空中で無防備な状態のレーグに、渾身のパンチを入れる。

「ぐう！」

後ろに吹き飛ぶレーグ。

シロヤは、後ろから来た剣を左手で持つた剣で返すことで、その勢いを利用した右手での攻撃を狙つたのだ。

確かに、シロヤの利き手である右手で剣を受けた方が力を加えやすいが、左手の攻撃は慣れていないため、威力が落ちてしまう。逆も同じだが、勢いをつけることで利き手じゃない方の手の力をカバーして、慣れている方の右手の攻撃の方には、さらなる勢いを足すことができたのだ。

「つー・・・戦闘中にそれだけの策を練ることができるとほ・・・。」

よろめきながら、レーグが立ち上がる。

「ふう・・・やはり接近戦なんてアホらしいですね・・・。」

レーグはやれやれと言わんばかりに、両手を横にしてため息をついた。

「考えてみれば、賢者が剣での接近戦なんてバカみたいな話ではないですか？」

問い合わせてきたレーグに、シロヤは無言のまま剣を構えた。

「そもそも、私は国を思つてゐるからこそシアン様暗殺を決行したんですよ。」

「はあ？ 何言つてゐるんだ！」

さつきまでの戦意は消え去つていて、普段のレーグのよつた口調で淡々と語り続けた。

「シアン様は本来、いてはいけなかつた存在。しかし、今日のバスナダを束ねる女王となつてゐる。皮肉なものですな。ヒヒヒヒヒー！ 相変わらず、人をイライラさせる口調と含み笑いだ。シロヤは聞き流そうと剣を持ち直した。

「まあ・・・私はバスナダが好きですからね。願わくは私が新たなる王となり、よりバスナダを住みやすく発展させようとしていたのですが・・・。」

「黙れ！ お前は・・・バスナダを軍事国家にして全世界の頂点にー！」

ドス！

「・・・えつ？」

突如現れた痛み。それは、シロヤの心臓部近くの痛みだった。

「もういいでしょ。あなたとシアン様の二人が死ぬことで、一番この国は平和になるのですから。」

「な・・・に・・・？」

「この国は私が責任を持つて管理いたしますから。」

レーグは杖を軽く振るつた。その瞬間、シロヤの胸に刺さつていた砂のトゲが、形を崩して地面に落ちていつた。

窮地

「シロヤア！！！」

シロヤ君！！！

レオノンと一ノ川が同時に叫ぶ。その矢はいるのは、高笑いを続けるレーグ。そして、まるで糸が切れたように膝から崩れ落ちるシロヤの姿があった。

卷之三

T₁ T₂ T₃ T₄ T₅

- ! ?

卷之三

ヒーローが、何かが飛んできた方向を向いた。

貴様は・・・何故ここに・・・?」

レーケの向いてしむ方向にしたのに、傷たうけの青年を抱えた男だった。

未だ農業を主とする日本は、米の輸出が豊富で、世界の米の供給に大きな影響を及ぼす。

しかし
・
・
・。

ヒーヒヒ！誰が来たかと思えば・・・古株の門番風情の役立た

卷之三

嘲笑しながらのよほ高等レジデンスは無禮で、ハハハ正銃弾を放つた。

卷之三

高笑いしながら、レーグは杖を振つて砂の壁を作り出した。銃弾は砂の壁に阻まれ、壁の後ろにいるレーグには届かなかつた。

「ちっ・・・。」

「ヒヒヒヒヒ！わからないんですか？銃士なんて低級クラスの人間が賢者に立ち向かうこと 자체が愚かだと言ひ」とを…

「黙れ・・・。」

構わず発砲しようと引き金に力を加えるランブウ。

「！？」

しかし、ランブウがいくら引き金に力を加えても、銃口から弾は発射されなかつた。

ランブウが銃口を確認すると、銃口には砂が奥まで詰められていた。

「くそつ・・・。」

二丁の拳銃を素早くしまつて、流れるような素早い動作で、背中にかけてあつた散弾銃に手を伸ばした。

しかし、レーグにとつては今のランブウの動きは遅すぎるのでいた。

すぐさま杖を振るレーグ。その瞬間、ランブウの足元が鋭く盛り上がり、砂の針が出現してランブウの腕を貫いた。

「つ！」

砂の針を伝つて、ランブウの血が地面に落ちていく。血がだんだんと落ちていくにつれて、腕の力が無くなつていき、いつの間にか散弾銃を地面に落としてしまつっていた。

「ヒヒヒヒヒ！腕破壊は銃士相手に一番効果的ですからね…」

再び杖を振ると、出現したのは砂の拳だつた。砂の拳は、素早くランブウの鳩尾を狙つて伸びていつた。

ドス！

「ぐうー！」

そのまま後ろに吹つ飛ばされるランブウ。そして、ランブウに支えられていたバルーシは、支えを失つてしまい前のめりに倒れた。

「うう・・・」

「そこの、アミも処理しておきましょう。」

倒れた衝撃で目を覚ましたバルーシに向かつて、レーグは軽く杖を振った。

その瞬間、バルーシの胸をめがけて、砂の針が素早く突き刺さった。

「ぐわあああ！！！」

再び前のめりに倒れるバルーシ。倒れている所の砂が徐々に赤く染まつていった。

「レーグ・・・シロヤ君だけじゃなくランブウとバルーシまでも・・・許さない！」

檻の中のプルーパが激昂して、短剣を構えた。

「ヒヒヒヒヒー！さつき無駄だとわかったのではないのですか？」

レーグの言葉が終わる前に、プルーパは短剣を高速で投げていた。「だから無駄だと言っているでしょう！ヒヒヒヒヒー！」

すぐさま砂の壁が出現して、プルーパの短剣はそこで阻まれてしまつた。

「ヒヒヒヒヒー！檻の中についても危険ですね・・・ならば・・・。」

レーグは再び杖を振った。それはプルーパに向かつてではなく、その後ろの砂の檻に向かつてだった。

「危ない危ない！まさか砂の格子を破壊しようなんて・・・。」

見ると、砂の格子がひしやげていた。ひしやげた格子を破壊しようと、閉じ込められていたレジオンは、格子に何度も大剣をぶつけていた。

「ヒヒヒヒヒー！出られてはたまりませんから・・・。」

その瞬間、レジオンを包む檻が変化した。再び復活した格子。そして、新たに現れたのは、まるで拷問器具のような針の壁だった。「ちっ！また破壊すればいいだけだろうが！」

再び大剣をぶつけた。

その瞬間、砂の格子から新たに砂が現れ、大剣もろともレジオン

を絡めとつた。

「へそ！離しゃがれ！」

暴れて砂から逃れようとしているレジオンに向かつて、容赦なく

そして…。

「ぐああああああ
！！！」

無情に貫かれるレジオンの体。おびただしい量の血が針の壁を真つ赤に染まる。

「レジオン！・！・！」

ブルーが叫んだ。

次の瞬間、ブリ

卷之三

めとつた。

いやあ!!シロヤ君!!シロヤ君!!

無馬

すでに目の前まで迫っていた砂の壁。解けない砂の拘束。ブルー
パは思わず目を閉じた。

•
•
•
○

絶望

目を閉じて死を覚悟したプルーパ。しかし、体に痛みは訪れてこなかつた。

・・・自分はもう死んでいるのだろうか？
そんな考えが頭をよぎる。

「・・・」

ゆつくりと目を開けるプルーパ。目の前の景色が頭に流れ込む。
「！――！」

瞬間、プルーパは声にならない叫びを上げた。針の壁は、プルーパと壁の間に現れた第三者によつて止められていた。第三者は壁の針を全身に受け、おびただしい量の血を出しながら壁の進行を止めていた。真っ赤な血がプルーパにまで届く勢いで吹き出し、プルーパの頭をわずかに染めた。

「う・・・。」

「シロヤ君！――！」

針の壁を、シロヤは体で止めていた。自分の血で服や髪を真っ赤に染めながら、シロヤは必死に壁を止めていた。

「プルーパ・・・さ・・・ま・・・。」

「シロヤ君・・・！――！」

消えそうな声で名前を呼ぶシロヤを見て、プルーパはぼろぼろと涙を流した。そんなプルーパに、シロヤは必死に微笑んだ。

「もうやめて・・・！シロヤ君・・・！」

涙を流しながら懇願するプルーパだが、シロヤは何も言わずに微笑み続けた。

本来なら絶命してもおかしくないぐらいの傷を受けながらも、シロヤはまだ生きている。そんな事実を受け止められないレーグは、今までに見たことない程の叫びを上げた。

「うぬう！何故まだ生きているんですか！――！」

軽く杖を振つて砂の檻を壁」と崩す。それによつて、シロヤとブルーパは外へと出された。

すぐさまレーグは杖を震い、シロヤの足元に砂の針を作り出した。砂の針が勢いよくシロヤの両足を貫いた。

「ぐうう！」

「いやあ！もうやめて！」

ブルーパが叫んだ瞬間、新たに現れた砂の針が、同じくブルーパの足を貫いた。

「きゃあああ！！！」

「ぐ・・・ブルーパ様・・・！」

両足の支えを失つて、ブルーパはそのまま前のめりに倒れこんだ。「ヒヒヒヒヒ！素直に全身を貫かれて死んでいればいいものを！」

「レーグ・・・！レーグ！」

貫かれた足に精一杯の力を込めて、思いつきり地面を蹴る。そのままレーグめがけて、シロヤは我が身を投げ出すかのように走り出した。

「まだ動けるんですか？なら・・・こつしましょうー！」

シロヤの進路の砂が盛り上がり、またもや砂の針が勢いよく飛び出で、シロヤの右胸を狙つた。

「ぐ・・・うおお！」

走りながら叫ぶシロヤ。叫んだ衝撃で全身の傷から血が吹き出るが、お構いなしにシロヤは走り続けた。

「右胸・・・狙いは・・・右胸！」

右胸を狙つて飛び出てきた砂の針を避けて、その勢いのままレーグに体当たりした。

「うぐっ！」

シロヤの体当たりを受け、レーグは後ろに吹つ飛んだ。

「ぐうう！少しあなたをなめていたみたいですね！」

レーグはさらに杖を振るつた。その瞬間、地響きと共に大量の砂がレーグの周りで浮き始めた。

「ヒヒヒヒヒ…」

また杖を振ると、大量の砂が大量の砂の槍へと変化した。

「ヒーヒヒヒ…これだけの砂の槍！避けれますかな…？ヒーヒヒヒ…」

三度杖を振ると、砂の槍がまるでマシンガンのようにシロヤに向けて放たれた。

「くうう！」

剣でその身を守りながら、ゆっくりと前に進もうと足を前に出す。しかし、その足を狙つて砂の槍が降り注ぎ、シロヤの足をまるでサボテンのような姿に変えた。

「ううう…！」

苦痛を訴えるような声が漏れる。しかし、攻撃は全く止まない。踏み出した足だけでなく、もう片方の足や腕にも砂の槍が突き刺さり、頭を掠めた砂の槍は、わずかに尖端を血で染めて地面に還つていく。

「そろそろ…・・・幕を下ろしましょ…！」

一際大きな拳動で杖を振ると、大量の砂の槍が一点に向かつて降り注いだ。

「これで終局です！」

・・・・・・・・・・・・

レーグ以外の全員が同じ方向を見ていた。そして、声はおろか息すらままならない状況に陥っていた。

「シロヤ…・・・君…・・・。」

「シロヤ…・・・シロヤ…・・・…。」

ブルーパとレジオンの声がどんどんと震えていく。もはやその声からは、冷静さを完全に欠いていた。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ…ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ…ヒーヒヒヒヒヒヒ

ヒヒヒ…」

無情に響く高笑い。その先にいたのは、槍に上半身の大半を貫かれて、完全に力を無くしたシロヤの姿があつた。

「シロヤ君・・・シロヤ・・・君・・・。」

倒れながら、いつまでも名前を呼び続けるブルーパ。いつの間にか地面の砂を握っていた。砂はいくら強く握つても、まるで流れるようになづらパの手から落ちていつた。

サラサラと流れ落ちる砂。それはいつの間にか、小さな山を作つていた。

「シロヤ君・・・シロヤ君・・・！」

名前を呼び続けるブルーパの目に、一瞬だけ砂の山が光つたように見えた。

一瞬だと思った光は、どんどんと強くなつていく。

「つ！」

一際強い光の後にブルーパが目にしたのは、大量の光が砂丘の向こうから流れてくる光景だつた。

砂丘の向こうから流れてきた光は、瞬く間に砂漠を包み込んでいく。光はさらに増えていき、やがて、倒れているレジオンやランプウェやバルーシ、そして、全く動かないシロヤも包み込んだ。

「何ですかこれは！――何が起こっているんですか！？」

レーグは光に包まれながら、疑問の言葉を発している。

ブルーパは力を振り絞り、光輝く砂をすくって、霞む視界で砂を見つめた。

「これ・・・まさか・・・。」

ブルーパは砂を見つめながら、信じられないと言つような表情を浮かべていた。

ブルーパがすくつた砂は、一粒一粒が光輝いていて、見ているだけで力が湧いてくる。

「砂じやない・・・やっぱりこれは・・・！」

ブルーパが言葉を発しているのに気づいたレーグは、すぐさまブルーパに近づいて叫んだ。

「これは・・・何なんですか！答へなさい！」

レーグが杖を振るう。しかし、砂の針が出現することはおろか、砂は一切の動きを見せなかつた。

「何故！？何故砂を操れない！」

焦りを見せるレーグに、ブルーパは倒れながらゆっくりと語りだした。

「簡単よ・・・だつてこれ・・・砂じやないもの・・・。」

「砂じやない！？ならば何だと！」

「自分で・・・確かめなさい・・・！」

レーグはすぐさま砂をすくつた。途端に、レーグの顔が青ざめていった。レーグの手のひらの上の物は、”星の形をした砂金”だつた。そしてこの砂金の正体を、レーグはよく知っていた。

「これは・・・まさか！」

「そうよ・・・！あなたが求めていたもの・・・星よ・・・！」

砂漠に広がる光は、全ては星が放っていた砂金の光だったのだ。レーグの手から星が降り落ちるが、拾おうともせずにレーグはさらなる疑問を投げ掛けた。

「しかし・・・何故急に・・・！」

「流星・・・」

震むような声でブルーパが呟いた。

流星。百年に一度、星の形をした砂金が出現する現象。ブルーパもレーグも初めて見る現象だつたが、それは当然の話だつた。

「しかし・・・まだ百年経つてないはずでは！」

「ふふふ・・・」

ブルーパは静かに笑つた。まるで全てが分かつているかのようだ。

「呼び寄せたのよ・・・星に選ばれた戦士が・・・ね。」

その瞬間、レーグの後ろで光の柱が上がつた。光はゆっくりと砂金となつて落ちていき、現れたのは一人の戦士の姿だつた。

「ぐうーくそ！」

「あう！」

ブルーパの頭を全力で踏みつける。氣絶する直前のブルーパは、

何故だか微笑んでいた。

気にならずに何度も頭を踏みつけるレーグ。

「・・・おい。」

声が聞こえた瞬間、レーグの肩に誰かの手がかかった。その手には一切の傷がなく、星と同じように光輝いていたようだつた。

「その足を・・・離せ。」

すぐさま魔法で距離をとるレーグ。ブルーパが光に包まれていくのを見守りながら、選ばれた戦士は星に向かって優しく微笑んだ。

「貴様が選ばれた戦士なのか！シロヤー！」

レーグの叫びに選ばれた戦士が反応し、ゆっくりと口を開いた。

「ああ、気づいたら傷も何も無くなつていた。」

そして、選ばれた戦士 シロヤはゆっくりと剣を構えた。

しかし、レーグは構えようとせず、嬉々とした表情を浮かべた。

「素晴らしい・・・素晴らしいよー君は星の素晴らしいさを教えてくれたのだ！」

レーグはそのまま星を掴んだ。

「あー！その素晴らしい力を私にもーこれがあれば無敵！敵無し！最強だ！ヒヒヒヒヒー！」

高笑いしながら、どんどんと星を撒き散らしていくレーグ。しかし、星はレーグの周りでゆっくりと落ちていくだけで、力を与えるようには見えなかつた。

「何故だ・・・何故私の力は増えないのだ・・・。

愕然とするレーグ。一瞬まばたきをした瞬間、レーグの目にシロヤの顔が映りこんだ。

「しまつ！』

防御をしようとしたが間に合はず、シロヤの剣がレーグの上半身を横に斬りつけていた。

「うああ！』

後ずさりをしながら、レーグは切られた傷跡に魔法をかけようとする。しかし、その一瞬よりも短いと思われる瞬間に、シロヤは第一撃をレーグに『えた。

「くつ！』

足を切られ、思つよつて動けなくなつたレーグは、そのまま地面に倒れこんだ。

「くう！何故だ！何故なんだ！』

またもや一瞬隙を見せたレーグ。その一瞬のうちに、シロヤはもう間合いを詰めていた。

「さつきのはバルーシさんの分、今のはランブウさんの分だ。」ゆっくりと、シロヤは腕に剣を突き立てた。

「ぐあああああーーー！」

「これが・・・レジオンさんの分。』

「

突き立てた剣を引き抜き、右足を高く上げた。そのまま高く上げた右足を、レーグの頭めがけてまっすぐに勢いよく降り下ろした。

「がはつ！」

「これが・・・ブルーパ様の分だ。」

頭を踏みつけられたレーグは、ゆっくりと立ち上がり再び構えた。

しかし、構えるという戦闘での一動作すら、今のシロヤにとって間合いを詰めるには十分な時間だった。

「うぬつ！」

目の前に現れたシロヤに、レーグは思わず身震いした。賢者のレーグにとって、今日の前にいるシロヤという存在は異質でしかなかった。戦士の様な腕っぷしの強さとも違う。魔術師の様な魔力を秘めた強さとも違う。全く未知数な”強さ”に、歴戦を越えてきたレーグは恐怖していた。

しかし、小さく震えるレーグを見ても、シロヤは表情を変えなかつた。

「・・・まだだ、お前への制裁はまだ済んでいない。」

シロヤは拳を振り上げた。

「ヒヒヒヒヒ！諦めてなどいませんよ！」

拳を振り上げたシロヤを目の前にして、レーグはいつもと何も変わらずに高笑いした。

「まだわからないのですか？私が何故、何もせずに黙っているかが！」

瞬間、レーグの後ろで砂金が盛り上がつた。

「・・・！」

砂金は巨大な柱となり、シロヤを上から見下ろしていた。

「ヒヒヒヒヒ！あなたの陰で星を操る程の魔力を手に入れることができました！ヒヒヒヒヒ！」

「俺の・・・お陰？」

シロヤは剣を構え、疑問を口にした。

「あなたが私を痛めつけたお陰で、私の魔力の上限がさらに上がりました！ヒヒヒヒヒ！」

レーグの隠し玉、与えられたダメージ分だけ魔力を回復・上昇させる賢者のスキル、”ダメージリリース”を発動させたのだ。星の力によつて与えられたダメージは、レーグにそれ相応の魔力を与え

たのだ。

「ヒヒヒヒヒ！わかる、わかるぞ！力が増大していく！力が我に！」
ヒヒヒヒヒ！

レーグを包み込むように、砂金が舞い上がる。砂金に包まれたレーグは、さながら金の繭で羽化を待つ蝶のようだった。

「ヒヒヒヒヒ！星が私に力を与えてくれる！素晴らしい！素晴らしい！…素晴らしい…！」

金の繭の一部が盛り上がり、そこから砂金の針が現れた。

「哀れだな…貴様は。」

「ほぞけるのも今だけですよ！ヒヒヒヒヒ！」

砂金の針がシロヤめがけて放たれた。

シロヤは一瞬目を閉じ、何かを祈りながら走り出した。
「遅い…」

ヒュンヒュン！ヒュンヒュン！

「何…？」

高速で放たれた砂金の針を、シロヤは何事もないかのように交わす。それはまるで、砂金の針がシロヤを避けているようだった。

「何故だ！何故当たらない！」

激昂しているレーグ。その瞬間の間に、シロヤはすでに金の繭の前にいた。

「何故だ！何故貴様に星の針が当たらない！」

叫ぶレーグを包む金の繭の前で、シロヤはゆっくりと剣を振りかぶった。

「言つただろう？星に選ばれた者じゃないと星は操れない。」「ほざくな！」

突如、シロヤの目の前で砂金の針が現れ、シロヤの腹部を貫いた。わずかに傷口から血が流れるが、シロヤは倒れるような気配は全くしなかった。

しつかりと大地に足をつけるシロヤ。そんなシロヤを、足元の砂金が優しく包み込んだ。シロヤの腹部を貫いた砂金は崩れ、貫かれた腹部は一切の傷を残さずに消え去った。

「！」

「人が星を選ぶんじゃない。星が人を選ぶんだ。」

シロヤは剣を振り上げた状態で止まり、一点を見据えながら口を開いた。

「星は・・・ただ力を増幅させるだけの道具じゃない。それは星と共に生きてきたバスナダの民ならばわかるはずだ。」

「ヒヒヒヒヒ！星が道具じゃない！？」

さらりと現れた針がシロヤを貫く。右足、左足、腹部、左胸と、まるで苦しめるかのように貫いていく。

しかし、貫かれた傷跡はすぐさま星によつて癒され、まるで何事もなかつたかのようにしてしまつ。

「まだわからないのか。星が望むのはこんなことじゃないんだ。」「つるさいー！つるさいー！」

針は何度もシロヤを貫ぐが、傷跡は星が全て癒されていく。そして、新たな針がシロヤの左目を貫いたとき、シロヤは初めて表情をえて動いた。それと共に、空気が一瞬静まった。

「星が望むことに耳を傾けないお前にー！」

「星は操れない！」

振り下ろされた剣が金の繭を切り裂いた。

「うがあああああー！！！」

苦しむような断末魔が、星が包む大地に響き渡る。

シロヤの剣が光を放ち、金の歯が音を立てて崩れ落ちる。光はさらに世界を包み込むかのように広がっていく。シロヤとレーヴは、そんな光に包まれながら意識を手放した。

・・・・・・・。

・・・・・・・。

・・・・・。

ゆっくりと目を開けるが、まだ視界には眩しい光が映っていた。何も見えない真っ白な世界に、シロヤは一人で立っていた。歩き出してみると、地面を踏んでいるのかもわからない。まるで別の空間の中に迷いこんでしまったかのように。

しばらく歩いていると、白い光の向こうに何かを見た。その何かが、光ではない何かと認識した瞬間、音も立らずに何かはシロヤの前にやって来た。

「はじめまして・・・田の勇者よ・・・。」

そこに立っていたのは、巨大な剣を持った白い全身鎧の男だった。

「白の・・・勇者?」

謎の人物の言葉に、シロヤは思わず首をかしげた。自分が勇者と呼ばれる意味がわからずを考えていると、謎の人物はそのまま言葉を続けた。

「白の勇者よ、この砂は好きか?」

突然の問いに、シロヤは戸惑いながら首を縦に振った。それを見た謎の人物は、思った通りの返事が聞けたのか、嬉しそうに微笑んだ。

「白の勇者よ、まだこの地は平和にはなっていない。白の勇者の選択は、まだ試練の段階を越えてはいない。」

試練の段階とは何なのか。様々な疑問が頭をよぎるが、謎の人物はお構いなしに言葉を続けた。

「白の勇者よ、耐え難い困難がこの先に待ち受けているだろうが、白の勇者は立ち向かうか?」

シロヤは首を縦に振った。もちろん、シロヤはバスナダのためならばどんな困難にも立ち向かうつもりでいた。それは、シアンやブルーパやバルーシらに対するお礼の意味もある。しかし、やはり大半を占めるのはシロヤ自身の選択。だからこそ、シロヤは立ち向かう勇気が得られるのだ。

期待した通りの答えを得て満足したのか、謎の人物は微笑みながらシロヤの頭を撫でた。

「白の勇者よ、望んだ世界は自身が作るのだ。白の勇者が紡ぐ世界を・・・しばし見学させてもらおう。」

その瞬間、謎の人物の体が光の粒子となつて消えていった。

そして一際強い光がシロヤの視界を奪い、シロヤの意識は再び暗黒に包まれた。

・・・・・・・・・・・・

・・・・・

いつしか暗黒が、瞼の裏の世界へと変化した。

シロヤはゆっくりと目を開けた。

「ん・・・・。」

目を開けて最初に目にに入ったのは、無機質な石の天井だった。そして体を包む布の感触。どうやらあのあと、誰かの手でここに運ばれたようだ。

「目が覚めたか・・・・。」

突如、横から声が聞こえた。驚いて顔を上げると、そこにはシアンが立っていた。その表情は、色々な感情が幾重にも重なつてできただような表情をしていた。

「あの・・・ここは？ プルーパ様やバルーシさんは・・・・？」

シロヤの質問に、シアンは重そうに口を開いた。

「全員治療を受けている所だ。」

そう呟いたシアン。

シロヤはゆっくりと体を起こし、周りを確認した。自分が寝ている簡易ベッドの他にあるのは、冷たくシロヤを見張る鉄格子だった。「ここは・・・牢屋？」

牢屋の中には、牢屋の中にはいるという事実を受け止められないシロヤ。よく見ると、鉄格子の向こうから数人の兵士が、シアンを心配そうに見つめていた。

不安な表情を浮かべたシロヤを見て、シアンは悲しい顔を浮かべた。

「そなたがあのよくな悪事を働くとは・・・・。」

シロヤにはシアンの呟きを聞き取ったが、何を言っているのかわ

からなかつた。

「悪事……？」

シアンはさらに続けた。

「星夜祭の夜、バスナダ七人衆に大怪我を負わせ、さらにはそれを止めに来たお姉さまをも手にかけ、最後には大臣であるレーグまで手にかけようとしたという情報が入つたのだ。」

「……えつ？」

シロヤは耳を疑つた。あの時の出来事が、全て自分を引き金にして起きた犯罪行為という形になつてしまつていて。どうやら、鉄格子の向こうの兵士達が向けていたのは、犯罪の疑いがかけられるシロヤに対する疑心の目だつたのだ。

訳がわからないといった表情を浮かべているシロヤ。それを見つめていたシアンの目には、いつの間にか涙が溜まつていた。

「私も信じられぬ……そなたが国を潰そうといつ……テロリストであることなど……！」

まるで泣きつくかのよう、シアンは田でシロヤに訴えかけていた。

「……」

その瞬間、シロヤは語った。

「違うのなら……違うと言つてほし……あらぬ疑いをかけたことを謝りう……」

その言葉を聞いた瞬間、シロヤは舌したことそのまま口に出しあつた。

「……………本当にです。」

シアンの表情は変わらない。しかし、シアンの思考は狂つているのだろう。身が小さく震え出していた。

「……………そ、うか。」

涙を押し殺しているようなシアン。

そして、表情を変えないままシアンはシロヤに言った。

「そなたをA級犯罪者と認定し、今後バスナダ国に入国を禁ずる。」

シロヤは、ゆっくりと頷いた。

「ならば……これから関所に向かつてくれ。私はまだそなたが犯罪者であることを信じたくない。そなたは見ず知らずの私に優しくしてくれた方。だから……せめて関所までの道にそなたへの見張りはつけないつもりだ。」

それが、シアンがシロヤに対する最後の愛情なのだろう。シロヤは再びゆっくりと頷いた。

互いに涙をこらえながら部屋を出た一人。そして、シアンは王室に向かつて、シロヤは城門に向かつてそれぞれ別れて歩き出した。

「う・・・うう・・・」

シロヤの後ろから泣き声が聞こえたが、シロヤは振り向かずに城門を開けて外に出た。

城門前には、クロトがシロヤを待っていた。体には包帯が巻かれていって、背中にはシロヤが持っていた荷物が積んであった。

「クロト・・・。」

悲しそうな顔をするシロヤに、クロトはゆっくりと顔を寄せた。

「ハハハ・・・そつか、暗い顔しても始まらないよな。」

無理矢理笑顔を作ったシロヤは、クロトにまたがつてゆっくりと歩き出した。

「街はまだ祭りの片付けが終わってないみたいだな。」

日はまだ出始めで人の姿はない。祭りの片付けが済んでないのを見ると、星夜祭の日からそれほど時間が経っていないみたいだ。

「バスナダの名物とも・・・お別れかな・・・。」

クロトが悲しそうに鳴いた。それを聞いたシロヤは、微笑みながら周りを見回した。

「せめて最後に何か買つていきたかったけど・・・犯罪者なんだしおやめた方がいいかな。」

クロトも事情を察したのか、すこし早歩きで関所を目指した。
「クロト・・・せめて最後にバスナダの街並みをゆっくり見てから行こう。」

シロヤがそう言つと、歩みをゆっくりにして、二人はバスナダの景色を見ながら歩いていった。

街外れの森に入ると、シロヤは立ち止まって一点を見つめた。

「確かここで・・・シャン様を助けたんだっけ。」

それからパレードに参加したら、豪勢なもてなしを受けて城にまで招待された。バルーシやブルーパやクピンに会つたり、レーグの一件に関わってしまったのもその日だった。

さらにはローイヒやワーレーン、フカミとキコリデヤレジオンにも会つた。

そして・・・シャンがシロヤに告白したりもした。街をさらりと好きになつてもらおうと、星夜祭に招待された。

そして・・・シャン暗殺を企てるレーグとの戦い。シロヤは服の下を見てみると、あの時に貰かれた傷などは残つていなかつた。星に選ばれ、今までにないぐらいの力を手にしてレーグを倒すが、待つていたのは犯罪者のレッテル。

「でも・・・何でなんだろ?」

そんなことを思つてゐるうちに、シロヤとクロトは関所についた。そこにいたのは、シロヤとクロトがバスナダで初めて会つた人がいた。

「よお、シロヤ。」

「ランブウさん!」

関所にいたのは、あの時と変わらずランブウだった。

「まあ・・・なんだ、氣にするな!俺達の力が弱かつたのもあるが・・・」

どうやら、シロヤがかなり沈んでいるようと思つてゐるらしい。シロヤは笑いながら口を開いた。

「いえ、氣にしてませんよ!元々よそ者だつたんだから・・・」

暗い雰囲気が漂つ。

「・・・ああ、スタンプ押さないとな。シャン様から預かってるんだ。」

ランブウは、バスナダのスタンプを取り出した。

「あ、はい。ええっと紙はどこだ・・・?」

ボコッ!

「うわあ!」

紙を探している最中に、急に地面が盛り上がり、何かが顔を出

した。

「ん？ああ、伝書土竜だよ。どれどれ……。」

伝書土竜が持っていた紙を受け取り、田を通すランブウ。

「・・・。」

読んでいくうちに、顔をしかめていくランブウ。

「あの・・・ランブウさん？」

気になつたシロヤは、勇気を持つて話しかけてみた。するとランブウは、無言のまま持っていた紙をシロヤに手渡した。

「なんだろ？・・・。」

シロヤは、ゆっくりと紙に書かれている内容に田を通した。

”緊急命令書”
この命令書が届いた時間から、最高責任者の命があるまで関所を封鎖せよ。

どんな事情があつとも、国から人を出すことを一切禁止とする。

なお、関所管理・出国禁止命令に関する最高責任者を、女王シアンと認定する。

シアン・ラーカ

「出国・・・禁止命令？」

出国禁止命令、つまり國から出る」ことを禁じる」こと。

「でも俺は犯罪者なんだから・・・。」

「どんな事情があつとも・・・って書いてあるだろ？。」

口を開ざす一人。

しばらく沈黙が流れたあと、またもや伝書土竜が姿を現した。

「またか・・・今度はなんだ?」

再び紙に墨を通す。すると今度は、訳がわからないような表情を浮かべている。

「あの・・・どんな内容なんですか?」

しばらく黙りこむランブウは、やがて口を開いた。

「俺にもわからない・・・ただ、ここに書いてあるのは単純なことだ。」

そう言つて、ランブウは奥からテレビを持ってきた。

「数分後に行われるシャン様の演説をシロヤに見させてくれって内容だった。」

そう言つてランブウは、すぐさまテレビをつけてアンテナを合わせる。

やがて、台が置かれた城門前の映像がテレビに映った。

「演説・・・?」

「よくわからないが、まあ見ればわかるだろ?。」

しばらくすると、テレビにシャンが映った。

「シャン様!」

食い入るようにテレビを見つめるシロヤ。

テレビの向こうのシャンは、大きく深呼吸をした。

「皆の衆一急にこのような場を設けたのには理由があるー。」

シャンの演説が始まった。

「皆の衆！ 昨夜の星夜祭は大成功に終わった！ 皆の頑張りが大成功に導いたのだ！」

凛とした声で演説を始めたシアン。

「しかし・・・昨夜、大臣のレーグとバスナダ七人衆が重症を負うという事件が起きた。我々は、以前にバスナダを訪れた旅人、シロヤをA級犯罪者に認定、国を追放することにした。」

少し前に起きた出来事を淡々と語るシアン。話していくうちに、シアンは目に涙を溜めていた。

「しかし・・・。」

そう呴いた瞬間、シアンの頬に一筋の涙がこぼれ落ちた。

「しかし！ その後、レーグの部屋からこの署名が見つかった！」

シアンは紙を取り出して、その紙を高くあげた。

「これには、レーグとバスナダ七人衆の署名がなされている。そしてこの署名された紙に書かれた内容は、私の暗殺を企てるための計画書だつた！」

「つ！」

テレビを見ながら、シロヤは絶句した。

「おかしい・・・なぜあの署名がシアンの手元に・・・？」

ランブウが驚いたように呴いた。

テレビの向こうのシアンはさらに演説を続けた。

「私は愚かな間違いをしていた！ あの方はレーグやバスナダ七人衆を手にかけようとしていたのではなく、私を助けようと尽力してくれたのだ！」

そして、シアンはぼろぼろと涙を流した。泣きながらも、涙を拭おうとせずにシアンは演説を続けた。

「私は・・・実に愚かだ！ 命を一度も助けてくれた者を犯罪者と認定して追放するなど・・・実に愚かだ！」

どんどんと強くなるシアンの演説。涙を流しながらも、その声は凛としている。

「IJの愚かな所業を犯したことを見た。私はあなたの方に謝りたい。」

「しかし、あなたの方はもう戻つてこないだろう。」

「強くなっていた演説がどんどんと涙声に変わっていく。」

「だから・・・私は今、ここに宣言しようと思う。私のこの判断が皆に被害を与えるのではないかと思うが、私の最初で最後のわがままだと思って聞いてほしい！」

深呼吸を一つして、さらに凛とした声で宣言した。

「再びあなたの方を城に迎え入れるため、出国禁止命令を出す」とこの決定した！

「え？！？」

シロヤは驚きの声を上げた。

「やばいな・・・女王は本気みたいだな・・・見ろ。」

ランブウが一つの方角を指差した。その先にいたのは、銀色の鎧を見にまどった兵士の集団が歩いていた。

「まさか兵团を出してくるとは思わなかつたぜ・・・おそらくあれを率いているのは・・・。」

ランブウがさらに指差すと、そこにいたのは、立派な銀色の鎧に身を包んだ男が先頭になつて兵团を率いていた。しかし、その男は体に包帯を巻いていて、苦痛の表情を浮かべていた。

「バ！バルーシさん！？」

先頭のバルーシは、明らかに怪我が完治していないようだ。動く度に鎧が傷口を開かせ、その度にバルーシは苦痛の表情をさらに強く

めていた。

「シロヤ、今すぐここから逃げる。丸一日でも逃げ切ればなんとかなる。」

ランブウはテレビを消して、バルーシら兵团がいる方向とは違う方向を指差した。

「このまま閑所の壁を頼りに走つていけ。この先は街からは見えないようになっている。」

シロヤはすぐさまクロトに乗り、ランブウが指差していた方角に向かつて走り出そうとした。

「ランブウさん！ ランブウさんはどうするんですか！？」

シロヤは立ち止まってランブウに声をかけるが、ランブウはその場を動かさずに手だけを動かした。どうやら“早く行け！”と言つているようだ。

「ランブウさん・・・ありがとうございます。」

シロヤは小さく会釈すると、ランブウが指差していた方角に向かつて走り出した。

「ランブウさん、もういいですか？」

草影から、数人の男が顔を出した。男達はそれぞれ違った形の銃を持っていた。

「ああ、さて・・・少し荒くなりそうだな。」

そう言つて、ランブウは背中に隠していた散弾銃を構えた。それと同じように、男達も持っていた銃を構えた。

「言つておくが殺すなよ。相手は同じ国の人間、言つなれば家族みたいなものだからな。」

そう言つと、男達が一斉に銃を構えた。

「つ！ 皆伏せろ！」

銃を向けた方向にいるバルーシが叫んだ。しかし、ランブウの叫びの方が一瞬早かった。

「撃てえええ！」

一斉に銃弾が放たれ、兵士達の鎧にぶつかり光となつた。

「くう！閃光衝撃弾か！」

閃光衝撃弾は、強い光と衝撃を放ち、被弾した敵を氣絶させる弾である。

「第一射用意！撃てえええ！」

さらに放たれた閃光衝撃弾により、兵团達は次々と倒れていった。

後ろから聞こえる銃声。しかしシロヤは振り返らずに走り続けた。振り向けばランブウの思いを無駄にする。そう思い、シロヤは振り返りたい気持ちを必死に押さえ込んだ。

「ランブウさん・・・無事でいてください。」

走り続けるシロヤは、やがて大きな岩の前にたどり着いた。

ヒュン！

「一。」

岩の前に着いた瞬間、横から謎の衝撃がシロヤの前を走り抜けた。

「うわあー！」

思わずのけ反つてしまい、シロヤはクロトから落ちた。

起き上がつて岩を見てみると、並の三ヶ所が細くえぐれていた。

「何だ・・・これ？」

そう眩いた瞬間、さらに謎の衝撃が飛んできた。

「つー！」

しゃがんで衝撃を避けるが、衝撃はシロヤの後ろの並木にさしかかりながら飛んできてしまった。

「くつ！誰だ！」

謎の衝撃が飛んできた方向を見ると、馬に乗り槍を構えている少女が立っていた。

「ダメ！この国から出ちゃダメなの！」

少女は目に涙を浮かべながら叫んだ。

「ローエイエ様！？」

立っていた少女はローエイエだった。ドレスを着ていた普段のローエから一転、防具を身に付け、手にはローエイエの身長よりも長い槍が握られていた。

「お兄様！お兄様は・・・私達を助けてくれたんだよね！？私達を救つてくれたんだよね！？」

ローエイエは涙をこぼしながら叫んだ。

「・・・俺は・・・犯罪者・・・。」

「嘘！お兄様はレーグを倒してくれたんだよね！？」

ローエイエは槍を再び構え、目にも止まらぬ速さで槍で空を突いた。その瞬間、槍からシロヤめがけて衝撃波が放たれた。

「くつ！」

辛うじて避けるも、シロヤではついでいくのが精一杯で、反撃をする余裕すらなかった。

「ローアイエ様！俺はこの国の人間じゃないから……俺が！」

「そんなの聞きたくない！私は命を救ってくれたお兄様が大好きなの！」

「！」

シロヤの叫びが、ローアイエの涙の叫びによってかき消される。

「お兄様が……大好きなの！もつとお兄様と一緒にいたいの！お姉様も絶対同じだよ！」

「……。」

黙りこむシロヤに向かつてさらに叫ぶローアイエ。

「私もお姉様も……もつともつとお兄様とお話ししたりお食事したりしたいの！一緒にいたいの一間違いなんかでずっと会えないなんて嫌なの！お別れしたくないの！」

泣き叫ぶローアイエは、さらに槍での攻撃を早めた。

「つ！」

何とか避けようとするが、速い上にどんどんと加速していく槍の連撃。

「ぐわっ！」

ついに避けきれずに、シロヤは槍の衝撃波をまともに受けた。

「うう……。」

受けた部分が赤く染まる。岩のようにえぐれはしなかったものの、衝撃波でかなり深手を負つてしまつたようだ。

「お兄様！絶対に私達が幸せにするから！一緒に幸せになろうよ！」
さらに叫ぶローアイエだが、シロヤはそんなローアイエに顔色を変えなかつた。

「でも……俺はよそ……者だ……から……。」

その言葉を聞いて、ローアイエはさらに涙を流した。

「いやあ！嫌だよお！お兄様！つわあああん！」

さらなる槍の衝撃波が放たれた。

キィイイン！

「つ！」

「何！？」

突如、槍の衝撃波が何者かによつて力を失つた。

「シロヤ君！無事！？」

茂みの奥から声が聞こえた。声と共に出てきたのは、ドレスに身を包み、手に短剣を構えた女性だつた。

「ブルーパ様！」

「シロヤ君！無事みたいね、うつ！」

駆け寄ってきたブルーパが、突然うずくまつた。見ると、両足の包帯がみるみるうちに赤く染まつていつてゐる。

「ブルーパ様・・・怪我、完治してないんじや！？」

「今はそんなこと・・・心配してゐ暇じやないわ！」

ブルーパは、ローライドの方を向き直し、短剣をさらに構えた。

「シロヤ君、ここは私に任せて早く行つて！」

「そんな！怪我をしているブルーパ様を置いてくなんて！」

シロヤの言葉を聞いたブルーパは、シロヤに向かつて満面の笑みを浮かべた。

「いいのよ。シロヤ君のためだもの、この程度の傷で止まつたりしないわ。」

そう言つて、ブルーパはシロヤの背中を強めに叩いた。

「さあ！行きなさい！」

シロヤは口から出そつた言葉を飲み込み、無言のままクロトに乗つて走り出した。

「シロヤ君・・・頑張つてね。」

小さくなつていくシロヤの背中に、ブルーパはワインクをした。

「お姉様！何でお兄様を逃がしちゃうの！？」

納得のいかないローライドは、ブルーパに槍を向けた。

「ローエ！シロヤ君は私達のために國を出るつて言つてるのよ。」

「そんなの嫌だよ！お姉様だつてお別れしたくないでしょ！」「..」

ブルーパは少し黙つた。確かにブルーパも、シロヤがこの国に留まつていくれるのは嬉しいことだ。

しかし、シアンがやつてていることが正しいとは思つていなかつた。
「確かに私も・・・シロヤ君ともつと一緒にいたいわ・・・。」

「だったら何で!? 何で逃がしちゃうの! ?」

言われたと同時に、ブルーパは短剣を持ち直した。

「わかってるわよ・・・でもね! 一番辛いのは・・・辛い思いをしているのはシロヤ君なのよ! 私達のために国を出ていくつて決断したシロヤ君が・・・一番辛い思いをしているのよ!」

思いを叫んだブルーパは、いつの間にか涙を流していた。

「いやあ! お兄様ともつと一緒にいたいの!」

ローエイエがブルーパに向かつて槍の衝撃波を放ち、ブルーパがローエイエに向かつて短剣を投げた。

ただひたすらに走った。ランプもブルーパも、自分のために戦つてくれている。思いを無駄にしないためにも、ただひたすらに走り続けた。

やがて、シロヤとクロトは砂浜に出た。

「あれ？ この海って……。」

シロヤはこの海に見覚えがあった。この海は、星夜祭でシャンと二人で花火を見た灯台がある海だ。この海は、シロヤ達が最初にいた関所とちょうど反対側にある所だった。

「このまま行けば……未開拓地帯か……。」

シロヤ達は灯台と森を目印に、再び走り出した。

「……？」

しばらく走っていると、シロヤはある異変に気づいた。

「クロト……？」

森を抜けた辺りから、クロトの走り方がぎこちなくなっていた。変に思つたシロヤは、クロトから降りて足を見た。

「！」

クロトの足は、かなりの量の出血をしていた。シロヤ達が通ってきた道は、道とはまだ呼べないぐらいに荒れていた。木の枝や草を搔き分けしていくうちに、クロトの足はかなり傷ついていたのだろう。

「クロト……無茶しそぎだぞ。」

シロヤの言葉を聞いたクロトは、鳴きながら足踏みをした。おそらく”まだ走れる！”と言つてゐるのだろう。

「クロト……ごめんな。」

シロヤはクロトに跨がり、再び走り出した。

ヒュン！

「！」

突如、シロヤの耳に空を切る音が響いた。その瞬間、シロヤの視界が揺れた。

「うわあああ！」

視界はどんどんと傾き、シロヤは砂浜に倒れこんだ。

「いてて……。」

ゆっくりと立ち上がるシロヤだが、体に新しい傷はついていなかつた。シロヤはただ、地面に倒れこんだだけのようだ。

「クロト、大丈夫か？」

シロヤはクロトの方を向いた。その瞬間、信じられない光景がシロヤの目に映った。

「クロト……！」

シロヤはクロトに駆け寄った。クロトは砂浜に倒れていて、その足からはおびただしい量の血が溢れていって、砂浜を赤く染めていた。

「何だよこれ……どうなってるんだ？」

さらに酷くなる出血。シロヤの目に映ったのは、クロトの足に刺さっている何かだった。

「これ……矢だ。」

クロトの足に刺さっていたのは、木で作られた矢だった。矢はクロトの足を貫通し、砂浜に刺さってクロトの動きを止めていた。

「何で……急に矢が？」

そう呟いた瞬間、さらに空を切る音がシロヤの耳に響いた。空を切る音は、すぐさま砂を裂く音に変わった。

「！」

見ると、シロヤの前にさらに矢が突き刺さっていた。まだ矢を放つている人物が近くにいる。

シロヤはすぐさま剣を構えた。

矢が飛んできたと思われる方向、砂丘の向こうから、ゆっくりと何かが近づいてきた。

「…………えつ？」

シロヤは目を疑った。砂丘の向こうから現れた人物は、シロヤに
とつては予想を遥かに越えた人物だった。

「見つけたぞ……。」

シロヤは、口元を震わせながら現れた人物の名を呼んだ。
「シアン……様……。」

砂丘に立っていた人物は、まぎれもなくシアンだった。ドレスに
身を包んではいるが、手には長弓が握られている。その長弓は、使
い方次第では強力な武器になり得る代物だった。そしてシアンは、
その使い方を完全に熟知していた。

シアンを見て、体が固まってしまったシロヤ。

それに向かつて、シアンは三本の矢を手に持つて弓を引いた。
「！」

避けようとした瞬間、シアンの手から三本の矢が放たれた。し
かし、三本の矢はシロヤの体を越え、その先の地面に刺さった。
狙いを外したのかと思ったシロヤだったが、すぐさまそれが何な
のかわかった。

「くっ……体が……。」

シロヤの体は、シロヤの意思では動かなくなっていた。

「……。」

シロヤの体が動かなくなつたのを見て、シアンは弓を下ろしてゆ
つくりと近づいてきた。

「……。」

シロヤは目を疑った。近づいてきたシアンの目は、初めて会つた
時の凜とした目ではなかつた。色の無くなつた無機質な目に、シロ
ヤは恐怖を募らせていつた。

「ああ……愛しいお方よ……。」

無機質な目をしたシアンは、いつの間にかシロヤの一歩前まで來
ていた。ゆっくりとシロヤの顔に触れるシアン。

「そなたが……愛しい……。」

いつの間にか、シアンは目から涙を流していた。無機質な目から

流れる涙は、ゆっくりと頬を伝つて砂浜に落ちていく。

「シアン様……。」

「う……うう……。」

抑えられずに涙を流し続けるシアン。そして、シアンは矢を一本握った。

「痛くはしない……全てを私に委ねてくれ……。」

「えっ……？」

シアンは矢を構え、シロヤに突き立てようと振りかぶった。

「シアン……様？」

「そなたを愛しているぞ……。」

そして、シアンは矢を振り下ろした。

強く目を閉じるシロヤ。痛みに耐えようと必死に体を力ませるが、痛みはやつてこなかつた。

「・・・？」

ゆづくら目を開けてみると、シアンの矢は自分の腹部に届く直前で止まつていた。そして矢を止めているのは、砂だった。

「シロヤ様！大丈夫ですか！？」

支えていた砂が落ちたと同時に、矢も一緒に地面に落ちた。いつの間にか、シアンもシロヤから距離をおいていた。そしてその間に、緑髪の男が立つていた。

「シロヤ様、ご無事で何よりです。」

緑髪の男はすぐさまシロヤの後ろに回り込み、地面に刺さつていた矢を破壊する。同時に、シロヤの体が動きを取り戻した。

「シロヤ様、遅れて申し訳ありません・・・。」

すまなそうに言葉を低くする緑髪の男に、シロヤはすぐさま言葉を返した。

「こちらこそ、助けていただきありがとうございます。リーグンさん。」

そして、シロヤは緑髪の男 リーグンの横に立つた。

「リーグン・・・裏切り者の息子が何の用だ？」

シアンは今にも矢を引かんとしている。リーグンは表情を変えようとして、シアンを一心に見つめていた。

「・・・シロヤ様、ここは私が引き受けます。」

「リーグン様？」

リーグンは杖をクロトに向けて振つた。その瞬間、クロトの足の矢が抜け、傷がどんどんと閉じていき、出血が完全に止まつた。

「さあ、早く！」

さりに杖を降ると、シロヤの体が宙に浮いた。

「うわわわ！」

そのままシロヤは、立ち上がったクロトの背中に乗せられた。

「待つてくださいリーグン様！」

「シロヤ様・・・私達の心配は無用です。シロヤ様の背中は任せてくれださい。」

しかし、シロヤは納得がいかないといった表情を浮かべていた。

「何で・・・何で皆・・・俺のために戦うんですか・・・？」

溜まっていた疑問を投げ掛けるシロヤ。それに対し、リーグンは振り向いて笑顔を向けた。

「そんなこと・・・単純なことですよ。」

笑顔のまま、リーグンは疑問への答えをシロヤに語った。

「皆、シロヤ様のことが好きなんですよ。」

さりにリーグンは続けた。

「私はわかるんです。皆、シロヤ様と一緒にいる内に好意が芽生えてきたんですよ。」

シアン様はあなたの強さに、

ブルーパ様はあなたの純真さに、

ローライ工様はあなたの包容力に、

バルーシさんはあなたの立ち向かう心に、

レジオンさんはあなたの誠実さに、

ランブウさんはあなたの優しさに、

クピンさんはあなたの諦めない心に、

フカミさんとキリミドさんはあなたの勇敢な心に、

そして私も、あなたの立ち向かう心に、それぞれ好意を抱いているんですよ。」

固まるシロヤ。

「私達がシロヤ様を守るのは、私達の単なる自己満足でもあるんで

す。私達はシロヤ様が好きだからこそ、シロヤ様の選んだ選択を無理矢理変えるようなことはしません。」

リーグンの杖を握る手が強くなる。

「だから・・・私達を信頼してください！」

話を聞いたシロヤは、うつすらと涙を目に溜めていた。

「リーグン様・・・ありがとうございます！」

シロヤは涙を隠すように叫んだのち、未開拓地帯に向かつて走り出した。

小さくなつていくシロヤを、リーグンは森に入つていここまで見つめていた。

「余計なことをしようって・・・！」

怒りを露にするシアン。それを見て、リーグンはさらに杖を握る力を強めた。

リーグンは直感で、シアンは自分よりも実力が上であると分かった。

しかし、リーグンは逃げるよつなことは一切しない。シロヤの背中を守るために。

「リーグン、本気で貴様を潰しにかかる。命の保証はしないぞ。」
矢を出し、弓を構える。ただそれだけの動きが、リーグンの緊張をさらに高めさせた。額から汗を流すリーグンだが、杖を握る手を一切弛めなかつた。

「シアン様が本気なら、私も本気を出すだけです！」

すかさず杖を振るい、砂を槍に変えてシアンに向けて放つた。

「単調だな・・・」

すかさずシアンは矢を放つた。シアンの放った矢が砂の槍を貫き、すぐさま形を失つて地面に落ちた。

「ならば次はこちらからだ・・・」

シアンはすぐさま矢を五本持ち、不規則に放つた。

不規則に放たれた矢は、不規則な動きでリーグンに向かつていく。

「つ！」

不規則な軌道を予測できず、一本の矢がリーグンに突き刺さった。

「くう！」

腕に刺さった矢に一瞬気がいつてしまい、さらに襲つてくる四本の矢に気が回らなかつた。

反応できずに動きが止まるリーグンに、四本の矢は容赦なく貫こうと向かってきた。

そして・・・。

「ぐわあああ！！！」

リーグンの体を、合計五本の矢が刺し貫いた。

おびただしい量の血を出しながら倒れるリーグン。

「勝負あつたな・・・リーグン。」

シアンはゆっくりと歩み寄り、倒れているリーグンの体に向けて矢を向けた。

滝壺

「・・・。」「後ろを振り向かないように、必死に前だけを見つめてシロヤとクロトは走った。

戻りたいのならば今すぐ戻って、ランブウやブルーパ、リーグンを助けに行きたい気持ちで一杯だつた。しかし、シロヤはリーグンの言葉を信じ、走り続けた。

「リーグン様が信じてるんだ・・・俺も・・・皆を信じないと・・・」

ただひたすらに一人と一頭は、未開拓地帯を走り続けた。

「・・・！」

シロヤの耳に、森とは違う音が響いた。草や枝を踏んだ時に生じる音とは違う、森とはかけ離れた男だった。

「何だ・・・？」

いつの間にか、足元の草や枝が無くなり、荒れ果てた土が現れた。徐々に枝も無くなつていき、視界が開けてきた。その先で、クロトは急停止した。

シロヤとクロトは、開けた場の前に広がる景色を見た。

「これって・・・滝？」

シロヤ達の前には、巨大な滝が広がっていた。滝は思つたよりも高く深く、その道の先は崖となつていた。崖から滝壺を見てみると、滝壺までの距離は想像以上のものだつた。

「道なんて無いだろ・・・。」

シロヤは周りを見渡してみた。すると、崖の一つが道みたいになつていたのに気づいた。しかし、それは途中で途切れていった。

「危険だな・・・他を探そう。」

クロトに引き返すよつに促し、崖に背を向けた。

「・・・・・！」

急に、シロヤは森の奥から人の気配を感じた。しかもそれは、一人ではなく複数人の気配だった。

ゆっくりと隠れながら気配の出所を探すと、森の奥にいたのは、鎧に身を包んだ集団だった。そしてその先頭には、関所でも見た銀色の鎧を纏った戦士がいた。

「バ・・・・！バルーシさん・・・！」

関所でランブウと戦っていると思っていたバルーシ率いる兵団が、未開拓地帯に足を踏み入れていた。

「ランブウさん・・・まさか・・・。」

そこでシロヤは思考を止めた。負の方向に考えてしまつてはキリがないと思い、すぐさま頭を切り替えた。

「まずい・・・この先は行き止まりなのに・・・。」

シロヤは滝を見た。道らしい道はなく、あるとすれば途中で途切れている道だが、万が一滝壺に落ちれば命はないだろう。

「！」

考えているシロヤの背中に、クロトは頭をつけた。何かを言いたげのようだが、シロヤがクロトの方を向いた瞬間、クロトは黙りこんだ。

「・・・クロト？」

クロトはシロヤの服を引っ張り、無理矢理自分の背中に乗せる。その瞬間、クロトは助走をつけて走り出した。

「おい・・・まさか・・・！クロト！」

シロヤは叫んで引き返させようとするが、クロトは無視して走り続けた。その先にあつたのは、途中で途切れている道だった。

「クロト！あの道は不安定だ！万が一崩れたりしたら！」

途切れている分の距離は、全速力で助走をつけて飛ぶぐらいの距離とほぼ同じくらい。つまり、一瞬でも気を抜けば落ちてしまいかねなかつた。

「クロト！まだ道があるはずだ！だから！」

シロヤの叫びを無視して、クロトは高く跳躍した。

クロトの助走は十分であつたため、道を飛び越えることができた。

「クロト！」

そのまま着地して走り出でた足を前に出す。
しかし……。

ガラッ！

「！！！」

急に足元が揺れた。

着地の衝撃で、向こう側の着地位置の道が崩れたのだ。

「うわああ！」

バランスを失い、滝壺に向かつて落ちていくシロヤとクロト。しかし、クロトは背中のシロヤを空中で振り飛ばした。

「ク！クロト！何を！」

クロトはすぐさま体制を変えて、空中のシロヤを後ろ足で蹴り上げた。

「ぐわあ！」

蹴りの衝撃で上に飛ぶシロヤ。それを、道の向こうから現れた手が掴んだ。

「シロヤ！」

手はしつかりとシロヤを掴んでいたが、掴まれているシロヤは、滝壺に向かつて悲痛の叫びを上げていた。

「クロトオ！クロトオ！クロトオオオ！」

「落ち着けシロヤ！今お前まで落ちたら！」

「うるせえ！クロトオオオ！クロトオオオオオ！……」

悲痛な叫びは滝の向こうの森にまで響いた。

「シロヤ様！」

「向こうから声がしました！」

森の奥にいた兵团が滝を手指して走り出した。

「ちつ！このままじやマズイ！」

もはや正氣を保つていなシロヤを背負い、男 レジオンは森に向けて走り出した。

レジオンは、ただひたすらに森を走った。背負つたシロヤは、もはや何も喋らずに固まっていた。

星夜祭での傷が開き、新たに足や手に傷を負いながらも、レジオンはひたすら走り続けた。

やがてレジオンは、森の奥にひつそりと佇む小屋の前についた。誰もいないことを確認して、レジオンはゆっくりと小屋の扉を開けた。

「！」

扉を開けた先にいた少女が、体を硬直させた。それを見たレジオンは、少女に軽く微笑んだ。

「俺だよ俺！ レジオンだよ！」

「あ！ レジオン様！ 申し訳ありません！」

そう言って、少女 クピンはレジオンに深く頭を下げる。

小屋

レジオンは、小屋の扉をゆっくりと閉じた。

小屋の中はそれほど広くはないが、必要最低限の生活をするには充分な物が一通り揃っていた。しかし、長く使ってないのだろうか、大半の物が埃を被っていた。

レジオンは、背負っていたシロヤをベッドに横たわらせた。しかし、シロヤは何かを発することもなく、何も映らない瞳のままで動きを止めていた。

シロヤを見つめる一人。

「一体・・・何があつたんですか？」

シロヤを見つめながらクピンが訪ねた。

「・・・」

少し黙ったのち、レジオンは口を開いた。

「クロトが・・・滝壺に落ちてしまったんだ・・・。」

「！」

クピンは絶句した。

「そんな・・・シロヤ様とクロト様は兄弟同然の存在なのに・・・」

シロヤはまだ脱け殻のように横たわっている。それを見ながら、レジオンは唇を噛み締めた。

「もう少し・・・俺がもう少し早く来ていれば・・・。」

クロトも一緒に助けられたかもしれない。その言葉を発する前に、レジオンは強く握った拳を地面に叩きつけた。

「くつ・・・俺がもう少し・・・。」

自分を攻め続けるレジオン。その横では、クピンがシロヤとレジオンをずっと見つめていた。

「・・・シロヤ様・・・。」

名前を呼んでも、ベッドの上のシロヤは反応しなかつた。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•○

• 9

大分時間が経つ
たゞらつか。

۱۱

「まだ田を覚まさないか・・・。」

今だ目を覚まさないシロヤの額に、そつと手を置くペン。

「ああ……どうにかしないと……時期に見つかっちゃう……。

この小屋は、滝からかなり離れた所にある。しかし、いつかは兵团がここまでやつてこないとは限らない。

「いざとなれば・・・戦うしかないか・・・」
レジオンは大剣を構えた。

7

突如、レジオンが動いた。体制を低くし、今にも大剣を振り下ろさんとばかりに構えた。

「クピンー・隠れろー！」

ケビンはすぐわざと、小屋の奥に身を隠した。

ら、相手が現れるのを待つた。

扉が開き、人が入ってきた。それを見た瞬間、レジオンは戦闘体制を解いた。

入ってきた人物は、杖を持つた緑髪の男だった。

「リーグン・・・。」

リーグンはゆっくりと小屋に入り、ゆっくりと扉を閉じた。
そして・・・。

「・・・・・・・・・。」

「リーグン！」

リーグンは、レジオンの前で前のめりに倒れた。

レジオンがリーグンに駆け寄ると、小屋の床が赤く染まっていた。

「リーグン様！」

すぐさまクピンが飛び出し、リーグンをもつ一つのベッドに寝かせた。

クピンはすぐさまリーグンの服を脱がして、薬を取り出した。

「・・・・・！」

リーグンの体に刻まれていた傷。数は少ないものの、その一つ一つが深く、そこからさらに血が流れている。

「リーグン・・・まさかシアンと戦つたな？」

リーグンの傷口を見たレジオンが、驚いたように言った。

リーグンの傷口が弓矢によるものだというのを、レジオンは瞬時に理解した。しかし、リーグンにここまで深い傷を与える『矢使い』は、シアンしかいない。

「シアンと戦うなんて無茶しすぎだ・・・俺でもえ勝てないかもしれないのに・・・。」

シアンの強さは、バルーシやブルーパはおろか、レジオンやランブウですらも凌駕する。それを知つていながら、リーグンはシアンと戦つたのだ。シロヤを守るために・・・。

「うう・・・。」

小さく声を上げるリーグン。クピンはリーグンに応急処置をしていた。

「シアン・・・本気でヤバイみたいだな・・・。」

応急処置を終え、リーグンは眠りについた。

「もうちょっと遅ければ・・・輸血が必要でした。」

「ギリギリセーフってところか。」

リーグンとシロヤを見つめる一人。

「シアン様・・・私達を殺すおつもりなのでしょうか・・・。」

心配そうに呟くクピン。

「・・・心配するな。信じるんだよ、仲間を・・・シロヤもな・・・。」

「その言葉に、クピンは安心した顔を浮かべた。そして、レジオンも少し微笑んだ。」

「――」

レジオンの表情が一変する。すぐさま大剣を手にしそうとする。

「!？」

小屋の中にいた二人は、今起きた現象を理解するのに時間がかかりた。

ただ単に窓ガラスが割れた、それだけの現象だが、レジオンは隙を作った。

ヒュン!

「うあっ!」

レジオンが腕を押さえてしまがみこんだ。見ると、レジオンの腕には矢が刺さっていた。

「ぐつ・・・速すぎだぜ・・・。」

レジオンは苦痛の表情を浮かべながら立ち上がり、大剣を手にし

て戦闘体制をとつた。

クピングは怯えながら、小屋の外に田をやつた。そこにいたのは、レジオンに向けて「矢を構えるシアンの姿があつた。

「シアン・・・様・・・。」

シアンの凄みに怯え、腰を抜かして座り込むクピング。その前に、レジオンが立ち塞がつた。

「レジオン・・・貴様・・・邪魔をする気か!」

シアンはすぐさま矢を構えた。

「シアン様!」

突如、シアンの横から声がした。

見ると、シアンを固めるように兵团の兵達、そしてバルーシが現れた。

「シアン様! これ以上城の者達を傷つけてはいけません!」

バルーシがシアンに指摘すると、シアンは構えていた弓矢をバル

ーシに向けた。

「貴様・・・私に指示するのか?」

シアンは今にも矢を放たんとしている。額に汗を浮かべながらも、バルーシはその場を動かなかつた。

「これ以上傷つけでは、今後の国事に支障を來す可能性があります。

」

その場に緊張が走る。

「ただでさえ國士を一人も失い、暗殺事件の事後処理などもこなさなければならぬ今、レジオンさんやクピングさんを失つては国事が滞ってしまいます。」

何とか説得しようとしているバルーシ。

しかし、レジオンが反応したのは言葉の中にはつたある一文だつ

た。

「おいバルーシ、國士を一人失つたってどういうことだ！」
レジオンが大剣を振り上げて構えるが、バルーシはレジオンを無視するかのように視線を外した。

「シロヤ様の方は我々兵团にお任せください。必ずや城にお戻します。」

シアンに向かつて敬礼するバルーシ。

それを見て、シアンはゆっくりと弓矢を下ろした。

「うむ・・・ならば任せよう・・・。」

バルーシから視線を外し、レジオンの方に視線を向けた。

「あのお方はどこだ！」

シアンはレジオンの言葉を聞く前に、割れた窓から小屋に入った。

「・・・！・！・！」

シロヤを探すシアンは、ベッドに視線を向けた瞬間に固まった。

「あ・・・ああ・・・。」

シアンの目に映ったのは、自分を助けてくれた時の面影を一切無くしたシロヤの姿だった。

「ああ・・・シロヤ・・・シロヤ・・・！」

名前を呼びながらシロヤに寄る。動きが次第におぼつかなくなり、最後は倒れるようにシロヤに寄り添つた。

「うう・・・！うう・・・！」

寄り添つて号泣するシアン。誰の声も届かずにただ泣き続ける。しかし、そんな泣き声もシロヤには届かなかつた。

「バルーシ・・・わつきの話を聞かせてもらおうかー失つた國士は誰なんだ！」

レジオンがバルーシにつかみかかる。苦い顔をしながら、バルーシは重い口を開いた。

「ランブウさんと・・・ブルーパ様です・・・。」

「何だと！？」

今にも殴りかかると詰め寄るレジオンに、バルーシはさうに表情を暗くした。

「ランブウさんは私達兵团との戦いで軽症で済みましたが、国事をするのには無理があります……」

そしてバルーシは、表情をまたもや暗くした。

「ブルーパ様は……ローアイ工様との戦いで……」

そこまで言つて、バルーシは口を閉ざした。

「ブルーパがローアイ工と戦つてなんだってんだ！ 言え！」

バルーシを睨み付け、つかみかかつていた手の力を強めた。しかしバルーシは、口を開かず口を開ざし続けた。

「バルーシ……てめえ……！」

殴りかかるうとしたバルーシの手を、バルーシはしっかりと掴んだ。

「もう……いいでしよう！」

レジオンを振り払い、兵团に向かつて右手を上げた。

「この小屋にいる人間全てを城に連れていくてください！」

「はっ！」

兵達がバルーシに向かつて敬礼すると、一斉に小屋へと入つていく。

「やめてください！ 離してください！」

兵がクピンを抱えて城に向かつていぐのに続き、リーグン、シャーン、シロヤを抱えた兵も城に向かつていった。

「おいバルーシ！」

またもや掴みかかるうとするレジオンをバルーシが制した。

「わかつていますよ……これが正しい道ではないことを……」

震えながらバルーシは叫んだ。目には涙をうつすらと浮かべていた。

「俺は兵团長……女王に忠義を誓つた者なんです……」

右手を上げたまま、腰にかけてた剣を抜き、高く振り上げた。

「だから……！ 女王の意思に反する考え方を持つてはいけないので

す・・・！」

力タカタと震えながら、バルーシはさらに言葉を続けた。

「だから・・・・・シアン様のやっていることが正しい道ではないと思つた時点で・・・・忠義に反しています！」

「おいバルーシ・・・・・。」

レジオンがバルーシを見て固まる。今からバルーシが何をしようとしているのか、全くわからなかつた。

「忠義に反するのは騎士、兵団長としての恥・・・ならば！」

バルーシは剣を持っていた左手に力を込めた。

そして・・・・。

「！・！・！」

「ぼとつ！」

「つうう！・！・！」

一瞬の静寂が二人を包む。

静寂の中で二人の間にあつたのは、おびただしい量の血と、バルーシの右腕だつた。

「バ！バカかお前は！！！」

レジオンはすぐさまバルーシに駆け寄る。右腕があつた部分からどんどんと血が流れていき、土を真っ赤に染め、血の臭いを強烈に放っている。

「忠義を守れぬ腕など・・・不要・・・ぶ・・・つ・・・。」

そう呴き、バルーシは目を閉じた。

「畜生！・・・」

レジオンはバルーシの腕を縛り、切り落とした右手を広い、さらにバルーシを背負つて走り出した。

「くそ！一体・・・何が起にひつて言うんだ！・・・」

身の回りで色々なことが起きすぎていて、レジオンは混乱していた。しかし、そんなレジオンの言葉を、森が嘲笑うかのようにかき消した。どこにも響かないレジオンの叫びは、ただむなしくレジオンの周りに響くだけだった。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

「失礼します・・・」

一つの部屋に入る。その部屋の先にいたのは、動かずに何かを呴いているだけの存在となつたシロヤだった。

そんなシロヤに、クピンは持つっていたトレイの上の食事を置きながら、ゆっくりと話しかけた。

「シロヤ様・・・朝食の用意ができました。」

しかし、シロヤは動かない。それを見て、クピンは寂しそうな表情を浮かべた。

「・・・お体に障りますので、せめて果物の一つは召し上がってください・・・トレイはまた後程、取りに伺います・・・」

クピンはゆっくりと部屋から出ていき、扉を閉める前にシロヤに向かつて頭を下げる。

「・・・失礼します。」

「・・・どうだ?」

シロヤの部屋の前にいたレジオンの間に、クピンは無言で首を振つた。

「・・・そうか。」

暗い表情をするレジオン。二人の間に重い空気が流れた。

「・・・シアン様も以前、部屋から出でいません・・・もちろん食事も・・・。」

あの小屋での一件から、ちょうど一日が経つた。

シロヤは以前変わらずに、まるで人形のように動かない。

そんなシロヤを見たシアンも、あれから部屋に出てこない。

「シロヤをあんなにしたのが自分のせいだ・・・っていう罪の意識から塞ぎこんじまつたのか・・・。」

レジオンは歩きだした。その後ろをクピンがついていく。

向かつたのは医務室だった。医務室の中は、たくさんの医者や僧侶が忙しそうに走り回っていた。

そんな医務室の奥の一いつのベッドに、特に人がごった返していた。

「大丈夫なんでしょうか・・・。」

クピンが心配そうに一いつのベッドに横たわっている一人、リーグンとランブウを見た。

ランブウは剣での切り傷が身体中に刻まれていて、僧侶が治癒魔法で小さな傷口を治していた。

一方リーグンは、矢で貫かれた傷を医者が必死に処置していた。

「ああ、あいつらの腕を信じよつぜ。」

そう言つて、レジオンは医務室のさうに奥に向かつて歩きだした。

「それより心配なのは・・・。」

レジオンとクピンは、目の前の大きな扉を開けた。

「ローエ工様・・・？」

大きな扉の先の部屋はガラス張りで、さらに向こう側の部屋が見えるようになつていた。

「・・・ずつと・・・ローエ工はある状態か・・・。」

ローエ工は、向こう側が見えるガラスをずっと見つめていた。

「「めんなさい」・・・お姉様・・・「めんなさい」・・・「めんなさい」・・・。」

向こう側を見ながら、ローエ工はずつと呟いていた。

「どうだ・・・？」

レジオンは近くにいた医者に話しかけた。

「・・・輸血は間に合いましたが・・・お一人とも、特にブルーパ様は非常に危険な状態です。」

医者は無表情のまま答えた。

この部屋は集中治療室。特に腕のある医者と僧侶のみが治療を行う場所であり、危険な状態の患者が集まる場所だ。

今集中治療を受けているのは、バルーシとブルーパだ。

バルーシは自らの右腕を自分で切り落としたことによる大量出血と、傷口からの感染症の治療。そして、切断された右腕の結合手術が行われていた。

ブルーパは、ローエ工との戦いによつて受けた傷の治療が行われていた。しかしその傷は想像以上に深く、箇所が多くつた。「ローエ工様も・・・罪の意識でしょつか・・・？」

「・・・かもな。」

またもや二人の間に流れる重い空氣。その空氣を引きずつたまま、二人は集中治療室を後にした。

レジオンとクピンは、長い城の廊下を歩いていた。

「今・・・シロヤ様やシアン様の看病ができるのは・・・私とレジオン様だけになりましたね・・・。」

「ああ・・・。」

二人はまだ重い空気を背負っていた。

そして一人が着いたのは、シアンの部屋の前だった。シアンの部屋の前には、クピンが置いた朝食があった。

「やっぱり・・・目を覚まさないのか・・・。」

レジオンが呟くと、クピンは食堂に向かつて走り出した。

「私、替えをお持ちしてきます！」

小さくなるクピンの背中を見ながら、レジオンは捨てる予定のシアンの朝食のサンドイッチに手を伸ばした。

「・・・固いな。」

レジオンとクピンが看病を続けて、さらに一日が経った。依然、シロヤもシャンも食事を口にせず、一日前に比べて痩せかけていた。

「・・・シロヤ様、今日の昼食です。」

クピンは一日間、欠かさず三食をシロヤに届けていた。毎回来ても無くなつていらない食事を下げ、新しい食事を持つてくれるのをずっと続けていた。

「シロヤ様、お体に障ります。少しでもいいので召し上がってください。」

しかし、シロヤはその場を動かさずに、ただずつと咳いていた。

「わからんねえ・・・わからんねえよ・・・。」

シロヤはただ、同じことをずっと咳き続けていた。

そんなシロヤを見ながら、クピンは涙をこらえて部屋を後にした。

「・・・失礼しました。」

クピンは悲しそうな顔をしながら、シロヤの部屋を離れていった。

集中治療室の前で、レジオンは手を組んで座り込んでいた。

「・・・。」

バルーシとブルーパが運ばれてきてから丸一日が経った。手術自体は終わったものの、まだ医者と僧侶が側についていなければ危険な状態だった。

「・・・。」

レジオンは、集中治療室からの報をずっと待っていた。かれこれ五時間は待つたであるつか・・・。

その時・・・。

「・・・。」

集中治療室のドアが開き、中から数人の医者と僧侶が一斉に出てきた。

レジオンはすぐさま立ち上がった。

「バルーシとブルーパの容態は！？」掴みかかるように前に出るレジオンに向かつて、一人の医者が首を縦に振つた。

「・・・そうか！」

城に来てから初めての笑顔を浮かべ、レジオンはすぐさま集中治療室の中に向かつていった。

「バルーシ！ ブルーパ！」

ガラス張りの向こう側から叫ぶ。

バルーシの切り落とされた腕はしっかりと結合されていた。対してブルーパは、あらゆる箇所に包帯が巻かれていて、口には呼吸器がつけられていた。

その傍らには、ブルーパのベッドの側で泣き続けているローエンがいた。

「お姉様・・・『めんなさい・・・『めんなさい・・・』」

泣き続けながら、ローエンは昨日からずっと同じ言葉を呴き続けていた。

「・・・」

その光景を見て、レジオンは無言のまま集中治療室を後にした。

「レジオン様・・・どうでしたか？」

集中治療室前にいたクピンが心配そうな声で話しかけた。レジオンは無言のまま、ゆっくりと首を縦に振つた。

「・・・！」

クピンも同じように笑顔を浮かべたが、すぐさま表情を変えた。

「まだ・・・目覚めないんですね・・・」

クピンは、レジオンがなぜ無言だったのかが分かり、浮かべていた笑顔をすぐさま暗くした。

「気長に見てこようぜ・・・。」

それを聞いて、クピンは軽くつむぎで医務室を出よつと走り出した。

その瞬間……。

バタッ……。

「クピン！」

レジオンが叫ぶ。その先にいたのは、走り出した瞬間に前のめりに倒れたクピンの姿があつた。

すぐさまレジオンはクピンに駆け寄った。

「おいでうした！ クピン！」

激しく呼吸をするクピン。レジオンはクピンの額に手を置いた。

「熱つ！」

クピンの体は高熱を出していた。息を荒くしていて、手足を動かすのがやつとな程に弱っていた。

「ハア、ハア・・・・シロヤ様の・・・看病を・・・ハア、ハア。」

レジオンから離れ、フランフランになりながら医務室を出ようとするとが、足はまつすぐ前にいかず、壁に何回も激突しながら部屋を出た。

「おいクピン！ 無理するな！」

医務室を出ると、クピンは医務室の前で前のめりに倒れていた。

「ハア、ハア、シロヤ・・・様・・・！」

うわ言のように呟くクピンを抱えあげ、レジオンは医務室へと引き返した。

「・・・とりあえず落ち着いたか。」

クピンを医務室に寝かせたレジオン。レジオンらしい荒い応急処置だが、楽になつたのか、クピンの荒くなつていた呼吸は收まり、静かに寝息を立てていた。

「無理しすぎだぜ・・・。」

レジオンは近くにあつた椅子に腰掛けながら呟いた。

「これで・・・前線に出れるのは俺だけになっちまつたな・・・。クピンが倒れたため、看病や事後処理をすることができるのがレジオンだけになってしまった。

「やれやれ・・・。」

ため息混じりに呟くと、誰かが医務室に入ってきた。

「レジオンさん・・・。」

「ん？お前・・・。」

レジオンはやつて来た人物を見て、驚いたような表情を浮かべた。
「やはり・・・状況は芳しくないようですね・・・。」

「ていうか・・・何でお前歩いてるんだ？」

レジオンはやつて来た人物を不思議なものを見る目で見つめた。

「ああ、僕だつたら大丈夫ですよ。傷はもう塞がりました。」

そう言つて、やつて来た人物　　リーグンは腕を巻くつて見せ

た。まだ包帯は巻かれてはいたが、血は出でていない。

そして、リーグンは表情を引き締めて言つた。

「僕はお一人の看病をしますので、レジオンさんは事後処理をお願いします。」

「お前・・・本当に大丈夫なのか?」

レジオンは心配そうに聞いた。病み上がりのリーグンを前線に復帰させる事が、レジオンにとつては抵抗があった。

しかしリーグンは、そんなレジオンの心配の視線を気にしていいかのように笑った。

「僕なら大丈夫ですよ。国に関わることなんですから、これぐらいの無茶は当然です。」

リーグンはずっと笑顔だつた。

「それに・・・シロヤ様に気持ちよく田観めてもらつたためにも、国のいざこやは早めに解決しなければ、つづ・・・」

言葉の途中で、リーグンは腕を押されてうずくまつた。

「リーグン!」

レジオンが駆け寄ると、リーグンの着ていた服の袖が赤くなつていき、腕を伝つて指先から血が滴り落ちていた。

「だから無理するなつて!出血多量で死ぬぞ!」

すぐさま近くにあつた包帯に手をかけたが、リーグンは無言でその手を掴んだ。

「・・・リーグン・・・」

ただ無言でレジオンを見つめるリーグン。自分は大丈夫だということを無言で伝える。

「・・・死ぬような真似はするなよ。」

「・・・はい!」

二人は同時に立ち上がり、医務室を出ていった。

「とは言つたものの・・・。」

レジオンは作戦会議室にやつて来て、数人の兵士と学者を集めて頭を抱えていた。

国事を任せられたが、頭を使う仕事を得意としていないレジオンに
とつては、かなりの大仕事であった。

今レジオンが見ているのは、星夜祭後に調査兵团によつてまとめ
られたレーグ側の人間のリストだつた。

「しつかしまあ・・・意外と裏切り者が多いなあ・・・。」

リストに乗つていた人物は五十人を遥かに超えていた。その中には、砂の竜王時代から城に出入りしている学者や、一般市民と多種多様な人達の名前が書かれていた。

「とりあえず、暗殺にどれだけ関わっているのかを三段階評価で全員まとめよう。三の評価がつけば封印獄か処刑、一の場合は投獄、一の場合は軟禁処分だ。」

レジオンはその旨を伝え、学者と兵士に評価を一任した。その間にレジオンは、別の紙に目を通した。

今日を通しているのは、暗殺直前に書いたと思われる予算案だつた。おそらく、新たな王が即位した時に通そうとしたのだろう。

「・・・学ばないな。」

予想通り、軍事予算が例年の予算案に比べてはね上がつていた。

「・・・・・ん? 何だこれ。」

ふとレジオンは、一番下の項目に目を通した。そこには、例年にはなかつた新たな予算が組まれていた。

「・・・ “封印護衛” ?」

新たな項目の名前は、“封印護衛”と書かれていて、他の予算と比べて少し予算が多かつた。

「レーグ・・・一体何がしたいんだ・・・?」

そう思つたレジオンは、近くにいた学者に話しかけた。

「おい、レーグの評価は?」

「もちろん三です。おそらく処刑になるかと・・・。」

「いや、レーグは封印獄処分で頼む。」

「元七人衆の処分はいかがなさいますか?」

「判断に任せる。」

そう言つて、レジオンは予算案の紙を置き、違う紙に印を通した。

一方その頃、リーグンはシロヤとシアンの部屋の食事を厨房にもつて行く途中だった。

もちろん、二つの食事は一つも減つていなかつた。

「・・・シロヤ様、シアン様・・・。」

運びながら咳くリーグンは、悲しい表情を浮かべていた。

厨房に着くと、リーグンは悲しい表情のまま食事を置いた。

「あの・・・リーグン様？」

心配したのか、近くにいた料理長が話しかけてきた。

「やはり・・・お一人とも召し上がりませんでしたか・・・。」

「・・・はい・・・。」

しばらく一人の間に沈黙が走る。

「・・・あ、それとお願ひがあります。」

「はい・・・なんでしょうか?」

「メイドのクピンさんが過労で倒れていますので、何か元気になれるようなものを作つてあげてください。」

「クピンさんがですか!? 分かりました!」

すぐさま調理にかかる料理長達を後ろに、リーグンは厨房を後にした。

暗い表情のまま、シロヤの部屋に向かうリーグン。

「何か・・・いい方法はないのかな・・・。」

そう呟いて道を曲がつた。その時、リーグンの目の前に人が映り込んだ。

「リーグン様!」

ビックリしたような表情を浮かべる人物は、リーグンの名前を叫んだ瞬間に膝を崩した。

「何で・・・寝てないんですか! クピンさん!..」

立っていたのはクピンだつた。顔を熱で真つ赤にしながらも何と

か立とうと足に力を入れるが、熱で体力を奪われているクピンにとつては、体制を維持するのは困難なことだった。

「早く・・・シロヤ様の・・・部屋に・・・。」

「そんな！無理しすぎですよ！」

介抱しようと抱き抱えた瞬間、さらに奥から人の気配がした。

「クピンちゃん・・・無理はしないで・・・。」

奥からやって来た人物は、ふらふらになつたクピンの肩をゆっくりと持ち上げて、ゆっくりと医務室へと向かつていった。

集中治療室で、ローエはすつとブルーパの隣で泣き続けていた。

「ごめんなさい・・・お姉様・・・ごめんなさい・・・！」

ローエは、ブルーパが集中治療室に運ばれてからすつと、同じ言葉を咳きながら泣き続けていた。

誰の声も聞こえず、その場を動かない。

「バルーシ！ブルーパ！」

ガラス張りの向こうから声がしたが、ローエには全く聞こえない。そして、その言葉の後の扉を閉めた音も聞こえない。

集中治療室の中には、ローエの泣く声が響き続けていた。

「お姉様・・・ごめんなさい・・・！」

泣き続けるローエ。

スー・・・スー・・・スー・・・。

「お姉様！！！」

何も聞こえなかつたローエの耳に響いた音。弱々しいが、しつかりと聞こえる呼吸の音。

ブルーパの呼吸の音が、ローエの耳にはつきりと聞こえた。

「お姉様！お姉様！お姉様！」

何度も呼び掛けるローエ。弱々しかつた音が次第に強くなつていき、それはか細い声に変わつた。

「ロー・・・イエ・・・・。」

非常にか細く、弱々しい声。普段なら聞き逃してしまつような小さな声だが、はつきりと聞こえた。

「ローエ・・・・。」

「お姉様！！！」

何かを喋りかけるように強くなる声。

「ローアイエー、聞いて……。」

「お姉様!?」

ブルーパは、震える手をゆっくりと持ち上げて、ローアイエーの頭の上に乗せた。そして呼吸器をつけたまま、ブルーパはゆっくりと語り始めた。

「私……夢を見たの……。

「夢……?」

語り出したブルーパの目には、次第に涙が溜まり始めていた。

「うん……シロヤ君がいなくなる夢……。」

「お兄様が……?」

「うん……何も言わないでね……一人で国を出ていつちゃうの……。」

「そんな! 私そんなの……嫌だよ……。」

ローアイエーは再び泣き出した。

「私も……嫌……かな?」

「え……?」

「あんなこと言つてたけどね……私もやつぱりシロヤ君が好き……シロヤ君にずっといてほしい……。」

それは、ブルーパもローアイエーも、もちろんシャンやバルーシらも思つている皆の総意であった。

「だつて……私を命懸けで守つてくれたんだもの……惚れて当然よ……。」

星夜祭での戦いで、ブルーパに向かつってきた針の壁を、シロヤは満身創痍の状態で受け止めていた。

話を聞きながら泣き続けているローアイエーの頬を、ブルーパはそつと撫でた。

「ローアイエー、あなたの選択が正しいとも間違つても言わな
いわ……私もシロヤ君が留まつてくれたら嬉しいもの……。」

「お姉様……。」

「うん……だからね……ローアイエーが思つようになつて進んで……。」

「

ローアイエが何故泣き続けていたのか。

それは、ローアイエが自ら選択した道、"シロヤを城に連れ戻す"という道が正しかったのかがわからなかつたからだ。この道を選んだが故に、自分はブルーパを傷つけたのだという自責の念が、ローアイエを追い詰めていた。

「ローアイエが選んだ道なんだから・・・自信持つて・・・ね。」

「お姉様・・・お姉様・・・」

どんどんと溢れてくる涙を抑えきれずに、ブルーパの手を濡らしていった。

そんなブルーパの手を、ローアイエはぎゅっと握った。

「お姉様・・・私やつぱり・・・お兄様と一緒にいたい！」

「私もよ・・・ローアイエ・・・」

涙を流しながら、ブルーパは精一杯の笑顔を浮かべた。それに答えるように、ローアイエもぼろぼろと涙を流しながら笑つた。

「お姉様・・・私・・・お兄様が大好き！」

「私も大好き・・・だから・・・今はシロヤ君を気にかけてあげて・・・ね。」

ブルーパは最後に小さくウインクをして、再び目を瞑つた。

「う・・・うう・・・うわああああん！・・・」

ローアイエはブルーパの手を握りながら、ただひたすらに泣き続けていた。

「お姉様・・・」

ローアイエは立ち上がり、ブルーパの頬を軽く撫でた。これがローアイエなりの、ブルーパへの決意表明だつた。

まだ流れてしまうとする涙を抑え、ローアイエはゆっくりと集中治療室を後にした。

「・・・！」

集中治療室を出て一番最初に目に映つたのは、誰かがふらふらになりながら医務室を出ていく姿だつた。

「・・・クピン・・・ちゃん! ?」

医務室に運ばれて寝ていたクピンが、ベッドから降りて医務室を出てこいつとしていた。

「クピンちゃん! 無理しちゃ! ..」

ローラーの声を聞かず、クピンは医務室を出ていった。

「クピンちゃん! ..

慌ててローラーはクピンを追いかけた。

ちょうど曲がり角を曲がろうとした時、クピンは急に立ち止まつた。

「何で・・・寝てないんですか! クピンちゃん! ..」

見ると、同じく曲がり角を曲がろうとしたリーグンが立っていた。ローラーはすぐさまクピンに駆け寄つて、肩を貸してあげた。

「クピンちゃん・・・無理はしないで・・・。」

ローラーはゆっくりと医務室へと向かった。

「ハア・・・・ハア・・・・ローエイエ・・・・様・・・・。」

荒く呼吸をしながら、クピンは目の前の人物の名前を呼んだ。
「クピンちゃん、無理はしないで、ね？」
「ゆつくりと額の上にタオルをかける。

「じゃあリーグンさん、クピンちゃんの看病をお願いします。」「はい、分かりました。」

リーグンはローエイエに小さく敬礼をした。

そのままローエイエは、クピンとリーグンに背を向けて歩き出した。

「あの・・・ローエイエ様？」

医務室を出てこいつとするローエイエに、リーグンは後ろから声をかけた。

「ローエイエ様・・・・どちらへ？」

「・・・会いに行きたいの・・・・お兄様に。」

「しーしかしシロヤ様は今!」

慌てた様子で説明しようとするリーグンに、ローエイエはゆつくりと頷いた。

「うん・・・・分かつてる・・・・お兄様のこと・・・・。」「それならば・・・・。」「でもね！」

ローエイエはリーグンの方を勢いよく向いた。その目には、並々ならぬ決意が秘められていた。
「私・・・・お兄様に話したいことがたくさんあるのーそれに、聞いてなくともいいから・・・・私のお話を聞き流してくれてもいいから側にいたいの！」

それを聞いたリーグンは、少し表情を緩めた。

「そうですね・・・・ローエイエ様なら・・・・。」「

そして、リーグンはゆつくりと頷いた。

「ローラー様、シロヤ様の」と・・・おねじへお願ひします。」

「・・・はい！」

頷き合ひ一人。そして、ローラーはシロヤの部屋に向かつて走り出した。

「・・・。」

部屋の前で、ローラーは小さく深呼吸した。ブルーパと約束したもののは、やはり自分のせいだという意識が強いため、シロヤに会うことを多少ためらっていた。

「・・・。」

拳を握りしめ、ローラーはゆっくりと扉を開けた。

「・・・。」

田の前にいたシロヤの姿を見て、ローラーは脱力した。今まで見たことのないようなシロヤの姿がそこにあった。

「お兄・・・様・・・。」

涙が目から溢れようとしてくるが、ローラーはそれを必死に止めた。今、自分は泣くべきではないと、ローラーは必死に自分に言い聞かせた。

「わかんねえよ・・・わかんねえよ・・・。」

ただ咳き続けるシロヤに、ローラーはゆっくりと近づいていった。

「お兄様・・・。」

「わかんねえよ・・・わかんねえよ・・・。」

ローラーの声に気づかず、ただ同じことをローラーは咳き続けていた。

「・・・お兄様、聞いて。」

「わかんねえよ・・・。」

「私もブルーパお姉様も・・・もちろんシアンお姉様もお兄様のことが大好きなんだよ・・・それだけはわかつてほしいの・・・。」

しばらぐ無言になるローエイ。

「・・・それが・・・わかんねえんだよ・・・。」

城に来てから初めて、シロヤが違うことを口にした。次第にシロヤの声は、咳きから怒号に変わった。

「それが・・・それがわかんねえんだよ！――」

抑えきれずに溢れだしたシロヤの怒りに、ローエイは思わず怯えて体を震わせた。

シロヤの怒りはさらに強くなる。

「シアン様は・・・何がしたいんだ！俺を殺そうとしてるのか！？」

「それは違うよ！お姉様はシロヤ君と一緒にいたいから！」

「一緒にいたい！？殺してでも一緒にいたいって言うのか！？」

「そうだよ！」

ローエイの叫びとシロヤの叫びが交差する。

「俺が嘘さえつかなきや・・・！ランブウさんやブルーパ様やリーダン様が傷つくことはなかつたんだ！それに・・・クロトが死ぬこともなかつたんだ！」

「お兄様が選んだ道なんだから間違つてるなんて思わないで！私達はお兄様を責めたり恨んだりしないんだから！」

その言葉を聞いて、シロヤは急に黙りこんだ。

「・・・そもそも、何で俺のことを・・・。」

「お兄様がお姉様を助けたからだよ。」

しかし、シロヤは再び頭を抱えてうずくまつた。うずくまつたまま、シロヤは悲痛に似た声を上げた。

「たかがバシリスク一匹だぞ・・・あんなの倒したくらいで・・・もづ・・・訳がわからねえよ・・・。」

シロヤは次第に嗚咽を漏らし始めていた。今まで涙を流さなかつたシロヤが、急に涙を流し始めた。

「・・・お兄様・・・。」

ローエイは静かに咳いた。

「・・・私達は本当にシロヤ様が好きなんだよ？」

「信じられるかよ・・・ましてやシアン様が俺のことなんて・・・。」

「うん・・・絶対に好きだよ。それだけは分かる。」

「何でだよ・・・何でそういう言い切れるんだよー?」

怒りをローエにぶつける。ローエはこらえていた涙をゆっくりと流した。

「・・・お兄様・・・聞いて。」

口調穏やかに、ローエはゆっくりと語りだした。

「お兄様・・・聞いてほしいことがあるの。」

「聞いてほしい・・・こと?」

シロヤは顔を上げた。涙で顔をぐしゃぐしゃにしていて、髪は乱れていた。

「うん・・・シアンお姉様の話・・・五年前に起きた話・・・。」

ローエはゆっくりと語りだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8669x/>

Sand Land Story ~砂に埋もれし戦士の記憶~

2011年12月31日21時47分発行